

都留市 の
先史遺跡

(上)

都留市教育委員会

都留市の先史遺跡(上) 正誤表

ページ	行 数	誤	正
1	下から 8 行	加 部 屋	加 部 壁
9	上から 8 行	諸 緯	諸 繩
12	下から 6 行	内部にまだ	内部にまで
15	下から 3 行	前述のとおり	前述のとおり
16	上から 3 行	埋葬用と穴	埋葬用の穴
20		毎 7 図	押図 6
20		第 8 図	押図 7
20		第 9 図	押図 8
21		第 10 図	押図 9
21		第 11 図	押図 10
22		第 12 図	押図 11
22		第 13 図	押図 12
22		第 14 図	押図 13
22		第 15 図	押図 14
23		第 16 図	押図 15
23		第 17 図	押図 16
23		第 18 図	押図 17
23		第 19 図	押図 18
24		第 20 図	押図 19
24		第 21 図	押図 20
24		第 22 図	押図 21
30		(記入ナシ)	右上押字 22
30			右上押字 23
30			右下押字 24
30			右下押字 25
33	下から 6 行	菅 野 橋	菅 野 橋
35	一昔下の行	田	由
39	下から 12 行	1200m	120m
130	下から 11 行	国学院大学のOB	国学院大学OB
130	下から 9 行	住吉遺跡発掘の告書	住吉遺跡発掘 報告書

序

埋蔵文化財の保護がさけばれていながら、埋蔵文化財は土深く何千もの間、人にも知られずうずもれているものだけにその実態を知ることは至難のわざです。

農耕の折や開発時にたまたま土器片などが出土しても多くの人は、それはど気にもとめずにそのまま放置されてしまうことが往往にしてあります。

ところがこの土器片こそが遺跡の存在を知るおおきな手がかりになるわけです。

この土器片をたよりに、県の委嘱をうけて、過去2回にわたって遺跡調査が実施され市内の遺跡の概要がおぼろげながら確認されてきました。

またここ数年、数ヶ所にわたって専門家による発掘調査も実施され、少しつつ先史時代の都留市の状況があきらかになってきました。

この「都留市の先史遺跡」はそれらを基礎にするとともに多くの時間をかけて再調査をおこない都留市の先史遺跡についてあきらかにしたものです。

この書物がひろく活用され都留市の先史時代の文化を知る手がかりになるとともに今後の埋蔵文化財保護に活用され、当市の文化財保護の一助となれば幸いです。

おわりに、発行までの間の多くの方々の努力と協力に対し厚く感謝の意を表します。

昭和51年12月1日

都留市教育委員会

教育長 内藤盈成

発刊によせて

都留市に永く住んでいますと、水は流れ、公害もなく空気も澄んでいるこの土地がこよなく好きになってしまいます。

城下町だったという落着いた風情、人柄、災害のないところと良いことが多く住むにはすばらしいところです。

ふりかえって何千もの昔のことを考えてみるとやはり縄文時代、弥生時代ともに土地風土というものは縄文人にも好まれ多くの人が住んだような気がします。

それをうらづけるように、都留市の各所から土器の破片が採取され、あちこちに縄文時代の遺跡が確認されています。

このたび都留市の遺跡について詳細に調査され、その内容をあきらかにした「都留市の先史遺跡」の発行がなされたことを心からお喜び申しあげます。

これをきっかけに、市民の皆様が何千もの昔のこと興味をもっていただき縄文人が自由に山野をかけめぐった頃のことを想像してみるのも楽しいことだと思います。

またこの発行によって都留市の遺跡の内容があきらかになり、この地の先史時代を知る手がかりになるとともに、埋蔵文化財の保護に大きな役割をはたすと期待しております。

おわりにこの本の発行にあたって調査から原稿作成まで日夜をとわず努力された調査員と多くの方々の協力にたいし厚く感謝の意を表します。

昭和51年12月1日

都留市長 富山 節三

目 次

序

発刊によせて

第1章 都留市に於ける先史遺跡の研究.....	1
第2章 遺跡の概況.....	6
第1節 谷村地区の遺跡.....	9
1. 西畠遺跡.....	9
2. 桃曾根遺跡.....	1 1
3. 引の田遺跡.....	1 1
4. 宮原遺跡.....	1 2
5. 金山遺跡.....	1 2
6. 穴口遺跡.....	1 3
7. 天神山遺跡.....	1 3
8. 住吉遺跡 付住吉遺跡発掘調査報告書.....	1 4
9. 十二湖海戸遺跡.....	3 3
10. 細野遺跡.....	3 3
11. 上河原遺跡.....	3 3
12. 大堰遺跡.....	3 4
13. 城の腰遺跡.....	3 4
14. 道生堀遺跡.....	3 4
15. 深田遺跡.....	3 4
16. 鷹の巣遺跡.....	3 5
第2節 木生地区的遺跡.....	3 6
1. 千の宮遺跡.....	3 6
2. 神出遺跡.....	3 7
3. 桃園遺跡.....	3 9
4. 樱現原遺跡.....	3 9
5. 中谷遺跡 付中谷遺跡発掘調査報告書.....	4 0
6. 松葉遺跡.....	8 3
7. 原 遺跡.....	8 3
8. 下久保遺跡.....	8 3
9. 中溝遺跡 付中溝遺跡発掘調査報告書.....	8 4
10. 古宿遺跡.....	1 2 5
11. 大棚遺跡.....	1 2 5
12. 美通遺跡.....	1 2 6
13. 生出山山頂遺跡.....	1 2 9

あ と が き

第1章 都留市に於ける先史遺跡の研究

都留市は、昭和29年4月29日、谷村町、禾生村、東桂村、宝村、盛里村の一町四ヶ村が合併して発足した新市である。

山梨県の東南部に位置し、東は道坂峠を境に南都留郡道志村に、西は同郡西桂町および富士吉田市に、南は同郡忍野村に、北は田野倉千の辻を境に大月市大月町に高川山、越ヶ鳥屋山を境に大月市初狩町、笛子町に接しており、東西20.5km、南北17.5km、面積161.97 km²で、南北は山で囲まれ、東西に開けた小都邑である。

標高は中心地で490m、周囲は1000m以上の山々に囲まれ、中央を中山湖に源を発する桂川（相模川上流）が流れ、この流水に沿って二級国道吉原一大月線と中央高速自動車道が、そして富士急行線が並行して走っている。

北緯35度33分53秒の地点にあるので、本来は温暖地帯であって気温も温暖であるべきだが、標高450m以上の富士山麓の一部を構成する地帯にあるので、高原性の気温となり緯度の気温より低温である。

前述の如く、関東、中部山岳地帯、および東海の接点に位置しているので、出土する先史遺物も、関東編年を利とするもの、又長野編年を利とするもの、或いは又東海編年を利とするものと極めて多彩で興味深い地域と思われるが、遺憾ながら未だその全貌を明らかにするに至っていない。

当地の考古学的遺跡の記録は「甲斐口志」巻の53に東桂の「篠丘塚」及び巻の54に盛里朝日馬場の古墳「陵」の記事がみえるものが、最古唯一のものである。

明治年間に入るや、明治10年のE.S.モースの大森貝塚発掘を機とし、幾多の先駆者が県下の遺跡調査に入縣し、当地にも足を踏み入れることはあったが、本格的調査は一度も行われることはなかった。

明治33年7月刊行の「日本石器時代人民遺物発見地名表」にも甲斐国部として27個所の遺跡が登録されているが、当地のものは皆無である。

僅かに本県考古学のパイオニアである仁科義男氏が、坪井正五郎博士の知遇を得明治41年東京人類学界に加わったことが、その著「甲州考古余滴」に明らかにされているにすぎない。

大正年代に入ると、谷村高女教諭羽田一成氏が南都留郡下の考古通信を「考古学雑誌」に三回にわたり発表、当地の宝一加都屋、大幡一大野、古宮地、下大幡一御太刀の遺跡および遺物を紹介している。

戸沢正蓮寺住職 戸沢徳来氏が、鳥井龍蔵、大山 柏、八幡一郎の諸氏と親交を有し、主として戸沢、法能地区の遺物を蒐集、貴重な資料を今に残しているが、積極的な学術発掘までを行なうに至らなかった。

羽田一成氏は又、国史講習会刊行の月刊雑誌「甲斐史壇」昭和元年正月号に「神社と石器との関係」についての論文を掲載、南都留郡下の石碑、石器等の神格化を、採取地名と共に紹介しているが、当地関係の記録は下記

の通りである。

1. 三吉村宮原生山神社の石俸
2. 盛里村字朝日馬場石船神社の石皿、石俸
3. 同村字奥繩御岳神社の石槍
4. 谷村町上町秋葉祠内道祖神の石俸断片
5. 三吉村法能、寺後の山中にある石俸（里人オヒシリサンと称し水の神を崇むるもの）
6. 開地村郷社熊野神社境内石鎚原料品並磨石斧、土器片等
7. 宝村字厚原墓地附近大六天を祭る石小祠なる石俸
8. 同村下大幡小字ミタチ高部五作氏屋敷神の石劍
9. 不牛村字大棚なる山神祠の石俸
10. 同村小形山源訪神社趾の石斧、土器片
11. 同村田野倉村社俗称センノミヤ境内土器片多数

昭和3年には羽田一成、仁科義男両氏が東京帝國大学編「日本石器時代人民遺物発見地名表」五版に前者が76ヶ所、後者が44ヶ所の遺跡を報告しているが、当地関係のものとしては下記の47ヶ所である。

1. 谷村町新町、上町	土器、石俸、弥生式土器
2. 城のコシ	土器、石斧、弥生式土器
3. 家中	土器、弥生式土器
4. 深田	土器、弥生式土器
5. 横吹	土器
6. 上天神町	土器
7. 遺生堀	石俸
8. トクシゲ	石俸
9. 三吉村法能スミヨシ	土器、石器、弥生式土器
10. 同 ミヤシロ	土器、石俸
11. 近ノ田、センザハ	土器、打石斧
12. 玉川、穴口、ミネカイド、松木沢	土器、石鎚、石斧、弥生式土器
13. 戸沢	土器、石斧
14. 開地村、小野、熊野神社附近	土器、弥生式土器
15. 細野大入山	土器
16. 盛里村奥繩ハラアケヤマ	石鎚、石槍
17. 同日カゲ	土器
18. 同日向	打石斧、石鎚、砾石
19. 朝日神門	打石斧、磨石斧、敲石、石俸
20. 同川岸	打石斧

21. 旭馬場小学校地	土器、石斧、石俸
22. 大平、中平	土器、弥生式土器
23. 同マンゼ	土器、
24. 曾幾竹原道志	土器、
25. 東桂村、十日市場、大石金	土器、石錐、石皿
26. 同、バンハクネ	土器、石錐
27. 同、ババフネ	土器、
28. 同、山ナシ	土器、
29. 山梨マルビの上	土器、
30. 夏狩長慶寺続キ	土器、石器
31. 同下のハラ	土器、
32. 鹿留発電所放水口	土器、
33. 禾生村、田野倉先の官	土器、
34. 同 中野	土器、石器
35. 同 古川渡	土器、
36. 小形山松葉	土器、
37. 同、フルヤド	土器、砾石
38. 同、大タナ	土器、弥生式土器
39. 同、菖蒲沢	土器、石器
40. 同、ツボマツ	土器、石器
41. 宝村、下大幡ミタチ	土器、磨石斧、石錐
42. 同、加部屋	土器、石俸、石皿
43. 同、広教寺	土器、
44. 川棚	土器、
45. 宝村、厚原、牛の鼻	土器、弥生式土器
46. 同、牛石	土器、石俸、弥生式土器
47. 金井、御枝山下	土器、

昭和3年には宝小学校建設時発見された住居址について「甲斐国南都留郡宝村の遺跡」を羽田氏が、「史蹟名勝天然記念物」に、仁科氏が「南都留郡宝村発見の史前住居址について」を「山梨教育」に発表している。

昭和5年、仁科氏は「桂川沿岸先史民族の遺跡」上・下を科学画報に発表しており、昭和10年にはその著「甲斐の先史竪原史時代の調査」に都留市内遺跡として、「千の宮」「中野」「古川渡」「松葉」「大棚」「菖蒲沢」「坪松」（以上旧禾生村）「新町」「城之腰」「家中」「深田」「横吹」「上天神」「道生塚」「徳重」（以上旧谷村町）「興繩アケ山」「同日向」「同日影」「朝日神門」「同川岸」「同馬場」「同大平」「同センゼ」「同曾幾」（以上旧盛里村）「法能」「ミヤシロ

」「疋の田」「玉川」「戸沢」「宮原」（以上旧三吉村）「小野」「細野大入山」（以上旧開地村）「大幅ミタチ」「同カベヤ」「同川棚」「厚原」「牛の鼻」「同牛石」「金井御枝山下」「上大幅」「平栗」（以上旧宝村）「十日市場大石金」「夏狩長慶寺統」「夏狩下ノ原」「鹿留発電所附近」（以上旧東桂村）と計46ヶ所の遺跡を報告しているが、発掘調査は一度も行われることなく戦前は終った。

戦後昭和41年、市文化財審議会制度が布かれるや教育長定月金太郎、審議会々長羽田富士雄、審議員渡辺長重、遠藤匡彦、市役所産業課小林安典の諸氏が銳意市内の遺跡調査に当り、昭和37年県埋蔵文化財包蔵地調査には34ヶ所の遺跡を確認報告、昭和47年度調査には57ヶ所の遺跡を確認調査している。

この間昭和27年には法能天神山、志村德雄氏畑から敷石遺構の発見があり、33年には住吉地区から、後に都留市文化財第3号に指定された縄文中期加曾利E式完形甕が発見され、35年には盛里旭小学校校庭拡張工事の際敷石遺構3ヶ所が発見されたが、何れも耕作又は土木工事中の発見であって遺憾ながらその詳細は不明である。

昭和39年には都留文科大学に考古学研究会が発足、43年には宝「久保遺跡」を発掘、特筆すべき成果はあげることは出来なかったが、当市における最初の学術発掘としてその労を多とすべきである。

昭和39年には、都留市教育委員会が発掘主体者となり、同市「古渡」の遺物包含地の発掘調査を行ったが、「県下初の地方公共団体による考古学調査であり、文化財保護法施行以来地方団体が行った最初の事例として特筆すべきものである」^(註1)。

現在県下考古学調査の先進地として、自他共に誇る都留市の考古学調査の萌芽はこの時既にめざえたものと先人の労を多としたい。

39年3月には「都留市下夏狩」「十日市場」同年7月には「小形山中谷」が中央自動車道建設事前調査として、仁科義男氏を団長とし、立正大学文学部、久保常晴教授及び同坂詰秀一講師と考古学研究室員及び山梨県側から山本寿々雄学芸主事が当り、当市よりも前記羽田、渡辺、遠藤の三氏が参加発掘調査が行われた。

岡俊彦、加藤邦雄、坂詰秀一の諸氏が「発掘調査の実施結果に基く発掘調査報告書」にその成果を報じている。坂詰秀一氏は更に又「都留市小形山に於ける縄文晩期配石遺跡の調査」を甲斐考古8号に掲載している。

昭和39年発足の都留文科大学考古学研究会は、市内及び県下各地の遺跡調査を行い、東八代郡中道町米倉山遺跡の発掘調査、並崎市円野町宇波円井遺跡の発掘調査、長野県下の踏査、神奈川県下の発掘調査に参加し着々とその実力を養い、昭和43年2月には市内宝「壁谷」「久保」遺跡の発掘調査を行い、46年2月にも再度同地の第2次発掘調査を行った。その成果については報告書「久保、壁谷遺跡」に詳しい。

昭和46年7月には市教育委員会が都留文科大学考古学研究会、桂高校社会部、吉田高校舟津分校社会部生徒諸君の応援を得て法能「住吉遺跡」の発掘調査を行い、

はじめて住居址二軒を発掘し、当市に於ける縄文中期加曾利二期の貴重な資料を得た。

昭和47年には小形山「中谷遺跡」を都留文科大学考古学研究会に発掘調査を依頼、縄文後期、晚期遺跡を究明、学界に注目された配石遺構内出土の土偶を得た。^{註1}

翌48年には小形山「中構遺跡」を文大考古学研究会、市青協の若い人達の応援を得て発掘し、住居址5軒を発掘、他に1軒を確認、縄文中期勝坂期の文化を究明すると共に、またまた学界に注目された蛇体装飾を有する中期土偶頭部を得、県下に誇る考古学研究先進地の基礎を確立した。^{註2}

都留市先史遺跡研究の歴史は上記の如くであるが、本書は現在確認されている市内57個所の遺跡について、それまでの行程、遺跡の地形、出土遺物の概要、最近の研究結果等について重点的に記録したものである。

併しながらこの種の調査は単に都留市のもの調査に終ることなく、隣接市町村の協力を得て、少くとも郡内を以て一単位とすべく今後の調査に期待するものである又從来市内に於て刊行された発掘調査報告書は都留文科大学考古学研究会刊行の「久保、壁谷遺跡」都留市教育委員会発行の「住吉遺跡」「中谷遺跡」「中構遺跡」の4冊にすぎないがいずれも発行部数も僅少で、研究者の要望に応じ得なかったので、本文遺跡紹介の文中にその主要部分を再録した。山梨県東部、郡内地方、都留市の歴史を研究する者、又おくれて来る若い人達のために、いさきかなりとも参考となれば望外の幸である。

参考文献

1. 都留市 都留市勢要観
2. 松平定能 半斐国志
3. 郷土誌—谷村小学校編
4. 仁科義男 中州考古余滴
5. 羽田一成 考古通信—考古学雑誌
6. 羽田一成 神社と石器との関係—甲斐史壇
7. 日本石器時代人民遺物発見地名表—東京帝国大学編
8. 羽田一成 甲斐国南都留郡宝村の遺跡—史蹟名勝天然記念物
9. 仁科義男 南都留郡宝村発見の史前住居址—山梨教育
10. 仁科義男 桂川沿岸先史並原史時代の調査
11. 山本寿々雄 山梨県の考古学
12. 坂詰秀一 発掘調査の実施結果に基く発掘調査報告書
13. 坂詰秀一 都留市小形山に於ける縄文晚期配石遺跡の調査—甲斐考古8号
14. 江坂輝弥 古代史発掘—土偶藝術と信仰—講談社
15. 野口喜磨

註1 山梨県の考古学—山本寿々雄

註2 古代史発掘3卷—土偶藝術と信仰—江坂輝弥—講談社

註3 " " " " 野口喜磨

第2章 遺跡の概要

我々がキャンプを張る時、水辺を選ぶことはキャンパーの常識である。

都留市内57ヶ所の遺跡も又、桂川およびその支流の段丘、または台地に、あたかもキャンパーが水辺を求めてキャンプを張るが如く存在している。縄文人も又現代のキャンパーの如く、水辺を求めて其の居を定めたものであろう。

然しながら筆者の南海の孤島における経験によれば、末闇の現住民は決ずしも水辺に住まない。片道15分、往復30分も水源から離れた処に平気で住んでいる。時間的観念のない、従って距離的感覚にも乏しい彼等にとって、水辺に近いことは決ずしも居住の必須条件ではないようである。むしろ疫病の巣である水湿の地、出水のおそれのある水辺は快的な居住区ではないのかも知れない。

当初人類にとって、生存のために水は必要であったが、生活のためにはそれ程必要なものではなかった。現代人の物差をもって往時を計ると我々はとんでもない誤りをおかすかも知れない。我々は更に水辺から遠く離れた地域に彼等の安住の地を、搜さなければいけないのかも知れない。

然しながら現在までに我々が知り得た市内の遺跡は、何れも桂川本流及び支流に沿い、又支流が桂川に注ぐ地点には決ず遺跡が発見されている。

桂川本流の沿岸に属する遺跡としては「千の宮」「権現原」「中溝」「原」「松葉」「下久保」遺跡（以上禾生地区）「鷹の巣」「遺生堀」「城の腰」「大堰」遺跡（以上谷村地区）又支流沿岸としては、朝日川流域に「落合」「神門」「尾崎原」「日向」遺跡（以上盛里地区）があり、芦野川、玉川流域には「上河原」「細野」「十二割海戸」「住吉」「宮原」「西畠」「桃曾根」「金山」「穴口」遺跡（以上谷村地区）が、大幡川流域には「高畠」「大野」「農田」「古宮地」「久保」「號谷」「牛の鼻」遺跡（以上宝地区）が、鹿笛川流域には「古渡原」「久保海戸」遺跡が、柄杓流川流域には「向原」「馬場舟」「おいしかね」「御所海戸」「高子」遺跡（以上東桂地区）がある。又その他の遺跡もすべてそれ等の川に注ぐ支流又は小沢に臨み、山頂遺跡である生出山山頂遺跡にも、近くに如何なる干天にも濡れたことがないと云い伝える沢があり、往時は山頂にも池があって當時水をたたえていたと伝えられている。

標高は市内の中心地で490mの高地にあるので最低の「千の宮遺跡」に於て380m、最高は「生出山山頂遺跡」の701.4mである。市内遺跡分布図に各遺跡の標高を記載しておいたので参照されたい。

市内で発見された造構は、発掘にかゝる住居址が「住吉遺跡」で2ヶ、「中谷遺跡」で2ヶ、「中溝遺跡」で5ヶ、耕作又は工事中発見のものが「中溝遺跡」で1ヶ、「尾崎原遺跡」で散石造構が3ヶ、「法能天神山遺跡」で敷石造構が1ヶ、「原遺跡」および「大棚遺跡」で土師の住居址各一がその總てである。

中溝、中谷の両遺跡は禾生地区小形山を流れる桂川川岸段丘上の大原台地に位置

し、前者は台地中央に、後者は大原台地を望む高川山山麓にある。

「中溝遺跡」の住居址は、縄文中期勝坂期のもので、「中谷遺跡」の住居址及び敷石造構は、縄文後期加曾利B期のものである。"

「尾崎原遺跡」は桂川の支流である朝日川流域の段丘上に位置し、旭小学校増築工事中に3ヶの敷石造構が発見されたが、正確な調査を行われないまま、破壊されてしまった。

「住吉」「法能天神山」の両遺跡は菅野川の段丘上に位置し、前者が川沿に、後者は山麓にある。

「住吉遺跡」の住居址は、縄文中期加曾利E期のものであり、一軒と $\frac{1}{2}$ 程度の2軒目の住居址を発掘したが、庭園の中にあるため全部を発掘出来なかった。

「法能天神山遺跡」発見の敷石造構は耕作中偶然発見されたもので、埋め戻され現在はその位置のみが確認されている。

「原遺跡」の土師住居址は、大原台地耕地整理作業中ブルドーザーが陥落したため偶然発見されたものである。

「大堀遺跡」のそれは、林道開設工事の際切り取った桑園の断面から昭和47年中谷遺跡発掘の際調査員が発見したものである。

以上の如く知られた遺構はなはだ僅少であり、発掘調査も緊急調査が多く、種々の制約により遺跡の一部を調査したにすぎない。従って今後の本格的発掘調査によらなければ都留市先史時代の全貌を究明することは容易でないが、将来の研究にまつこととし、以下各遺跡について昭和40年代末におけるその概要を記録したいと思う。

図全市留都

都留市内遺跡分布図



第1節 谷村地区の遺跡

1. 西畠遺跡（都留市上戸沢字西畠）

戸沢川左岸河岸段丘上の先端に位置する遺跡である。富士急行バス（都留市駅発上戸沢行）上戸沢終点を東に約100m行くと小さな森があるが、その森の西側の畠に遺跡はある。正確な地番は上戸沢503（小林伝平）である。

同地からは、古く大正年間から土器片、石器類の出土が知られ、小・中学生の盗掘が甚だしいので、昭和46年6月に市教育委員会が子供達の盗掘の跡を精査した結果、多數の土器片を得たが前期諸磯期のもののみで、諸磯の単純遺跡と思考される興味深い遺跡である。尚3点の関西系（北白川式）土器片と思われるものも出土している。

附近の子供達が、同地域から採取した土器片、石匙、石錐等を所有し、小林氏が採取した原形を想定し得る鋸歯文を有する曾利V式の深鉢（押図1）を市教育委員会が保有している。

又下戸沢、正蓮寺住職、戸沢独来氏が、大正年間から採集した土器片、石器類を多数保有しているが、遺憾ながら出土地点、出土状況等余り明確でない。

南に隣接する金山地区からは、加曾利E式、加曾利B式土器片が採取されており昭和46年10月30日の調査では、同地の渡辺英雄氏が磨製石斧頭部破片、及び石皿を耕作中採取して保有している。

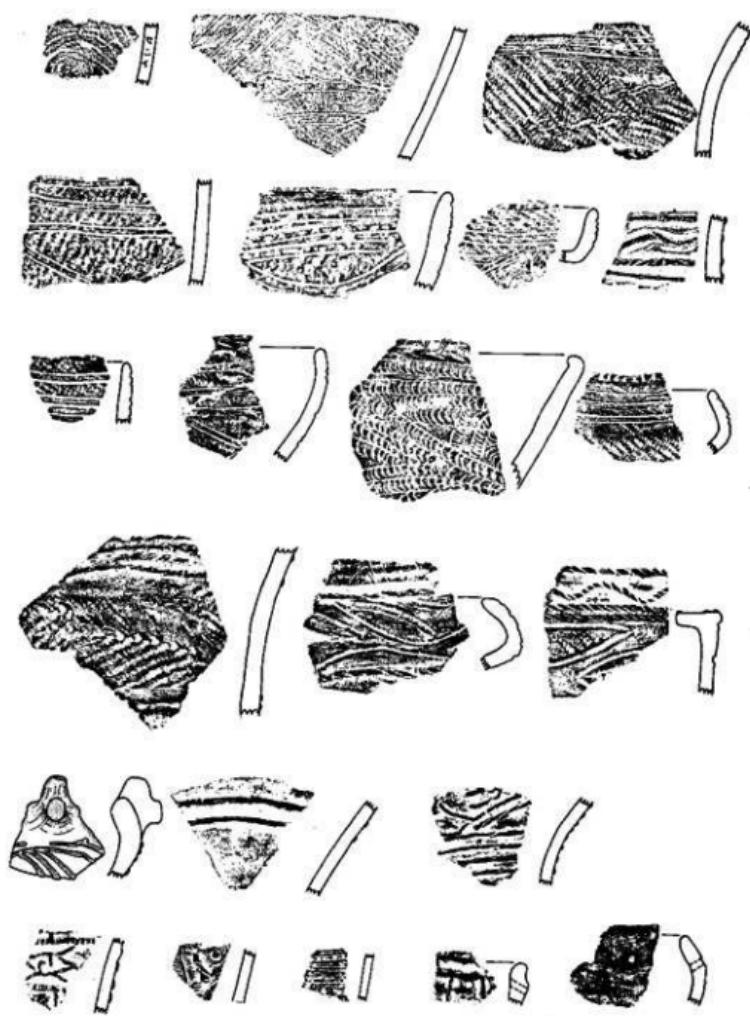
東に接続する水頭地区からは現在まで何も発見されていない。万有製薬建設工事の際も数次の調査にもかかわらず、焼土の堆積を一ヶ所発見したのみであったが、衆落址の想定される絶好の台地であるので継続して調査の要ある地域である。

盛里に通ずる天神峠の頂上にある水神さまを祭る小社の礎石は、山麓の先端を利用して作った古墳の露出した石棺等の石を利用したものとも考えられるので今後調査を要するものである。近くの畠から円筒はにわの出土を伝える者もあるが未確認である。幸い宅地造成も余り進んでいないので機を見て本格的発掘調査の望まれる遺跡の一つである。



押図・1

拓影・1



拓影·2

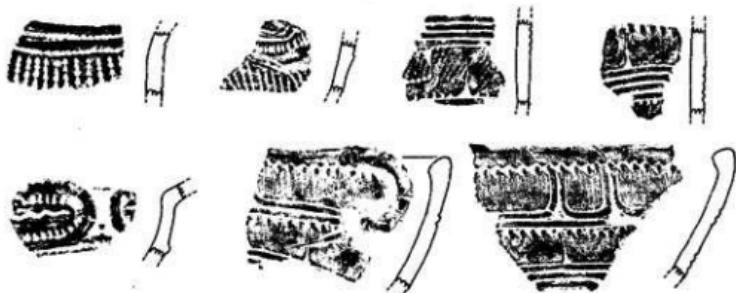
2. 桃曾根遺跡（都留市下戸沢字桃曾根）

戸沢川の左岸に沿む山裾の台地にある遺跡である。前記上戸沢行バスで桃曾根停留場で下車した右手の台地である。引の田部落の入口に当り、古くから遺物の出土する地域として知られ、附近の人達の話を総合するに、住居址、炉址、横穴等があつた模様であるが積極的調査の行われないまゝ、昭和46年2月、中央自動車道横町オンラップ工事の際知らぬ間に採土され遺跡の大半は完全に破壊されてしまった。

その際地元の谷内清志氏の採取した高杯破片が復元されて市役所に保管されている。

引の田部落に続く地域が桑園となって残っているが、現在まで遺物は何も発見されていない。

採取された土器片は、勝坂、加曾利Eと中期のものが大部分であるが、最も多く採取されたものは勝坂期のものである。桑園の東側の台地から黒浜の破片が只一片であるが発見されており興味深い遺跡の一つである。



拓影・3

3. 引の田遺跡（都留市法能字引の田）

桃曾根遺跡を西に山道を登ると引の田部落に達する。二十六夜山に登る山腹に部落最奥の人家が点在するが遺跡は山麓の中央を流れる小沢をはさんで点在する。

現在は共同暮地のある附近から表採出来るが僅少である。地元の安富光蔵老人が耕作中採取した土器片を所有しているが、諸磯B、勝坂、加曾利Bであるが、墓地より上部の沢の南側の台地から採取したものである。老人も沢の右岸に遺物は多く発見されると言っているが、戦中、戦後開墾された畑も次第に耕作されることなく、原野に戻りつつあり、雑木および雑草に覆われ、表採は困難であるが調査を継続する要のある遺跡の一つである。

4. 宮原遺跡（都留市法能字宮原）

音野川が玉川（戸沢川）と合流するデルタ地帯の専徳寺の西側の地域を占める遺跡である。現在は桑園及び宅地となっているが、中央を流れる用水路の周辺から遺物が採取される。之は同用水路掘削の際掘り起されたものと思う。

現在までに採取された土器片は、諸磕B、C、勝坂、曾利及び堀の内である。昭和49年4月の現地調査で地元の武井 勇氏が自宅の庭から堀の内期の土器片を探取しているので、遺跡は谷村第二小学校附近まで続くものと思われる。住吉遺跡に続く台地の東端に位置し、弥生の遺跡の存在も考えられる地形であるので今後一層注意して調査を継続する要のある地域である。

5. 金山遺跡（都留市玉川字金山）

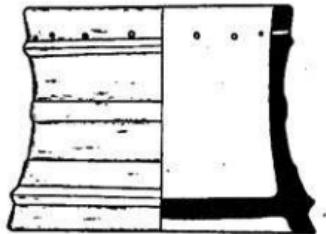
玉川（戸沢川）の右岸に臨む山麓の平地で、毛川金山48番地牛田 寛氏の畑の中にある遺跡である。昭和49年4月、牛田氏が水田の灌漑用井戸を掘った際、有孔鍔付土器（押図2）を採取、教育委員会に届出があったために知られた新遺跡である。

玉川に臨む南面のゆるやかな傾斜をした山麓で、集落の想定される地形であるが周囲は水田となっているので遺物の表採は困難である。

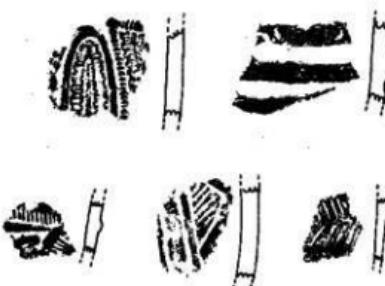
有孔鍔付土器と同時に出土の土器片は、勝坂期のもののみであり同土器の器形から推しても勝坂期のものと思われる。

内部にまだ朱を塗った痕跡があり、小形の珍らしい器形であるので、有孔鍔付土器の用途についても再考を要する貴重な遺物と思われる。器形、朱の塗付から考えて一応供獻用の七器と思考すべきと思われる。

教育委員会に於て掘堀中の井戸および周辺を調査の結果、地表下70cm程の処に土師の包含層があり、100cm程の処に縄文の包含層があり、ロームまでは 120~130cm である。将来後述の「穴口遺跡」を含めて調査を要する遺跡である。



押図・2 有孔鍔付土器 縄文時代中期
(玉川出土)



撮影・4

6. 穴口遺跡（都留市玉川字穴口）

金山遺跡の北方に接続する山麓の中腹にある遺跡である。古く羽田一成氏により指摘された遺跡であり、戦前敷石住居が出たと伝えられているが詳細は不明であり現在では遺物の表探は困難である。生出山の北麓にあたる遺跡があるので生出山山頂遺跡との関連を考えながら調査を要する遺跡と考えられる。

南面の玉川の流れに面した絶好の台地である。現在までに採取された遺物は、諸磯C、勝坂、加曾利E、土師および須恵器の破片である。

7. 天神山遺跡（都留市法能字天神山）

従来「法能遺跡」として登録されているが小字名を用い「法能天神山遺跡」と改称した。菅野川の水系に近い標高540mの山裾に存在する遺跡である。法能部落から引の田部落に通する天神峠に至る登り口の左手の山裾の台地である。

昭和27年地主志村徳雄氏が耕作中敷石遺構を発見、完形石俸1、石俸破片1、土器若干を得た。

「県立富士国立公園博物館研究報告」第4に山本寿々雄氏が「長径3.79m、短径3.10m、床面は表土より50cm、更に18~20cm掘り抜いた穴があり（4ヶ）柱穴とも考える特異な遺構である。堅穴内に石を敷き、炉は略々中央にあり、石俸2本が横位、炉の近くにあった。伴出土器は堀ノ内II式及び加曾利Bの古いもので附近の包含層からは勝坂式土器の破片があった」と伝えている。

敷石遺構の一段下の志村徳雄氏宅地内からも勝坂期の土器片が採取されているが、傾め左下に「住吉遺跡」を見おろす絶好の台地で隣接の「かすみ海戸」地域からも耕作中黒曜石製の石鐵が多量に採取されたことを地元の人達が伝えているが、将来本格的調査の望まれる地域の一つである。配石遺構は埋戻され現在はその位置のみが確認されている。

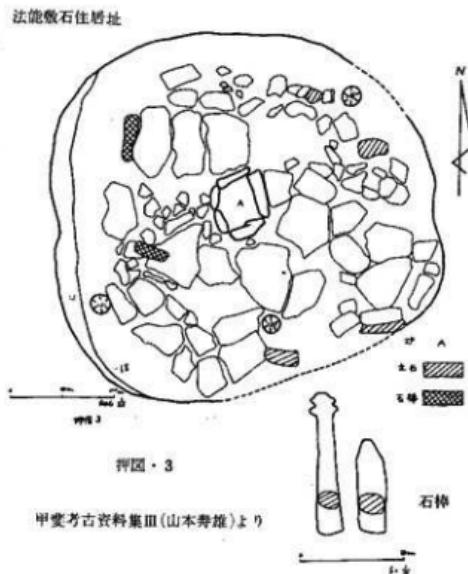


図3

甲斐考古資料集(山本寿雄)より

8. 住吉遺跡（都留市法能字住吉）

菅野川右岸の住吉山と、対岸の円通山の間に存在する日当りの良い平地に存在する遺跡で、都留一中から市道法能一宮原線を東に約300m行った道路北側の法能453番地杉本旗明氏敷地内にある。

法能地区は從来道路南側の台地から層々土器片が採取され、戦後の耕地整理の際底部の一部を欠く完形の加曾利E式甕（押図4）及び大型土器片の出土があり、又東南500mの天神山志村德雄氏の畑からは前記の敷石遺構、石棒の発見があり、注目されていた地域であったが、道路北側は菅野川の川床となつた処と思われていたので調査の対象と考えなかつた盲点でもあった。

偶々昭和46年6月、地主の杉本氏が庭の一隅に塵芥処理穴を掘った処土偶の頭部を発見したので、同年7月市教育委員会に於て発掘調査を行い、円型プランによる堅穴住居跡2軒と、特殊遺構3ヶを発掘した。

以下報告書「住吉遺跡」を抜粋すると次の如くである。



押図・4

第1章 序 説

第1節 調査の経過（省略）

第2節 遺跡の位置と周囲の状況（省略）

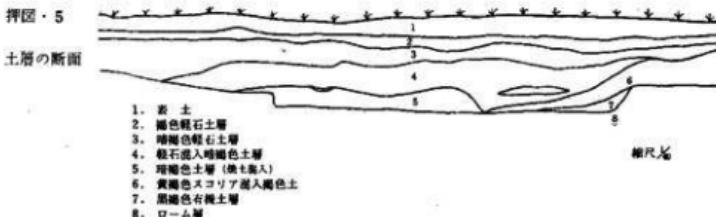
第2章 調査の概要

第1節 調査日誌（省略）

第2節 層 位

本遺跡は、菅野川右岸の河岸段丘上に位置しており、下層より岩石層、砂岩層、そしてローム層の堆積により形成されている。

ローム層の上には、富士火山の噴出した黄褐色のスコリアを含む黒色土あるいは褐色土層が一層、うすく覆っており曾利III～IV期に一度、大きな活山活動があったことが明らかである。各層の土層の状態は押図5に掲げるとおりである。



第3節 遺構

遺構は、発掘地点中央部に1・2号の二つの重複した住居址と、その南側に直径約1mの小堅穴が三箇所発見された。しかし北側の2号住居址は、半分以上の面積が庭園となって発掘不可能のため、その四分の一あまりを発掘して調査を終った。

1号住居址

本址は、この調査の起因となったもので、地主が塵芥処理用の穴を掘った際発見したもので、調査以前にその存在が知られていた。

この住居址は、直径5.2mのほぼ円形であるが、2号址構築の際に北側を少し切りとられてしまっていて、北側の立上がりの部分を消失している。

また塵芥処理穴が、住居址東側床面を破壊しており、完全な形をとどめているのは南側のみである。中央北寄りに四枚の安山岩を組合せて作った一辺90cmのほぼ正方形の石囲いの炉があり、これをとりまくように5個の柱穴が発見された。出入口は南側に階段状に作られたステップが残っておりここには二つの埋甕用の穴があり一方には底部を欠損する曾利II式土器が埋められてあった。

生活面と床面との比高は約50cm、住居址の周囲には周溝が回っていることも確認された。

石囲いの炉は、住居の中央より北側に70cmほど片よっていた。炉内は灰層が10cm堆積し、その下部は焼土で赤く焼けている。炉址の中央部には深さ50cm余りの穴が3個並んで掘られており1番深いものは75cmであった。どの様な目的で掘られたものか不明である。そのままそばに砂岩の棒状で10cm×30cmの石が南北に置かれてあるのが発見されたが、これは食物を煮沸する際に使用された設備であろうと推察されるが、他にあまり類例をみないので、今後の調査で明らかにされるのを待ちたい。

柱穴は、押図23の如く、南北を対称軸に4個、炉址を避けるように北側隅に1個合計5個発見された。いずれも床面を70cm余り掘り下げており、直径約30cmほどであった。

この1号住居址から出土した遺物は、曾利II式の埋甕の他にこれと同期の浅鉢、壺、吊手土器破片各1点、打製石斧、半磨製石斧、石斧、黒曜石の原石、凹石などである。

本址はその出土遺物から見て曾利II～III式期の円形住居址であると言えることが出来ると思う。

2号住居址

本址は、1号住居址を切り込んで作られていることから、1号住居址よりも後の時代に作られたものであることは明らかである。

床面は、1号址より50cmほど掘り下げて作られてあった。前途のとおり、半分以上の面積が庭園の下になっており、その全貌を明らかに出来なかつたが、発掘部分から想定して直径約5m余りの円形の住居址で、周囲には周溝をめぐらしているこ

となどから、ほぼ1号址と同形のものであろうと思われる。

南側には、1号址と同様に出入口があり、階段状のステップを配し、そのそばには埋甕用と穴と思われる小穴と、底部を上にして床の中に伏せた状態で埋められたほぼ完形の甕を発見した。この埋甕の底部には、片隅に1個の穴があり、長野県から多く報告されている小児用甕棺として使われたものであろう。柱穴は、南西の隅に1個だけ発見されたが、これも床面約70cm掘り下げてあった。

2号址出土の遺物は、前述の曾利III式の埋甕以外に、大型甕の口縁破片、大型土器底部破片、凹石、石皿、石匙が出土したが、埋甕をはじめ、土器は曾利III～IV式期のものであることから、この住居址は、曾利III～IV式期のものと想定される。

小堅穴

3個の小堅穴は、発掘初日に3トレンチの角に現われた大きな石を調査していくて発見したものである。大きな石組を有するものを中心に「く」の字形に3個が並べて作られていた。これらはいずれも同時期に使用されたものであろう。

南側のものから、1号、2号、3号小堅穴として説明することとする。

1号小堅穴は、直径120cmの円形をなし、深さ25cmに掘り下げられていた。内部からは、チャート製の小型の模型石匙が発見された。この石匙は、住居址内から発見されたものに比較すると、大きさは半分しかないが、その剝離は非常にていねいで鋭い刃部にしあげられているのが特徴で、この堅穴の用途を考えるうえで非常に貴重と思われる。

2号小堅穴は、直径120cm、深さ43cm 1号小堅穴から約55cm離れた所にあるが、出土遺物から1、3号小堅穴とは全くその用途を別にしたものと思われる。

内部からは、曾利II式の大型甕の口縁部破片と、大小さまざまな種類の石、炭化した果実の外殻、骨粉などが発見された。又この堅穴は、長期にわたり火を使用したものとみて多量の炭と焼土が堆積していた。そしてそれらを總て取り除いた床面には小さな柱穴様の穴が残っているのが確認出来た。

3号小堅穴は、2号小堅穴の東側30cmのところに発見されたもので直径90cm、深さ60cmのほぼ円型の小堅穴である。

この内部からは何も発見出来なかったが、1、2号と異なっているところは、南北方向の口縁部に一对の凹部のあることである。何に使われたものかは判明しなかったが、この小堅穴の特異な用途によるものと思われる。

これら1、2、3号小堅穴は、いずれもその大きさや深さが異っており、それぞれ固有の用途があったものと思われる。発掘の際の遺物の出土状況から想像してみ

ると2号小堅穴を野外炉として使い、1号、3号小堅穴を貯蔵穴として使っていたのではないかと思われる。2号址では、まず握り拳大の石を敷き、その上に木をのせて、そして動物、くるみ、くりなどの調理物をのせて、その上から焼けた大きな石でおさえて調理をした様である。またここで調理される動物などの肉は、1号小堅穴に、果実などの多量に、長期間貯蔵できるものは、3号小堅穴において貯藏したと考えることが出来るが、今後の研究をまちたい。

第3章 遺物の概要

第1節 1号住居址出土遺物

1号住居址から出土した遺物は、埋甕（押図6）浅鉢（押図7）吊手土器（押図8）大型底部土器片などの土器及びその他多量の土器破片と、凹石（押図9）半磨製石斧（押図10）打製石斧（押図11）石匙（押図12）黒耀石（押図13）等の石器及び石器被片などである。

埋甕は、1号住居址南側の出入口附近の床面下に埋められていた。口縁部と底部を欠損しているが、文様から曾利III式土器と思われる。荒い条線を地文とし、その上に縱に流れる帯状の区画文で3つに区切ってある。焼成は普通で表面には火を受けた痕もみられた。

浅鉢は、口縁で内湾する無頭の土器で渦文が大胆に胸部を飾っている。胎土は荒く粗製である。

吊手土器は、把手の部分しか発見出来なかった、渦文が把手を飾っており周囲は半截竹管の連続刺突で波状に縁どっている。なお、底部はわずかに窓の整形痕がみられた。

次に炉址の西側から出土した凹石は、礫を磨いたもので、表裏ともに二つの凹部を有する。

半磨製石斧は、安山岩製であって、刃部は蛤歯型に近い磨製石斧で概型を作るための打痕が残っており、完全な磨製ではない。

打製石斧は、小型で精巧につくられており、その刃部は鋭く石匙として使用されたものと考えられるものである。石質は粘板岩である。

石匙は、模型石匙であるが刃部の片方を少し欠損している。

（押図14）は大型の横型石匙である。

黒耀石は、1号住居址南側の立上りに棚状の段を作り、そこに3個が積み重ねられるようにして置かれていた。これらはいずれも原石から剝離されたままで、手頃な大きさにして各住居に分けられていたものであろう。

この他に重要な遺物としては、土偶の頭部破片（押図15）がある。これは、調査以前に地主の杉本氏が、塵芥処理穴を掘った際、石臼いわ東側の床面上で発見したものであるが、1号址の遺物と考えられるのでここに紹介する。

眉と鼻を微かに高くもりあげ、目と口は円筒状工具により刺突して作ってあり、

頭部は巻き上げた髪型を似せてうず巻状に作ってある。なお、首の部分には二条の線がみられるが何を意図しているかは判明しなかった。

第2節 2号住居址出土遺物

2号住居址から出土した遺物は、埋甕（押図16）深鉢口縁部破片（押図17）底部土器片（押図18）その他の土器片と、石皿等の石器数点が出土した。2号址は前述のとおり庭園のためにその面積の4分の1程を掘ったのに終り、1号址に比べて出土遺物の数も少なかった。

埋甕は、2号址南側出入口の部分から出土した。底部を上にして伏せた状態で床面下に埋められており、底部には一つの穴がみられた。器形は頸部で一度くびれた土器で、文様は頸部に三本の沈線を配し、そこから底部に向って三本の沈線分が6箇所にみられる。地文は、荒い斜繩文で施文されている。

底部土器片は、大型の底部破片であるが無文のため時期の判別は困難であるが2号址内出土遺物として曾利III式のものと思える。

大型口縁部土器は、口縁部を区画文と溝文で飾られた曾利III式土器である。

石器としては（押図19）のチャート製石匙が出土した。

第3節 小堅穴出土遺物

住居址の南側に発見された3個の小堅穴は、その用途のためと思われる特殊な遺物が出土した。特に2号址においては、くるみの炭化物あるいは動物の骨なども発見された。

各堅穴についてみると1号址からは（押図20）の小さな石匙が発見された。形は横型石匙で、刃部のかなり鋭いチャート製である。1号址出土遺物はこれのみであった。

2号小堅穴からは、前述のように多量の焼土とともに曾利II式の深鉢（押図21）やその他の土器片あるいは炭化物などが出土した。

大型深鉢は、長期にわたって熱をうけていたためか、表面は赤く焼けており、かなりもろくなっている。口縁から頸部にかけての破片しか発見できなかった。

植物の炭化物は、すべてくるみであった。完全な形をとどめるものはないが、直径約2cm程の大きさのものが約20個発見された。いずれも固い外殻は原形をとどめるが、実の部分は粉状になってしまっていた。

又動物のものと思われる骨が少量出土したが、微量のためどの種の動物かは判明しなかった。

3号小堅穴からの出土遺物はなかった。

第4節 まとめ

都留市において、この時代の遺跡の発掘調査は現在まで行なわれたことがなく、

今回の調査が初めてである。発掘面積も少なく、一週間という短期間であったが、私達にとってこの地域における一般的と思えるスタイルの住居址を発掘出来たことは貴重であった。そこで今回の調査をふりかえり、成果について最後にまとめをしてみたい。

住居址は、1、2号の二軒を発見することが出来たが、いずれも縄文時代中期後半曾利Ⅲ式期のものと思われる。層位的にみると1号住居址を2号住居址が切って作られており、1号址の方が2号址より古いことが明らかである。出土遺物から時期を考えるならば、1号址は、曾利Ⅱ式の特徴を強く残しており、2号址は曾利Ⅳ式に近い傾向が見られる。

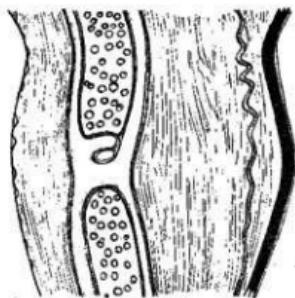
以上のことから見てこの二つの住居址が使われた時代をはっきりと区分することは出来ないが、今後周辺遺跡の調査が進められるに従って明らかにされるはずである。1、2号址ともに円形プランで周溝がめぐり、南側には出入口と思える階段状の切り込みがあり、そこには二つの埋蔵用の穴がある。1号址では、中央北寄りに石圓い炉を配し、そのそばには土器、石器が置かれていた。これらは縄文時代中期の生活を想像するに十分足るものであり、今後の研究資料として非常に価値あるものだった。又三つ的小堅穴は、住居址外の野外生活のようすを推察するに興味深い。

最後に、関東地方と中部山岳地方の中間に位置する当地の地域的性格により、両者の影響を受けている住吉遺跡の編年になたっては、土器の文様から見ると、より長野県のものに近似していると考えられ、中部編年を用いたことを註記する。

その後の調査によると同敷地内からは、掘の内、および加曾利Ⅷ期の土器及び土器片も採取されるので、縄文中期末から後期にかけての複合遺跡であると思われる。写真で見るとおり、南面の水利の良い平坦地であるので衆落の想定される地域であるので、将来本格的調査の望まれる遺跡の一つである。

住居址跡には、立正大学講師 吉田 格氏の指導で復原住居を作成、都留市史跡に指定、一般に公開されている。

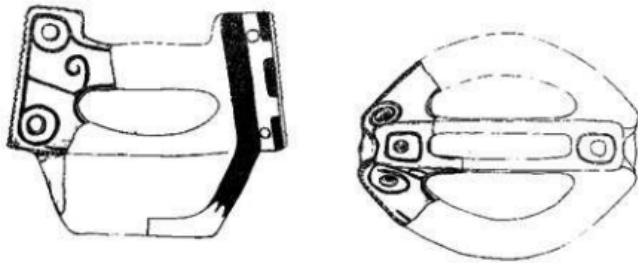
押図22、23、24、25は地主杉本氏の工場建設整地作業中採取された土器実測図である。



第7图 1号埋藏实测图

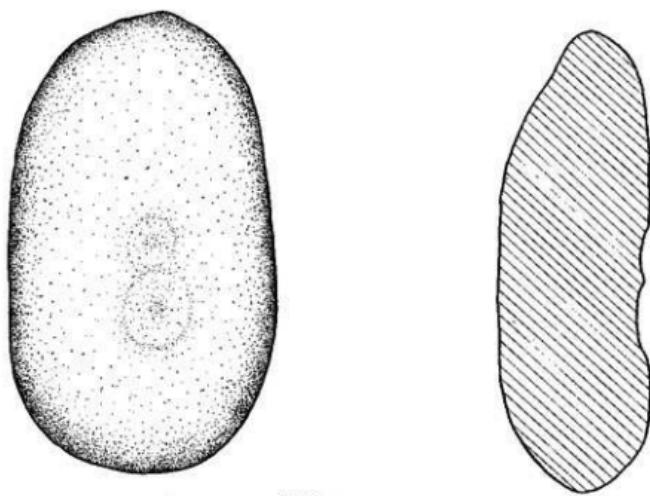


第8图 浅盆实测图

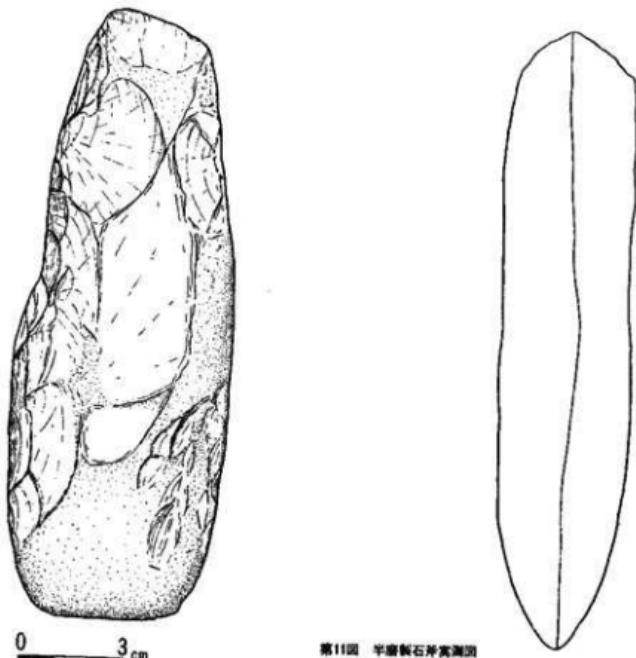


第9图 吊手土盆实测图

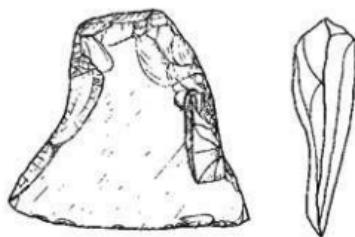
0 9 cm



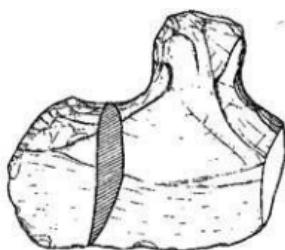
第10图 研石实测图



第11图 半磨制石斧实测图



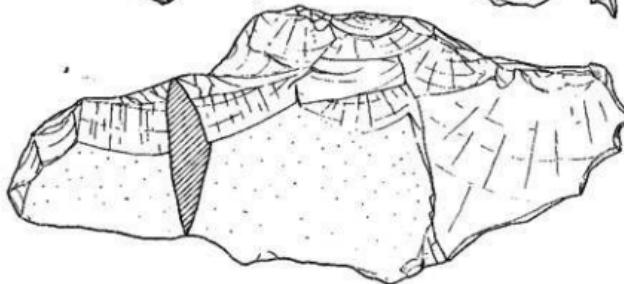
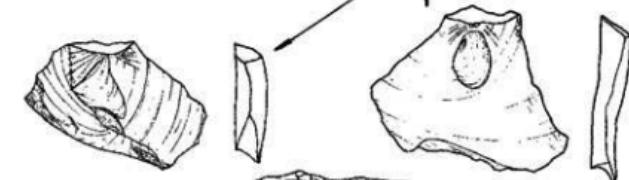
第12图 打制石斧实测图



第13图 石斧实测图



第14图 石器实测图

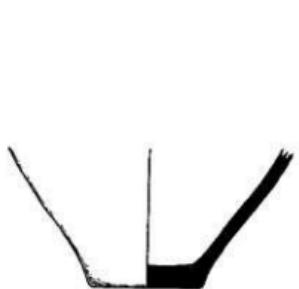


第16图 大型石斧实测图

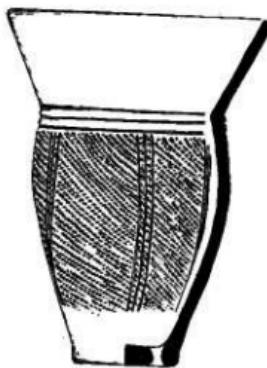
0 3 cm



第16图 土偶实测图



第19图 高领土器片实测图

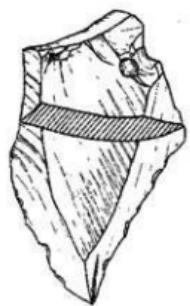


第17图 2号罐底实测图



第18图 土器实测图

0 9 cm

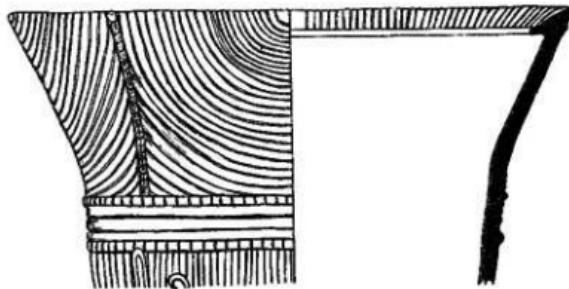


第20図 石匙実測図



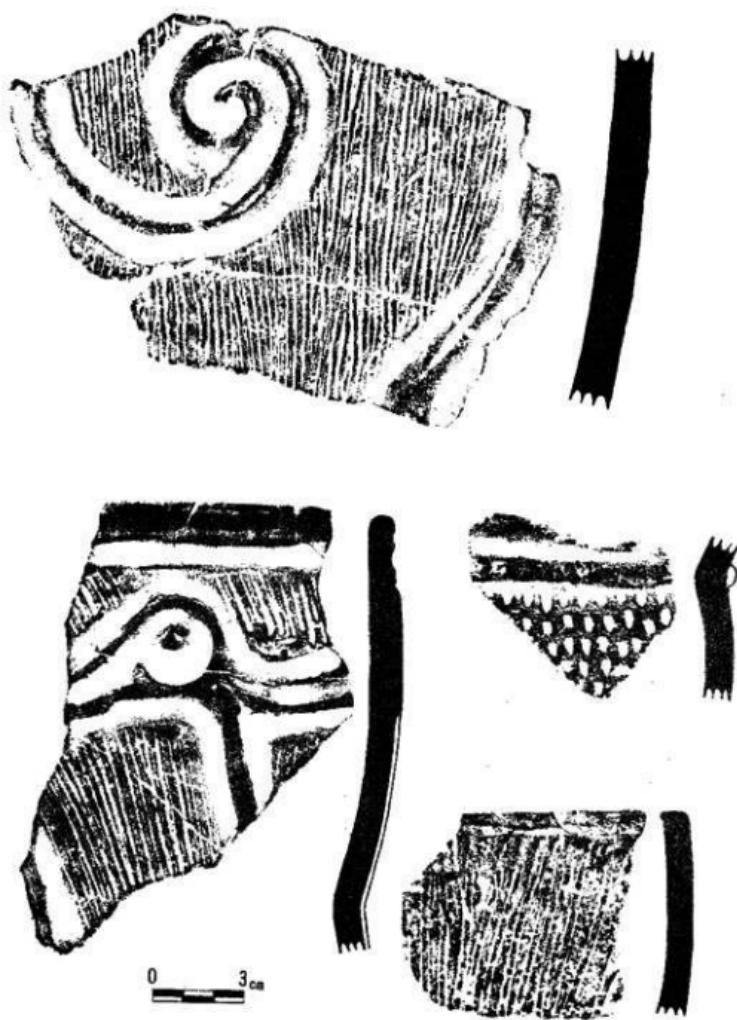
第21図 小型石匙実測図

0 3 cm

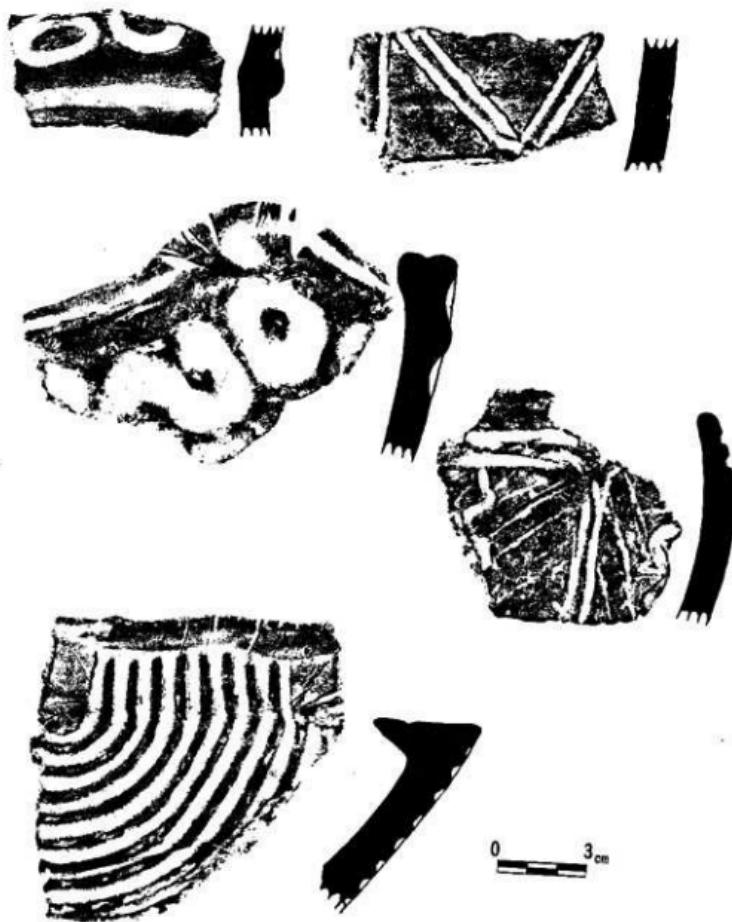


第22図 土器実測図

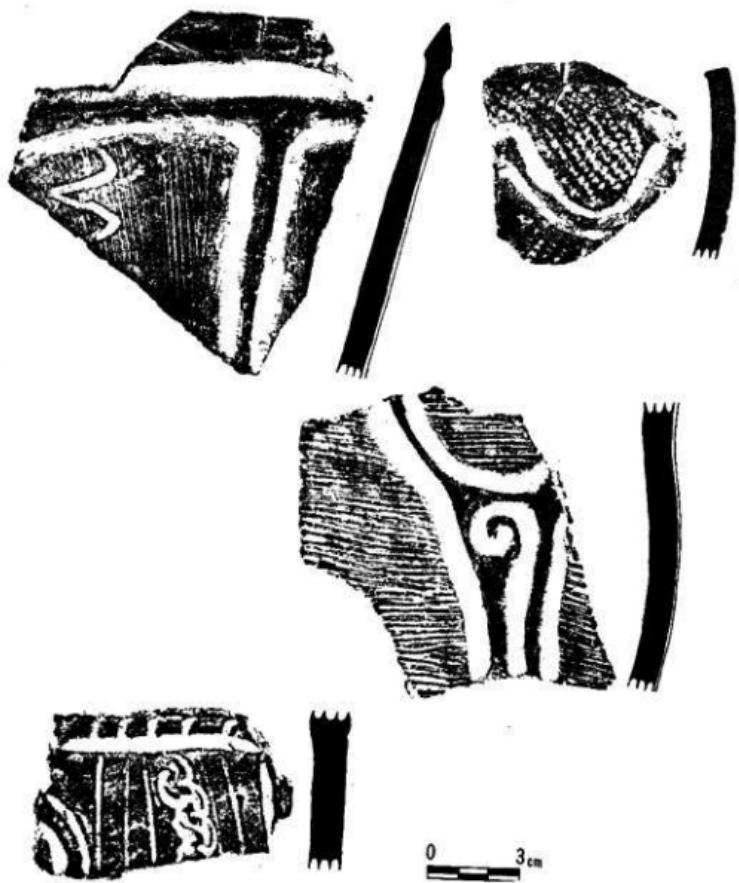
0 9 cm



1号住居址出土土器拓影



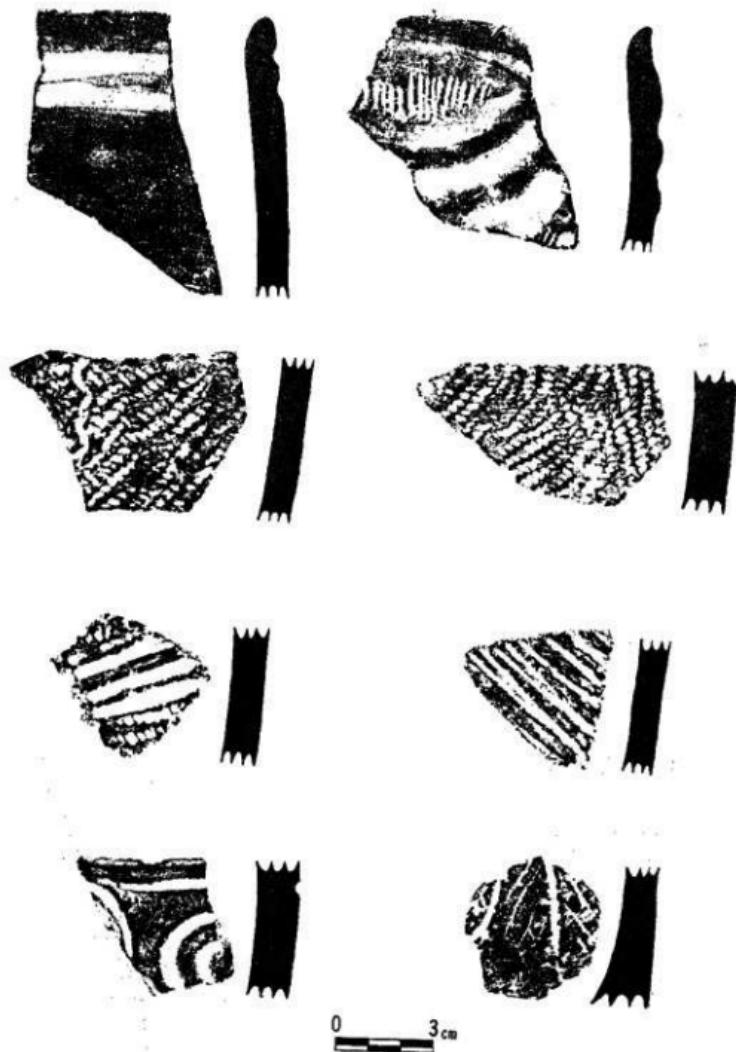
1号住居址出土土器拓影



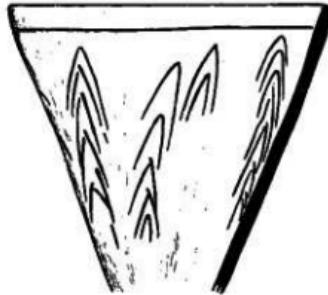
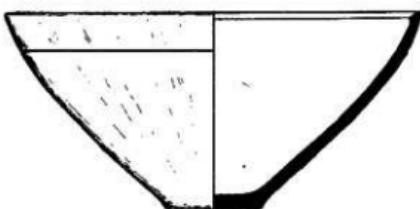
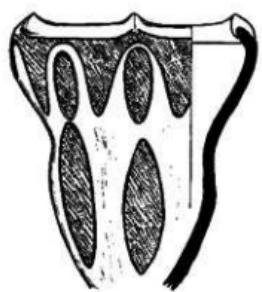
1号住居址出土土器拓影



2号住居址出土土器拓影



2号住居址出土土器拓影



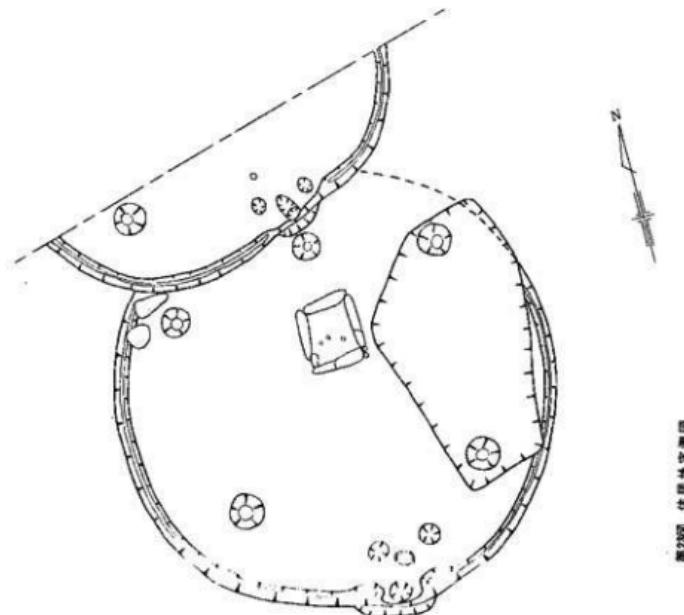
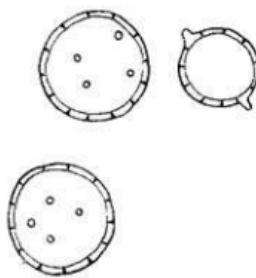
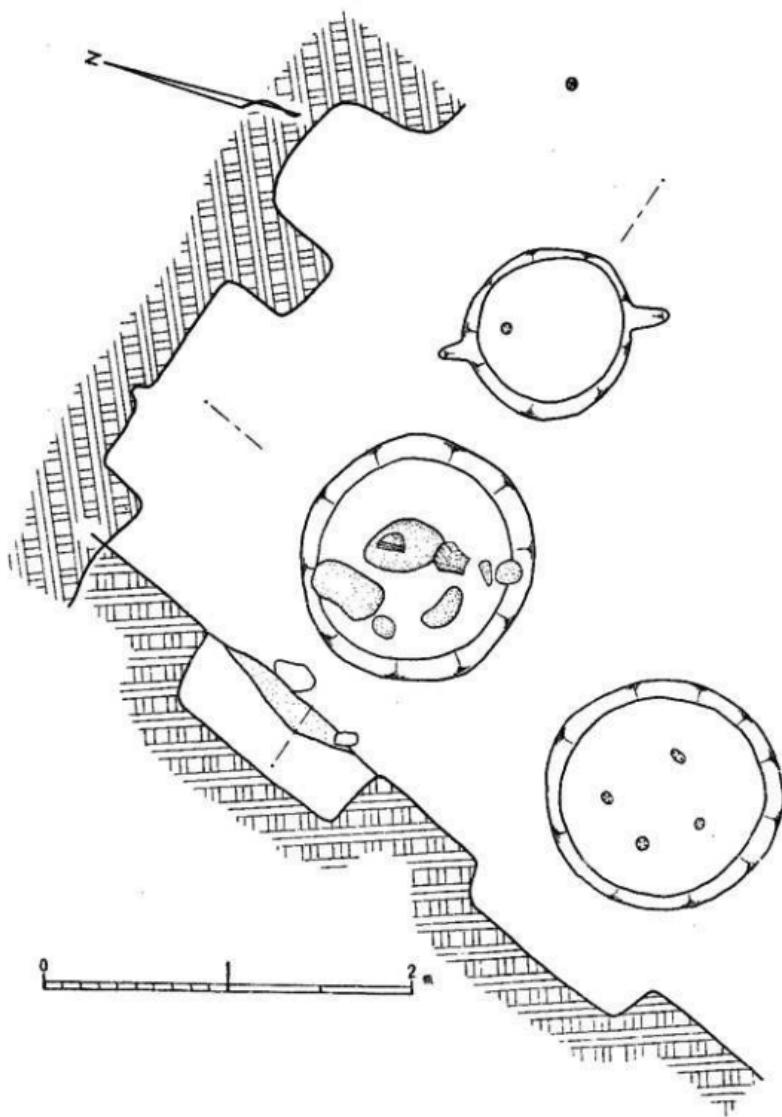


图268 生活史示意图





9、十二割海戸遺跡（都留市大野十二割海戸）

菅野川の左岸河岸段丘上に立地する遺跡である。谷村方面から鍛冶屋坂トンネルをぬけ右に曲ったすぐ右上の台地である。

昭和43年頃の調査により、須恵器の破片が多量に採取されたが、その後誘致工場である「山梨キヤノン」「プログレス」の工場が建設されたため最近では遺物の採取は困難である。

西に続く桑園からは、現在までのところ遺物は発見されていないが、南面の絶好の台地であるので今後共注意を要する遺跡である。

10、細野遺跡（都留市大野字細野）

下細野部落から道を菅野川に注ぐ支流に沿って、上細野部落に山道を登ると約5分で右側に御嶽神社の鳥居が見える。

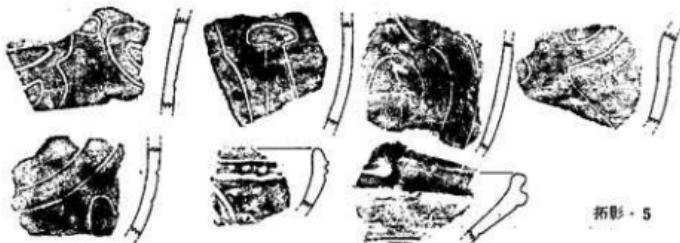
御嶽神社の参道をはさんで、左右の畑から遺物を表採することができるが僅少である。昭和35・6年頃の失業対策による農道拡巾工事の際、附近の小俣森氏の宅地からも土器片が採取されているが中期勝坂期及び曾利期のものである。

山腹の小遺跡であるが、参道の東側に湧水があり、狭い場所ではあるが興味深い地域であるので調査を継続する要がある。

11、上河原遺跡（都留市菅野字上河原）

菅野川右岸段丘上に位置する遺跡である。菅野橋の東方約1.3km、菅野部落の最後の人家のある上の地点である。南向きで東北に山を背負う日当りの非常に良い地域である。現在は水田となっており遺物の表採は困難であるが、戦後地元の奥脇節義氏が耕作中炉址を発見、土器片を採取したが、縄文後期称名寺及び掘内期のものである。

峠を越えると道志村神地に至る道志村との接点でもあるので、注意を要する。



拓影・5

12、大堰遺跡（都留市上谷字大堰）

家中川の取入口に臨む、天狗山の山麓の小遺跡である。西側に涸れた小沢が桂川に続いているが往時は水を流していたものと思われる。

南面の山麓の平地で東北に山をひかえているが、調査の結果冬期でも意外と朝日のあるあたりの早い處である。

堆積土の厚いためか、一面の桑園となっているが、表採は比較的困難であるが、十万石（料理店）寄りの畠と、富士急行線南側の畠から僅かに採取されている。

現在までに採取された土器片は、勝坂、加曾利Eである。

13、城の腰遺跡（都留市下谷字城の腰）

お城山の裾をめぐり都留市駅裏を流れる桂川の右岸河岸段丘上に位置する遺跡である。旧くから隣接する源生地区と共に、仁科義男、羽田一成氏により指摘された地域であるが、現在では遺跡の正確な地点は不明である。特に源生地区は、人家が密集して遺物の表採も不可能である。

城の腰も僅かに残された空地から土器片が採取されるが、縄文後期および土師の細片である。昭和46年農林省統計調査事務所都留出張所建設工事の際、土師片を採取出来たので、都留市駅附近を中心とする一帯に遺跡の存在が考えられるが、宅地化されているので調査は困難である。

14、道生堀遺跡（都留市下谷字道生堀）

源生から桂川河岸段丘上の院辺橋にいたる地域である。現在は多く水田となっているため表採は困難である。牛石原の用水路の落下する地点の対岸の桑園から土師の細片が僅かに採取される。日照の良い開けた台地であるので衆落の想定される地域であるが堆積土の厚いためか表採は困難である。宅地造成の際など更に一層の注意を払い調査を継続すべき地域の一つである。

15、深田遺跡（都留市下谷字深田）

先学羽田一成氏により古くから指摘された遺跡であるが、現在は宅地化しつつあり、先学の指摘した地点は不明である。

深田はフケッタと思われ、秋元時代は菖蒲田として知られ、往時は湿地帯と思われ、弥生の遺跡の想定される地域であるが、現在は水滸山山麓の高地、天野淳氏宅、住倉恵作氏宅から縄文中期の土器片が採取される。

宅地化しつつある低地の水田地帯を発掘調査の要がある。

16、鷹の巣遺跡（都留市下谷字鷹の巣）

鷹の巣地区を流れる桂川の右岸河岸段丘上に位置する遺跡である。集落の想定される絶好の台地であるが、数次の調査にも拘わらず遺物を発見することは出来なかつたが、昭和46年3月、雇用促進住宅建設工事現場から僅かに土器細片若干を得、遺跡の存在を確認した。

包含層は地下150cm以上の地層の模様である。出土遺物は諸礎Cおよび土師である。

鷹の巣と県道入口の中間地帯を徳重と称している。甲斐国誌に見える徳重長者の館跡があった処と伝えられている。仁科義男、羽田一成氏により遺跡と指摘されているが、現在は水田となり遺物の表探しは不能である。僅かに太子堂境内に石俸破片が祠られており、隣接の柿平で耕地整理の際小型の土器が出土し地主が所有している田であるが未確認である。

第2節 禾生地区の遺跡

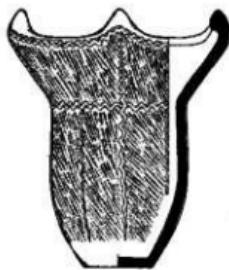
1、千の宮遺跡（都留市田野倉字千の宮）

田野倉地区の産神である三島明神（千の宮）を中心とした小遺跡で、桂川の右岸河岸段丘上に位置している。標高 380m、東西に走る国道大月～吉原線により地域が二分されているが、道路南側は山裾の水田となり現在まで遺物は採取されていない。先駆者科義男氏により紹介され古くから知られた遺跡であるが、昭和37年の県下遺跡調査の際、調査員渡辺長重、遠藤匡彦氏によって国道寄りの北側土手から底部を露出し、完形に復元し得た加曾利E式深鉢（押図26）1個が採取された。

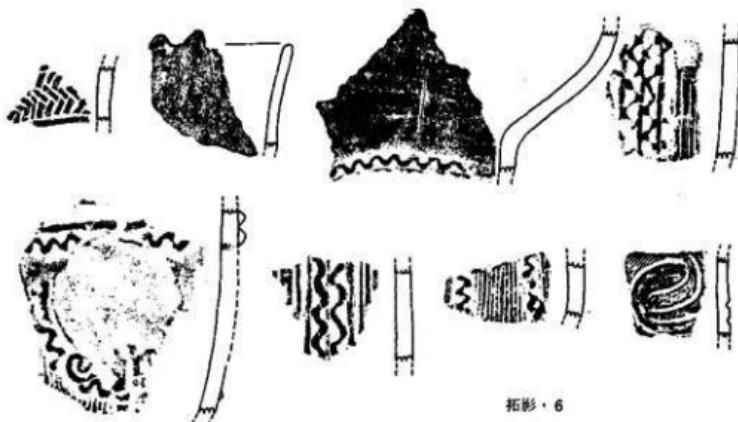
その後一部宅地造成により破壊され、三島明神境内、隣接の畠および桑園のみが旧状を留めているが発掘調査が行われたことがないので詳細は不明である。著名な大月市都留高内「大月遺跡」を東北に見下す隣接した地域であり、西に隣接する地域も長塚と称するので継続して調査を要する遺跡である。

表採により採取された土器片は、諸磯B、加曾利E、曾利、堀の内及び上師である。

富士急行線大月駅から約 500m、田野倉駅から約 600m、両駅のほぼ中間に位置している。



押図・26



拓影・6

2、神出遺跡（都留市田野倉字神出）

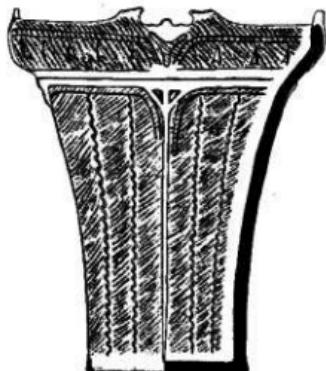
千の宮遺跡の西南に接続する地域である。古沢の右岸河岸段丘上に位置し、千の宮遺跡同様国道大月一吉原線により地域は南北に二分されている。道路南側大月ドライブイン（田野倉 257 今泉博）建設、掘井の際完形の五領台深鉢（押図27）1個、道路側の大月木材センター（田野倉 308）建設の際、底部中央に小孔を有する美麗な曾利II式完形甕（押図28）が出土し、いずれも今泉氏が所有しているが、工事中に採取されたものであるので、出土状態や層位の変化等は祥かでない。

今泉氏の言によるとドライブイン隣のガソリンスタンド工事中完形の吊手土器が出土し、工事施行者が持ち去った由であるが未確認である。

大月木材センターを中心に東西100m、南北100m位の範囲にわたって土器片の採取が可能であるが、特に大月木材センター西側の桑園から多量に採取される。

現在は水田および桑園となっているが、南面の絶好の河岸段丘で集落址の想定される地域である。宅地造成の激しい地域であるので早急に大規模な発掘調査の望まれる遺跡である。

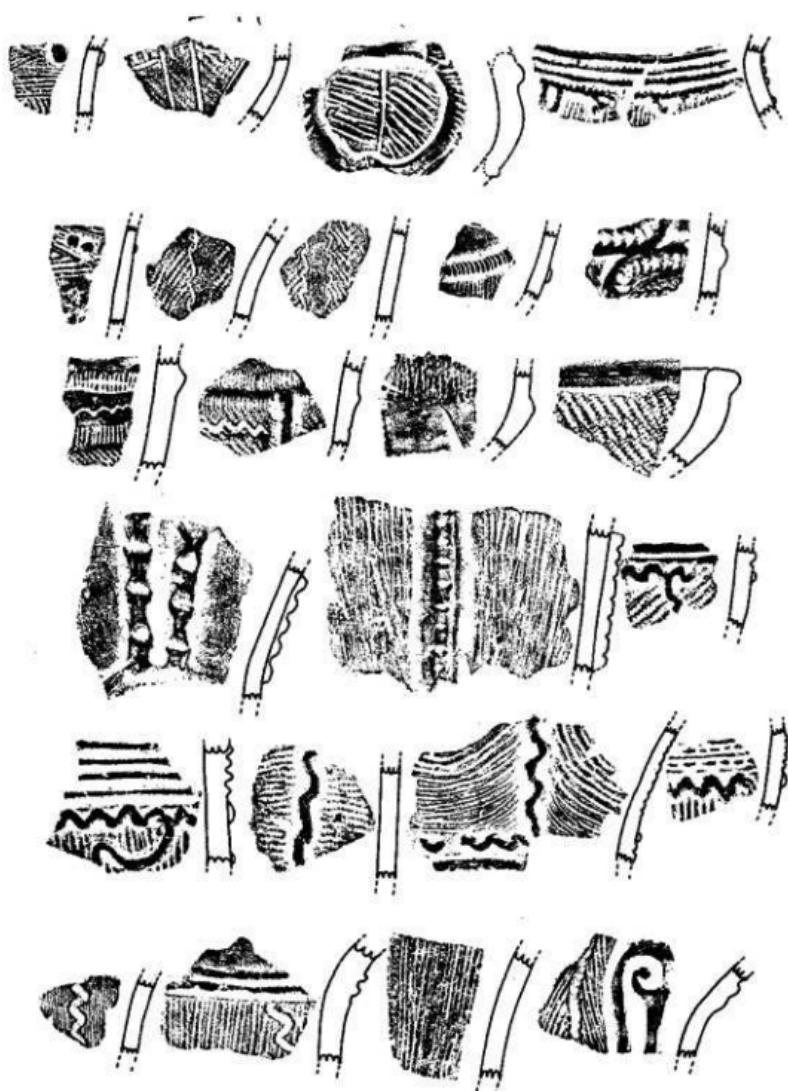
表採により採取された土器片は、諸磯C、勝坂、加曾利E、加曾利B、及び土師須恵と縄文前期末から歴史時代に及んでいる。



押図・27



押図・28



摄影·7

3、桃園遺跡（都留市田野倉桃園）

神出遺跡の西方に接続する地域である。表探による遺物の採取は僅少であるが、昭和43年農道拡巾工事の際、多量の土器片が採取され、その一部が市役所及び禾生第二小学校に保管されている。

水田及び桑園となっているが、東西100m、南北100mの広さにわたって土器片の散布がみられる。現在までに採取された土器片は、諸磯B、C、勝坂、加曾利E土師である。千の宮、神出、桃園と接続している地域であり、採取された土器片も縄文前期の織機土器、諸磯B、C、中期の勝坂、加曾利E、後期の掘の内、土師と縄文前期より歴史明代にわたる遺物がみられ、長期にわたる衆落址の想定される地域である。

前述の様に宅地造成の急激に行われる可能性の高い地域であるので、三地域を含めた大規模な発掘調査の望まれる遺跡である。

富士急行線 田野倉駅より大月方面に300m、田野倉の宿を出はずれた道路西側の地域である。

4、権現原遺跡（都留市田野倉字中野原）

神出、桃園遺跡の西側、古沢と桂川の間に南北に約1000m、東西は最長1200m、最短40mの細長く横たわる台地を中野原と呼んでいるが遺跡はその南端にある。

往時権現社のあったことから権現原とも呼ばれている。別名を中野原とも云う。

古沢は桂川に匹敵する大きな溪谷であり、住時は小野川（菅野川）の溪谷であったと伝えられているが、菅野川は現在上流の落合橋附近において桂川と合流していくので流水はなく、一部は既に埋め立てられている。

国道から小形山地区に入る右側の地域で、禾生第二小学校の裏側に当る地点である。戦前から遺物の散布地として知られていたが、現在は桑園となっており遺物の散布は少なく、表探による土器片も中期および土師の細片のみであるが、南面の前後を溪谷にはさまれた面白い地形であり、桑園のみで旧状をよく留めていると思われる所以、現在は遺物の採取は僅少であるが調査を継続する要のある興味深い地域である。

5、中谷遺跡（都留市小形山字中谷）

小形山地区を流れる桂川の右岸河岸段丘であるいわゆる大原台地を北方から一望にのぞむ高川山の山裾に位置し、前方を桂川に注ぐ高川が小さな渓谷を作っている。地元の人は十二天原（ちゅうにてっぱら）と称している。

中谷遺跡の存在は早くから知られて、大正年間附近の小形山小学校々庭拡張工事の際、堅穴住居址が、又大野伝平氏の畠から敷石遺構が発見されたと伝えられている。又日向房吉氏敷地内に見られる石棒破片、磨石および遺構内出土と想われる石で築かれた小塚が、部落内に12ヶ所あったと伝えられている。

地元の小保良治氏が、中央高速自動車道路陸橋下の畠から土器片、及び美麗な大形分銅形石斧、定角石斧、石刀を採取し、現在都留市で保管している。

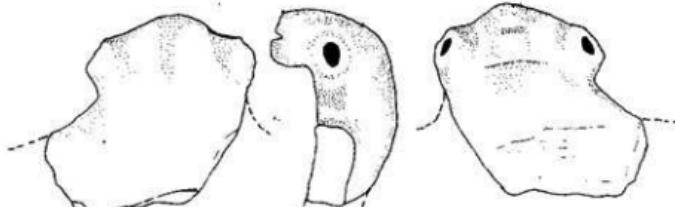
昭和39年には中央自動車道建設工事事前調査として、立正大学文学部考古学研究室の手によって発掘調査が行われ、縄文、弥生両時代にわたる配石遺構の発見が報告されている。（註1）。又その詳細について、坂詰秀一、関俊彦氏が昭和42年9月1日発行の甲斐考古8号に「山梨県都留市小形山における縄文晩期配石遺跡の調査」を発表している。

昭和46年12月18日の調査で、珍らしい獸面把手（押図29）が採取され、附近から石棒、石皿の破片および磨石と思われる石器類が多数採取された。

昭和47年3月農道拡巾工事の際、多量の土器片と住居址2（内1ヶは敷石遺構）が確認され、採取された土器片から3ヶの復元可能の七器（押図30、31、32）を得。その他小型定角石斧、石鎌、注口土器注口部破片等を得たので、取り敢えず附近を実地測量し将来の発掘に備えていたところ、道路拡巾工事により自動車の通行が可能になったため敷地所有者が住宅建設の由を伝聞したので、都留市教育委員会が都留文化大学考古学研究会に調査を委嘱、昭和47年7月8日から7月31日まで発掘調査を行った結果、表土下黒色土層中に配石遺構を、又黒色土層を掘りこんで敷石遺構並びに方形住居址各1及び縄文後期から晩期にかけて多くの遺物を発掘した。

特に配石遺構中から発掘された晩期土偶は慶大江坂輝弥教授、文化庁野口善磨氏の注目するところとなり講談社刊行の「古代史発掘3巻 土偶芸術と信仰」に掲載されたことは周知のことである。

註1 発掘調査の実施結果に基づく発掘調査報告書 坂詰秀一

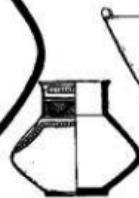


押図・29

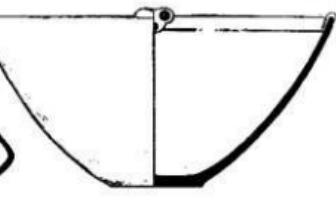
遺跡遠影図からも知られる如く、高川に臨む大原台地を一望にのぞむ南面の絶好の台地であり、発掘調査を行ったのはほんのその一部分であり衆落址の想定される後、晩期から弥生期にかけての市内でも貴重な遺跡の一つである。



押図・30



押図・31



押図・32

以下「中谷遺跡発掘報告書」を抜粋すると下記の通りである。

第1章 遺跡の位置および調査の経過（省略）

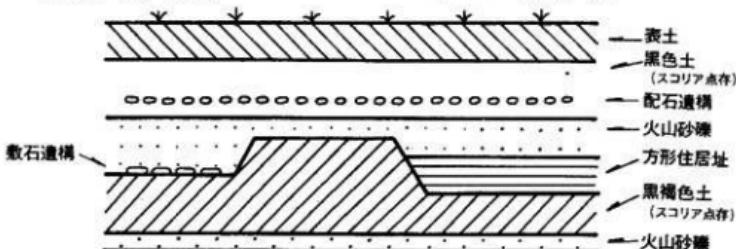
第1節 遺跡地の環境（省略）

第2節 発掘調査日誌（省略）

第2章 調査の概要

第1節 層序と造構

第2図 層位模式図



本遺跡は、富士火山活動の影響による層が見られ、このことにおいては近辺の遺跡と変らない。押図2は本遺跡における模式図で、まず造構との関連では、配石造構が黒色土（スコリア点在）層中で、敷石及び方形住居址が黒褐色土（スコリア点在）層を掘りこんで造られ、敷石の上に火山砂礫が約15cm、方形住居址の上に焼土が5~15cm、その上に火山礫層が約1cm堆積していた。

各層から出土した遺物の時代は、黒色土層上部は安行III B、C相当、黒色土層中

部は安行III a相当、砂礫層下部は安行I、II式相当、敷石、方形住居址からは、加曾利B式相当、黒褐色土層の下の火山礫からは、加曾利E式相当の土器が出土した。

中谷遺構において見出された各層は、火山活動による堆積と考えられるが、この附近での火山は、富士山しかなく、おそらくこれらの各層は富士火山活動によるものと考えられる。黒色土および黒褐色土にはスコリアを含み、火山砂礫は見ただけで明らかである。これは富士山が常時活動したことを表わしている。このうち、縄文時代の火山砂礫は、今までに都留市住吉遺跡、同市美通遺跡において加曾利E II式に相当する時期のものが確認されているが、このことは中谷遺跡においても、下部の砂礫層が前述した遺跡の火山砂礫と同じ時期のものであることを確認した。次に敷石遺構および方形住居址の直下にあった火山砂礫層は、他の面ではほとんど見当らなかったが、敷石の上に5~15cm、方形住居址の上部に1cm堆積していたことは、一度降下した火山砂礫がある程度二次堆積したことを意味しているが、富士火山活動による火山砂礫の降下した時期は、方形住居址が使用されなくなった後敷石遺構の使用中又は、使用されなくなった後で、時代としては、縄文時代後期から晩期（安曾利B~安行III a）式に相当する時期である。

今回の発掘調査において安行III a式相当の時期に、火山砂礫の降下を伴う富士火山活動があったことを確認したが、今後富士山周辺を発掘調査することにより、新しく富士山の活動と遺跡との関係、つまり、活動時期を明らかにすることが出が出来るように、遺跡発掘の上で注意する必要を認めた。
(森本圭一)

第2節 遺構

中谷遺跡の発掘調査において、我々が確認できたのは、表上下黒色土層中に配石遺構が、又黒褐色土層を掘り込んで、敷石及び方形住居址が出土したことである。

配石遺構

表土下約50~70cmのところに、約10~20cm大の石の配列を認めた。そして石は北から南の方向へ開いていくような形で配列しており、土器片の出土は石の分布状態に比例していた。また第3図のような磨石と思われるものが石のわくをほどこした石皿の上におかれた状態で出土したことや、配石遺構内からの土偶部片の出土が多く、後述するが、特に河原石が隋円形状に配置された石組の中央部から、頭部を南に、また顔面を上にし、やや斜めの状態で、両腕の欠損した土偶が出土したことは配石遺構というものの性格の一端をうかがい知らせるものであろうと考える。

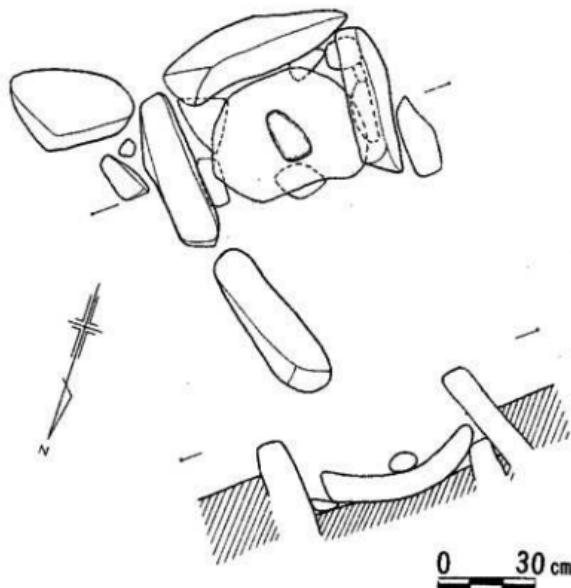
敷石遺構

表土下75cmのところに、中央に炉址のある敷石が見つかった。炉は直径40cmありその周辺にだけ石を敷きつめてある。敷石は、炉の中心から半径約50cmの円形状の拡がりをもっていた。炉の中には、焼土の堆積が約20cm認められ、焼土中には動物の骨片が少量含まれていた。また焼土の下層には、粘土状の灰の堆積が認められた。

住居址

表土下約85cmのところ（敷石と同じ層位）から、厚さ約15cm内外の焼土に覆われた住居址が出現した。住居址は、黒色土中に構築されたもので、上部の焼土が住居址発見の手がかりとなった。大きさは、北西4m70cm×東北4m60cmの方形プランであり、立ち上がりは約20cm確認出来た。そして、住居址中央よりや、南よりに、南北の方向に直径1m、東西の方向に短径70cmの焼土が確認された。これは石開いのない炉であろうと見なされる。焼土は、床面から約15cm落ちこんでいる。そして焼土中からは、獸骨の破片、鹿の角そして木炭が多量に出土し、その中でも、住居址の柱として使用されたのではないかと思われる直径約20cmで、長さ約2m、及び60cmの木炭が出土し、その木炭は都留文科大学自然科学教室の藤原教授（植物学）によって、もみ又はつがの木であることが確認されたことは注目される。

方形プランの四隅からは、それぞれ直径30cm大の柱穴が確認された。また、この住居址の南西にある石組は、敷石と何らかの関係があるのではないかと思われる。



第3図 配石遺構の一部拡大図

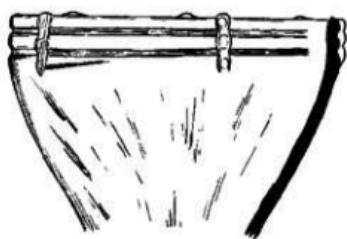
第3章 出土遺物

第1節 土 器

今回の中谷遺跡発掘調査では、縄文時代後期から晩期にかけての遺物が多数検出されたが、その多くは表土からのものであり、一部には工字文を持つもの(第1類)も発見されている。したがって、縄文時代の終末期のものもあり、これらの土器の説明によって、この時期の様相の一端がうかがえよう。

第4. 5. 6図 実側土器解説

質	色	文様など	出土地点
A 粗製	黒褐色	口縁附近に、二条の隆起文を有する。	配石遺跡
B 粗製	褐～黒褐色	無 文	配石遺跡
C 粗製	褐色	無 文 底部に網代文を有する。	方形住居址焼土中
D 粗製	褐色	無 文	配石遺構
E 粗製	黒褐色	無 文 口縁附近に穴が一つ有り、口縁内側に二条の沈線を有する。	配石遺構
F 粗製	黒褐色	無 文 口縁内側に二条の沈線を有する。	配石遺構
G 粗製	褐色	沈線による変形した入組文を有し、口縁部には5つの把手を有する。	配石遺構
H 精製	黒～黒褐色	二条の磨消縄文帯を有し、口縁部に2対の把手を有する。	配石遺構
I 精製	黒～黒褐色	口縁部に、はりこぶ装飾が認められ、いわゆる亀ヶ岡系の文様を有する。	配石遺構 土 部
J 粗製	黒褐色	口縁附近に4つのこぶを有し、へらによる斜線で文様を形成している。	配石遺構 直 下
K 粗製	褐色	無 文	配石遺構



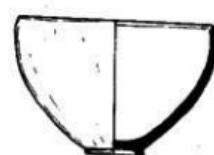
A



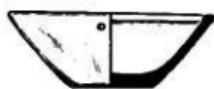
B



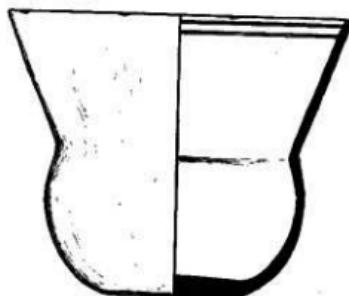
C



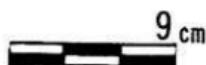
D



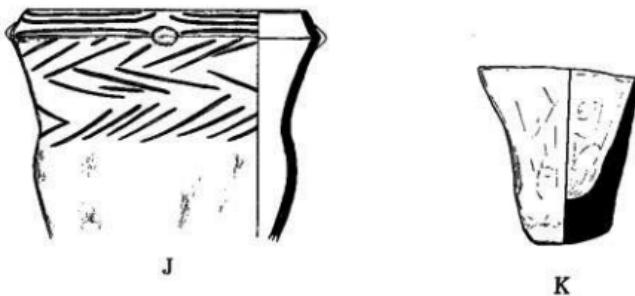
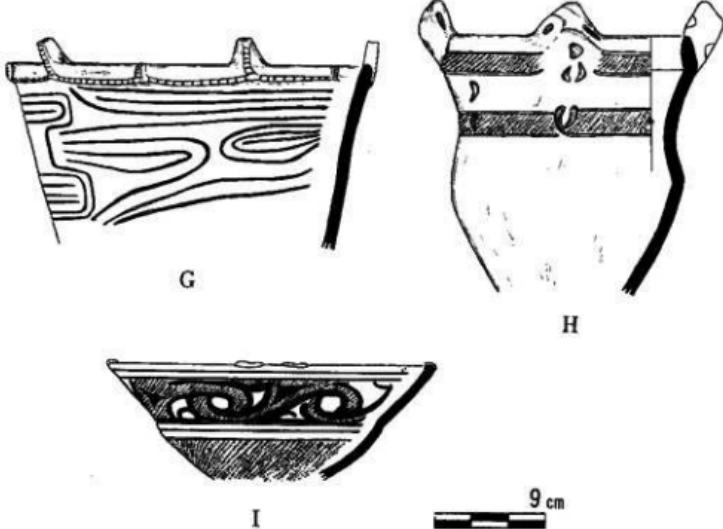
E



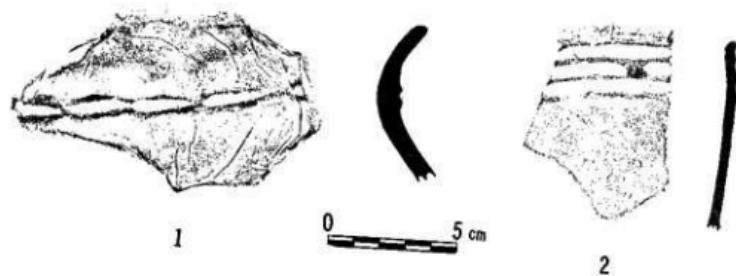
F



第4図 土器実測図1



第6図 土器実測図3 左二分の…右一分の一



第7図 土器拓影（第1類）



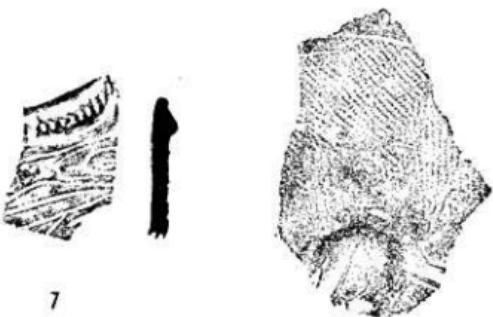
3

4



5

6



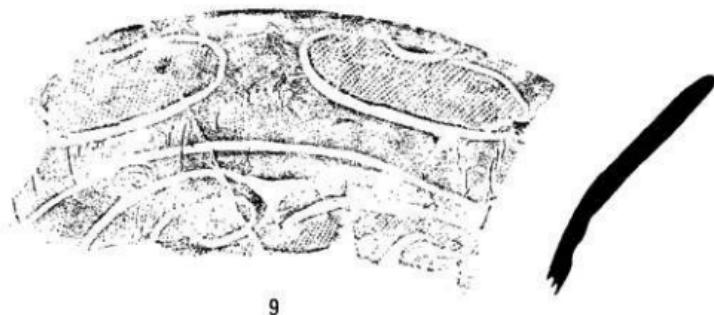
7

8

0 5cm

第8図 土器拓影 (第2類)

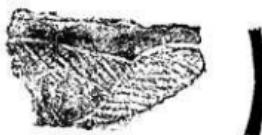




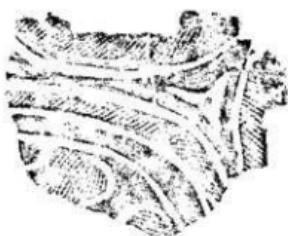
9



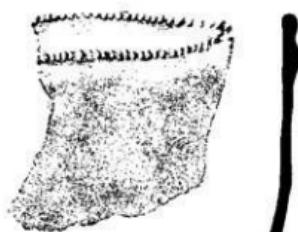
10



11



12



13

0 5 cm

第9図 土器拓影（第3類）



14



15



16



17



18



19



20

0 5 cm



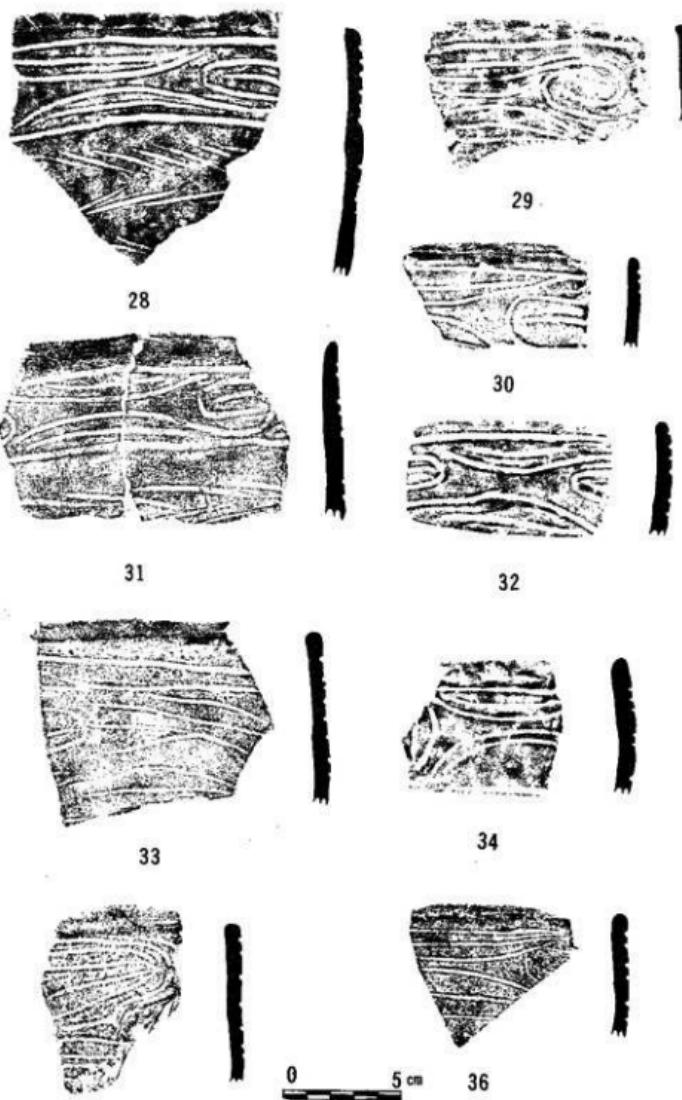
21



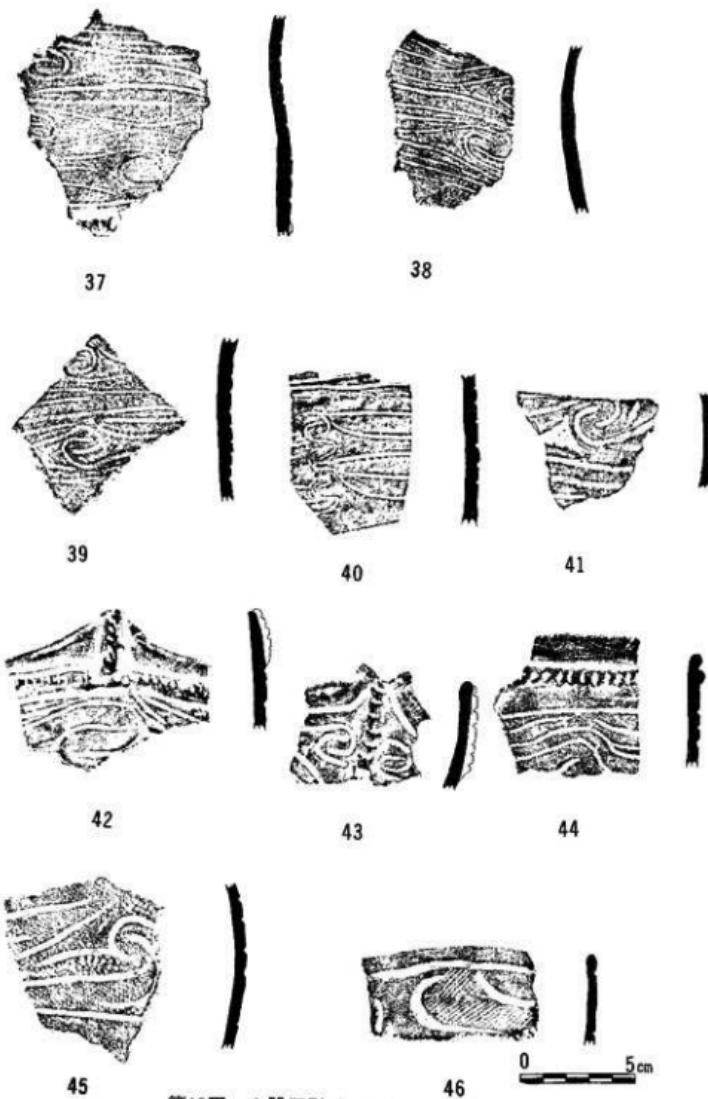
第10図 土器拓影（第3類）



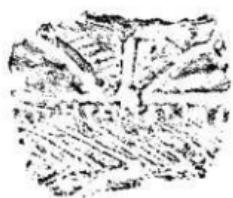
第11図 土器拓影（第4類）



第12図 土器拓影（第4類）



第13図 土器拓影（第4類）



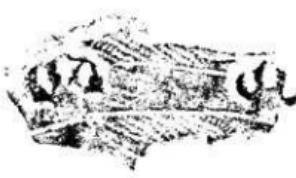
47



48



49



50



51



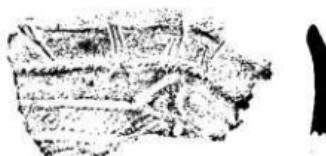
52



第14図 土器拓影（第5類）



53



54



55



56



57

0 5 cm

第15図 土器拓影（第6類）



58



59



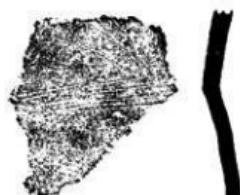
60



61



62



63



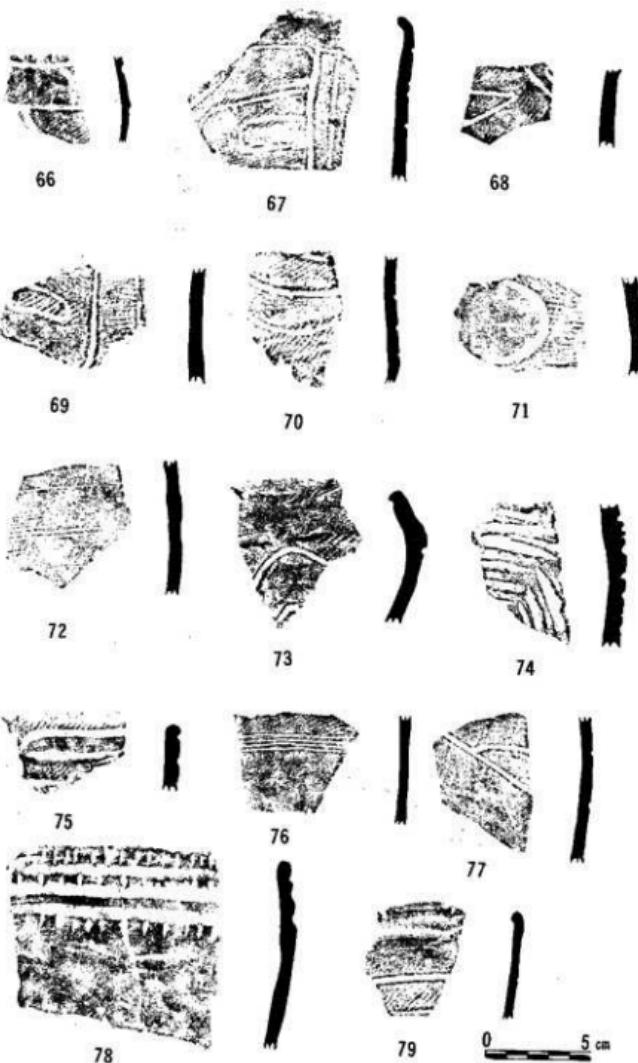
64

0 5 cm

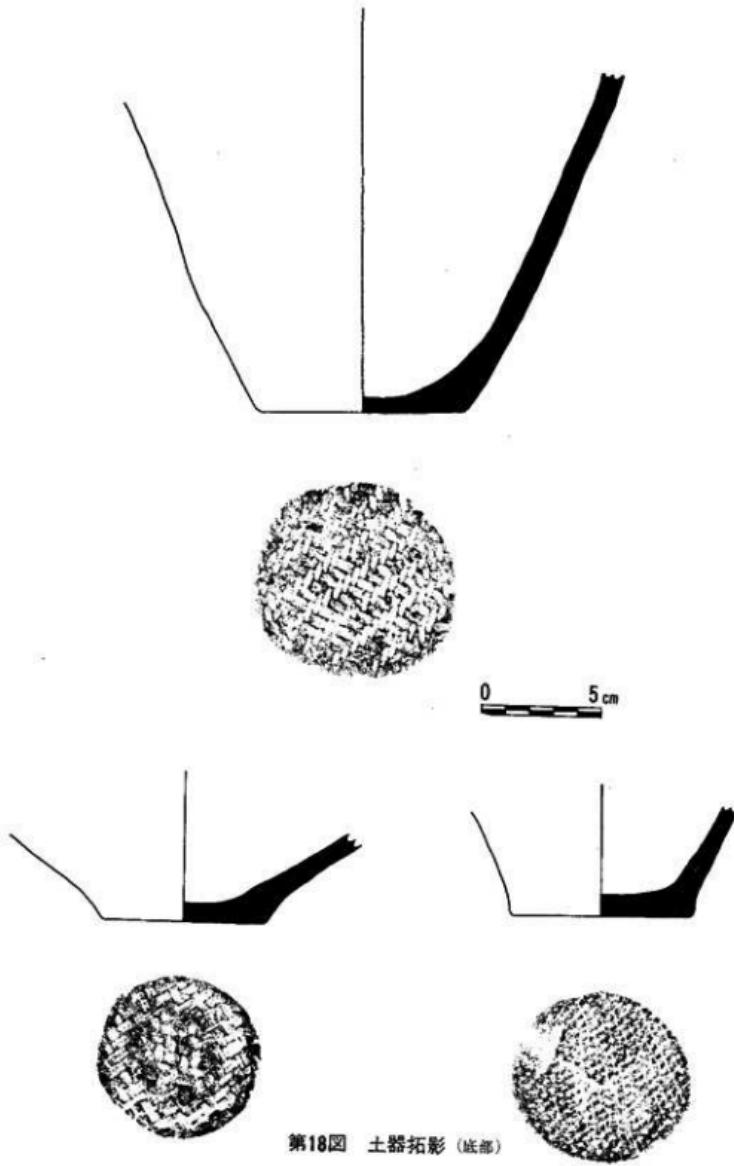


65

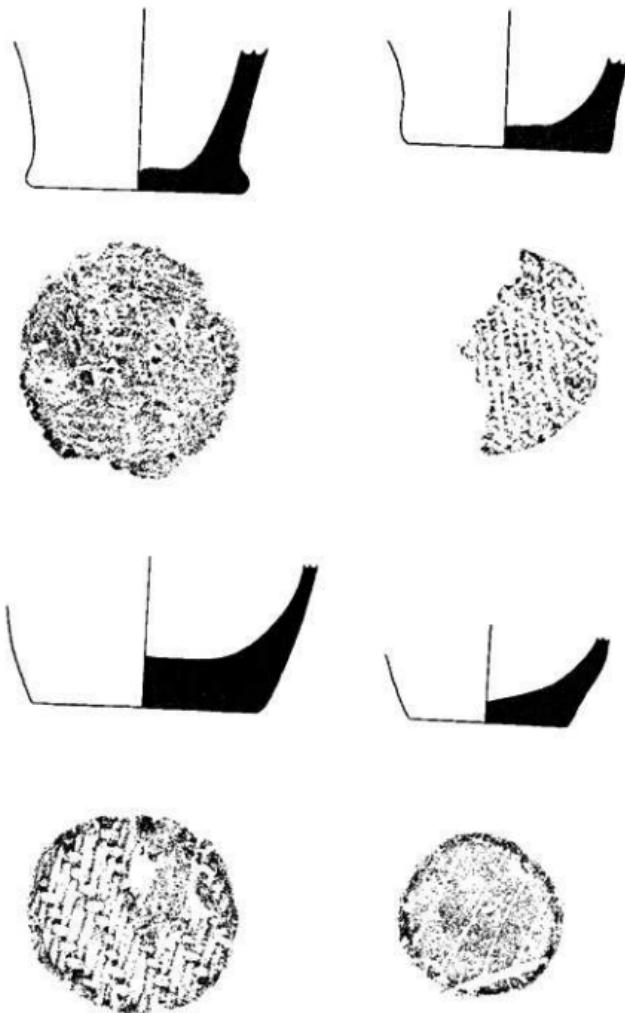
第16図 土器拓影（第7類）



第17図 土器拓影 (第8類)

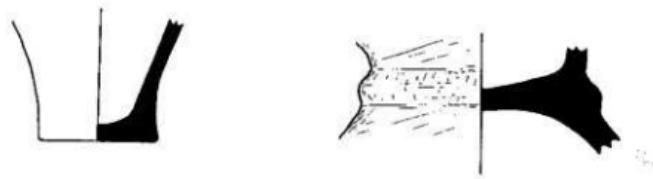


第18図 土器拓影(底部)

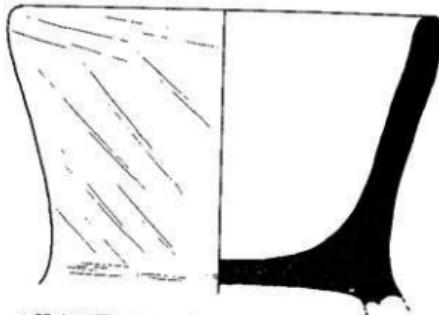
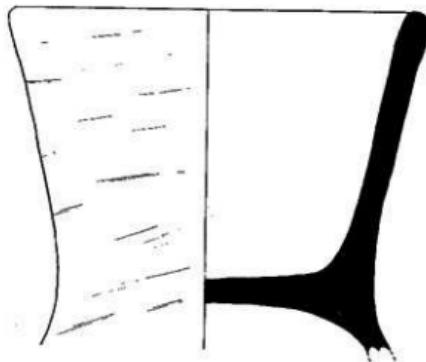


第19図 土器拓影（底部）

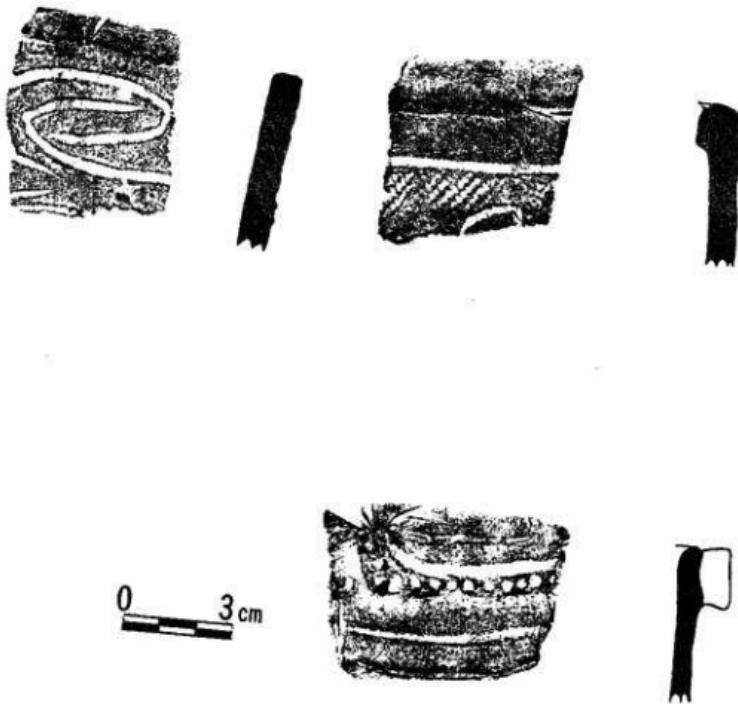
0 5 cm



0 5 cm



第20図 土器実測図（台付土器）



第21図 土偶II周辺出土の土器拓影

第2節 土製品

土偶

中谷遺跡から出土した土偶は全部で8点あり、完型1、頭部片2、腰部1、脚部4である。完型土偶は、高さ23cm、巾12cmのもので、両腕が欠けていた。

これは最初から故意に欠かれていたものと思われる。出土状況については、第22図にあるように楕円形に並べられた配石の中央部より、頭部を南に顔面を上にし、やや斜めの状態で埋没されていた。顔はハート形を呈しており、口を中心耳の付根までV字形の入墨を粘土の隆起で表現してあり、眉や目なども付いていたと思われるが、残念ながらその破片は発見出来なかった。脚部を除いた全身に朱がほどこされており、背面に入墨だと考えられる4つの瘤状突起が横に並んでいる。附近から発見された周囲に刺突文の文様のある耳栓と同一のものを装着していることは、まことに興味深く日本の縄文人の衣生活の一部をうかがい知ることが出来る貴重な資料となるであろう。この土偶は文様から安行III a式の土器に併行するものと推定できる。焼成は良く、朱のついていない部分は灰褐色を呈する。

頭部片のものは山形土偶であり、第23図にもあるように土偶の耳部の正面と裏面から粘土をつけており、耳栓の押入方法を知る良い資料であると思う。

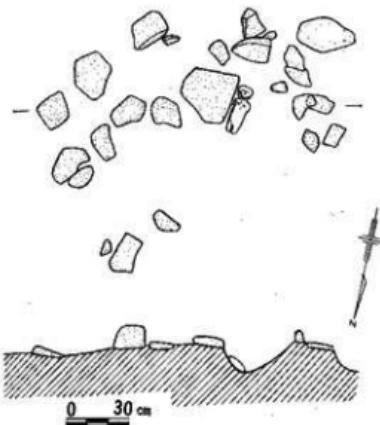
焼成は良好で眉部と鼻部が強調されているが、口は小さく目は強調されていない点では前述の完型土偶と似ている。黒褐色を呈する。また耳栓にだけ朱を塗った跡があるのは興味深い。第24図の腰部片は遮光器土偶の物と見られ第24図の頭部片も同じ系統の物と思われ、東北文化の流入が土器だけでなく土偶の上にもうかがえる。

耳栓

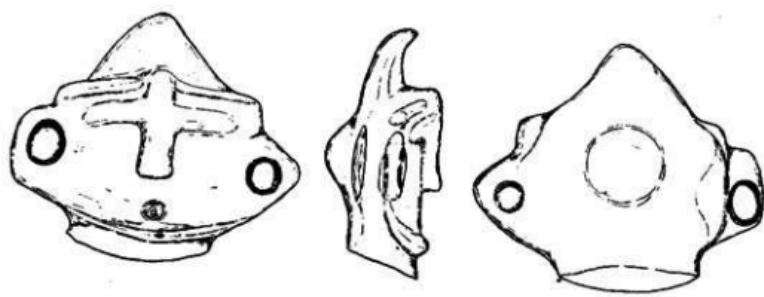
耳栓の出土は20点に及び、土偶と同じくほとんど配石遺構から出土している。そのうち完型は15点である。

耳栓とは耳飾りの一類であり、耳たぶにあけた孔に挿入して着装するもので栓状耳飾りともいう。

中谷遺跡のものはボタン状のものやそれに刺突の文様がほどこされたもの、透彫などの美麗な文様のほどこされたものが見られる。耳栓それ自体での時代判別は無理であるが、配石遺構から出土が多いので安行IIIに伴うものと思われる。

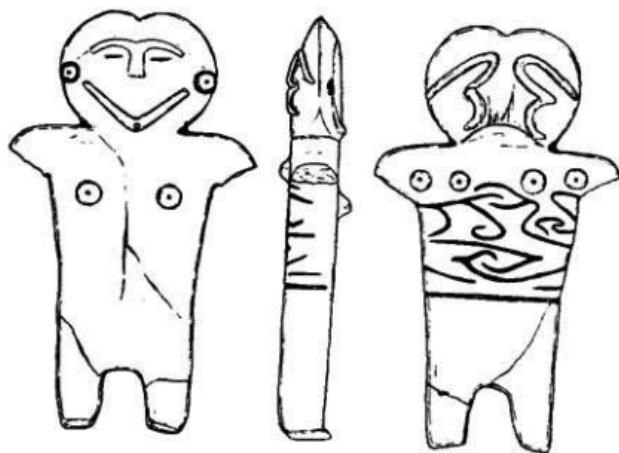


第22図 土偶II周辺の配石



0 5 cm

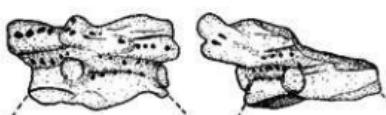
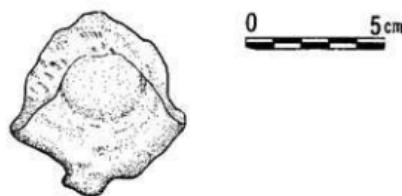
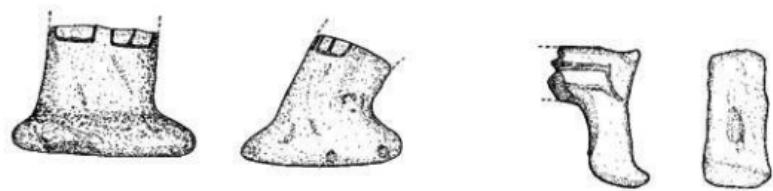
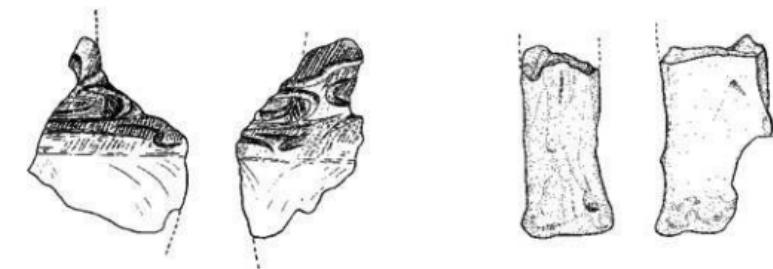
土偶 I



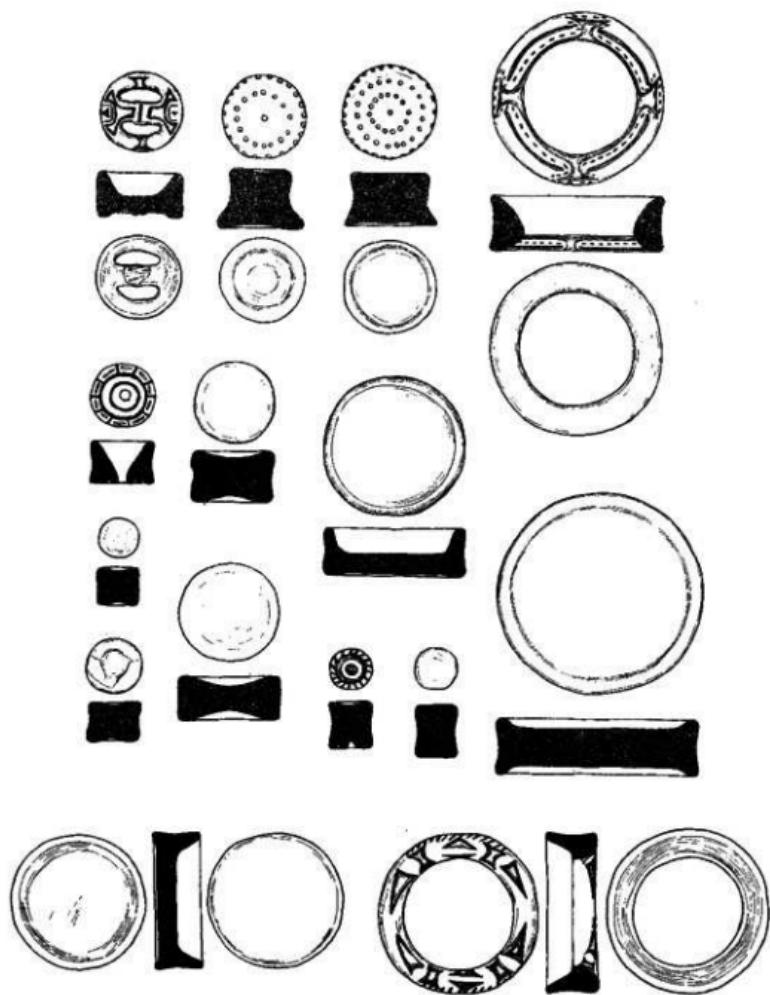
9 cm

土偶 II

第23図 土偶実測図



第24図 土製品実測図（土偶片）



第25図 土製品実測図（耳柱）

0 5cm

第3節 石製品

1. 石鎌

中谷遺跡で打製石鎌は、99個発見されており、敷石で4個（第26図14、16、17、18）住居址で5個（第26図20、22、23、24、25）発見された以外みな配石面で発見された。

99個のうち、チャート製が11個で、残り全部が黒耀石製である。また石鎌の形態について述べてみると、有茎が8個のみで、無茎と有茎との比が約9：1となり有茎の少なさが見立つ、また配石遺構からの出土がおびただしいことは、石鎌の多量の出土を物語るものである。

2. 石錐

石錐は1点だけ出土しており（第27図31）石質はチャート質で、また第27図28も石錐かとも思われる。

3. 石匙

石匙は2個検出された。いずれも粗製で前者（第27図30）は石英質であり後者は（第30図100）粘板岩である。

4. 磨製石斧

定形のものは1個（第31図1）だけで、あとは残欠で5個数えられる。總てがいわゆる定角式である。

5. 打製石斧

打製石斧は、完形、残欠合せて30個数えられる。そのうち分銅形が5個で、あとはほとんど揆形である。分銅形は5個のうち4個（第32図5、7）が頁岩で、残りの1個（第32図6）は泥板岩である。また揆形は、粘板岩と泥板岩である。

6. 四石

全部で5個発見されている。すべて安山岩を用い、2個（第36図23、27）は両面に凹みを敲打によって作り出している。

7. 磨石

全部で31個発見されている。ほとんどは硬質砂岩と安山岩であり、極く少数の花崗岩も含まれている。

8. 石錐

1個のみ出土した。石質は粘板岩である。両端に著しい打痕があり、いかにも紐をかけるように溝を刻んである。

9. 石刀

先端部と基部を欠損している。石質は、緑泥板岩である。

10. 玉類

輕石製（第38図）を除いて、すべてヒスイ製である。有孔のものが3例あり、ヒスイ製のものは緑色と暗緑色を呈する。ヒスイ製玉の長径は、小さいものから1cm 1.5cm 3.2cmである。

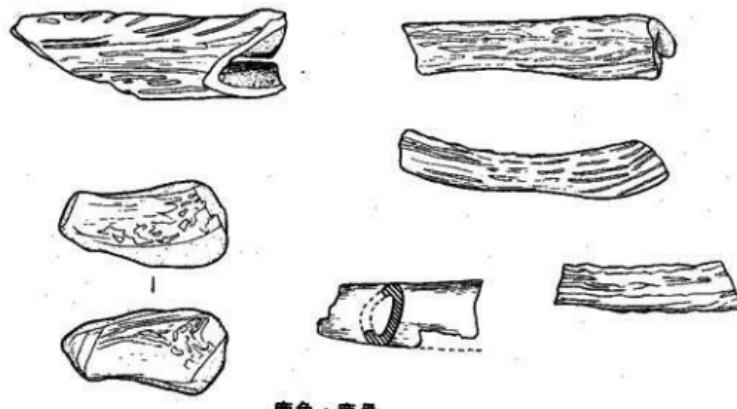
11. 石刀様石器

2個出土しており、砂岩質であり、全面が磨かれており、中央が凹んでいる。色は黄褐色と黒褐色を呈する。

自然遺物

自然遺物としては、配石造構および下層の住居址より出土した多数の獸骨がある。その分布は、遺跡全体におよび、特に焼土中より良好な状態で出土した。出土獸骨の中には鹿角が存在していたが、人工的な加工の痕跡は認められなかった。

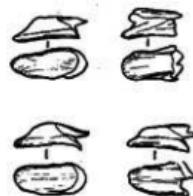
なお、出土した獸骨は、都留文科大学教授、篠原博氏を通じて、国立科学博物館に調査を依頼したところ、すべて熱を加えた痕跡のみられる鹿骨および鹿角であることが確認された。



鹿角・鹿骨



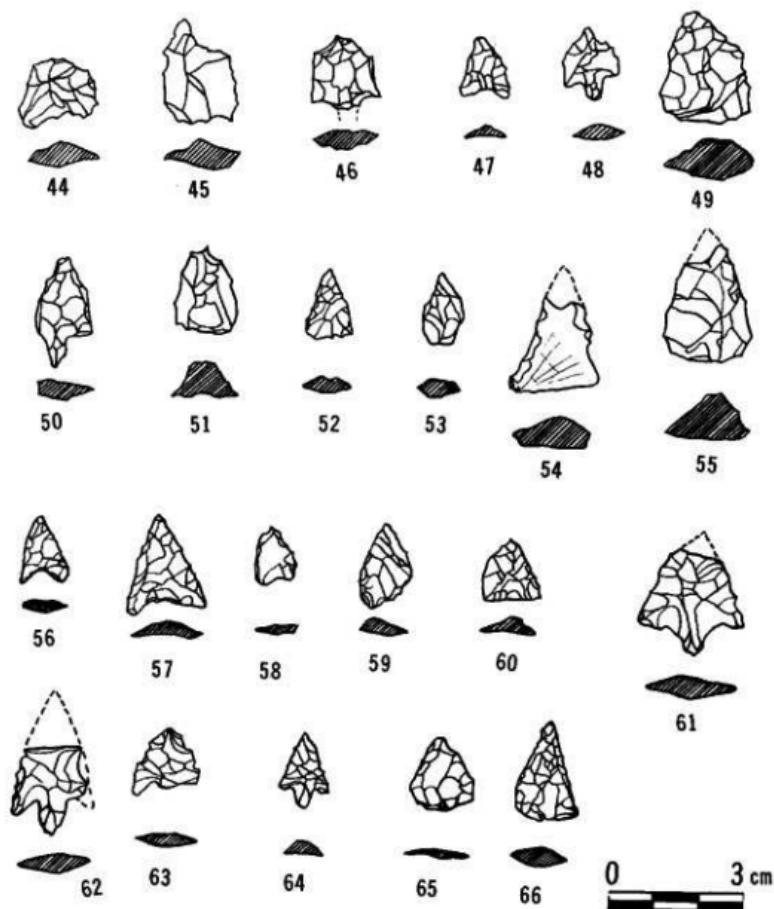
黒曜石塊中の石器



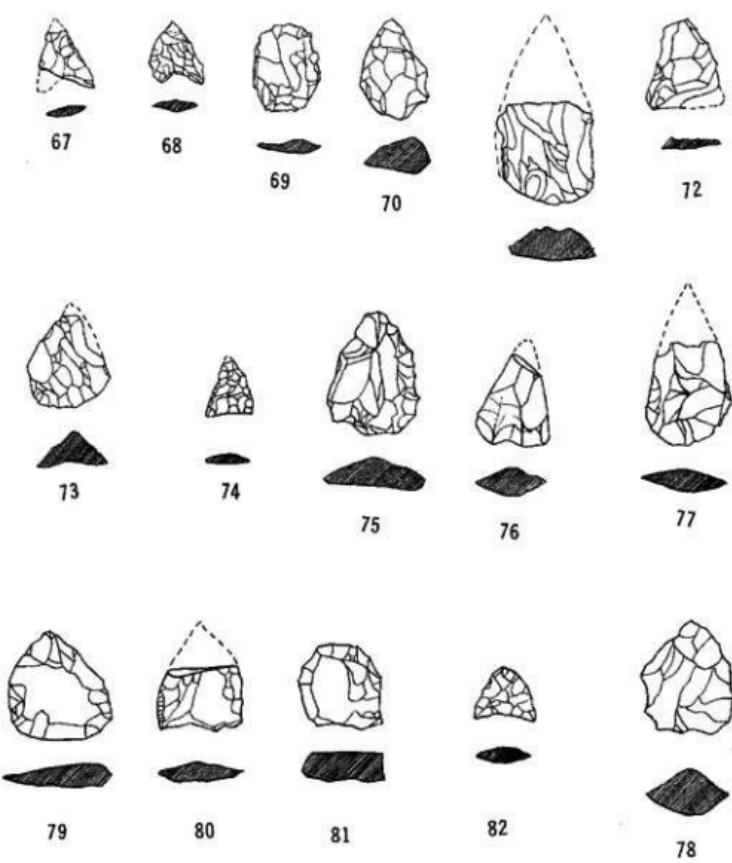
鹿の歯



第37図 自然遺物

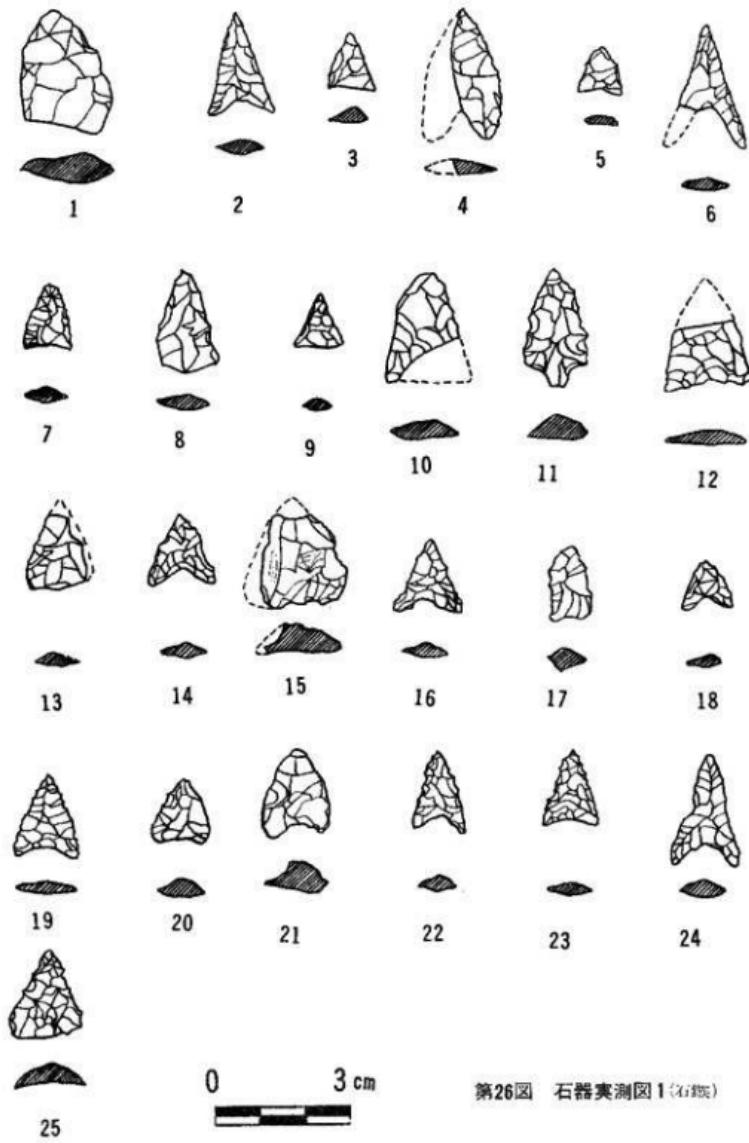


第28図 石器実測図3(石核)

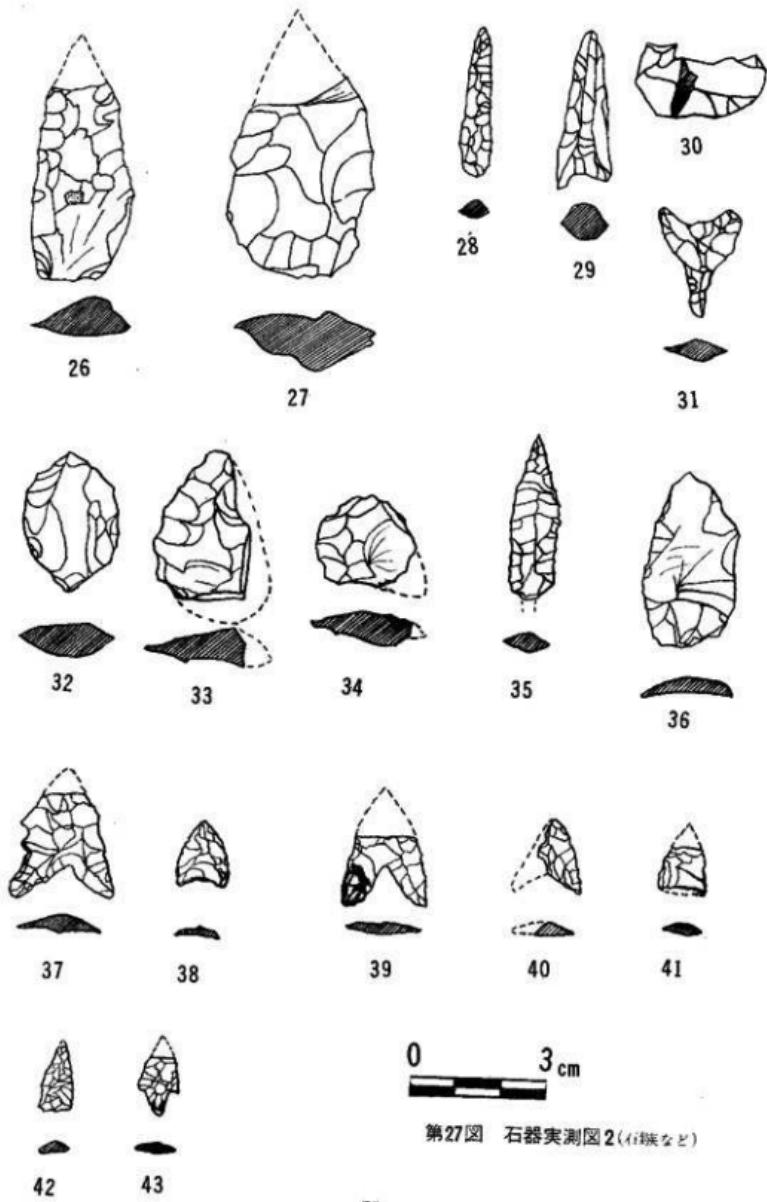


0 3cm

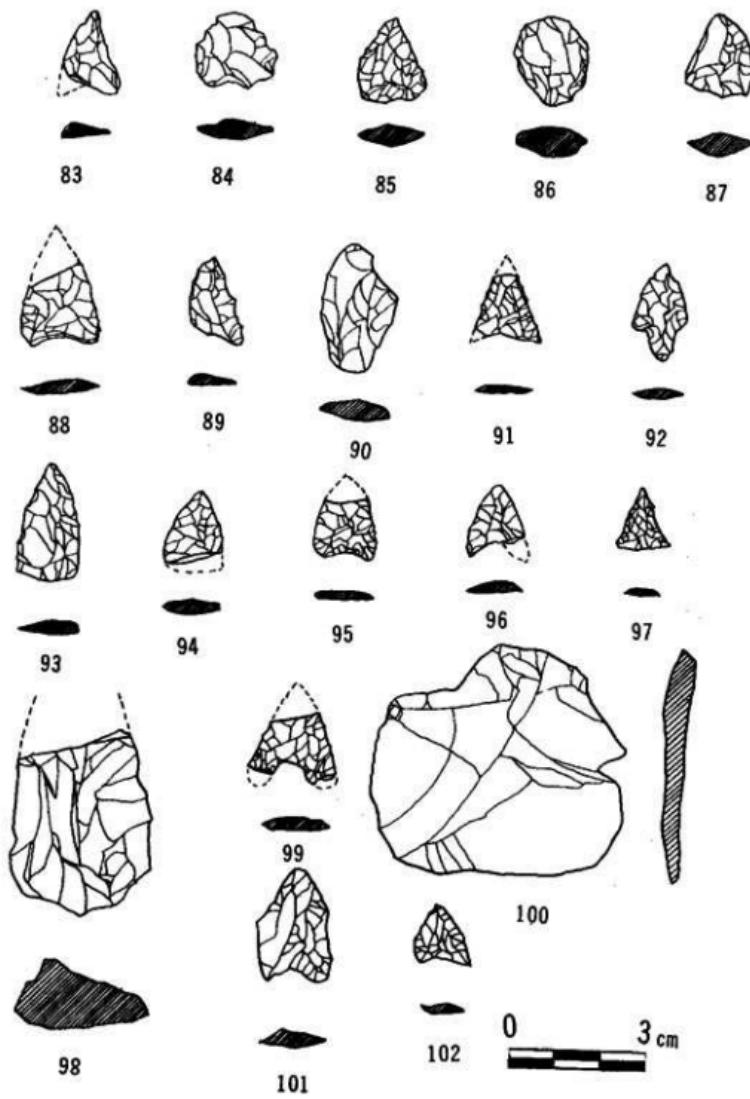
第29図 石器実測図4(石砍)



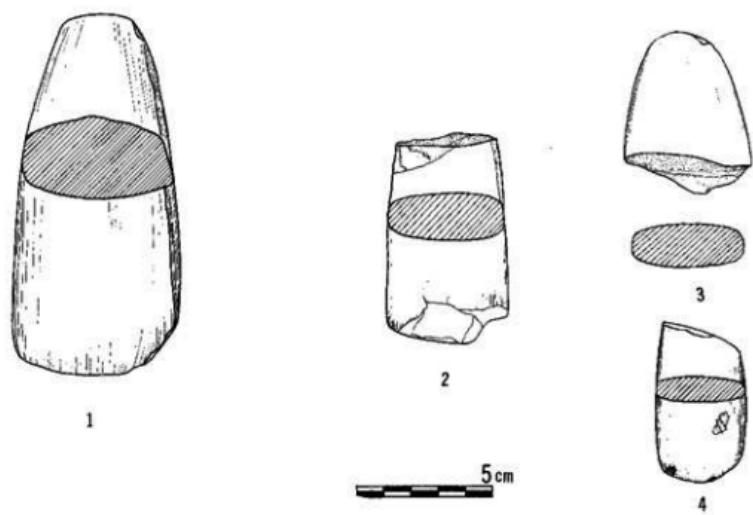
第26図 石器実測図 1 (石頭)



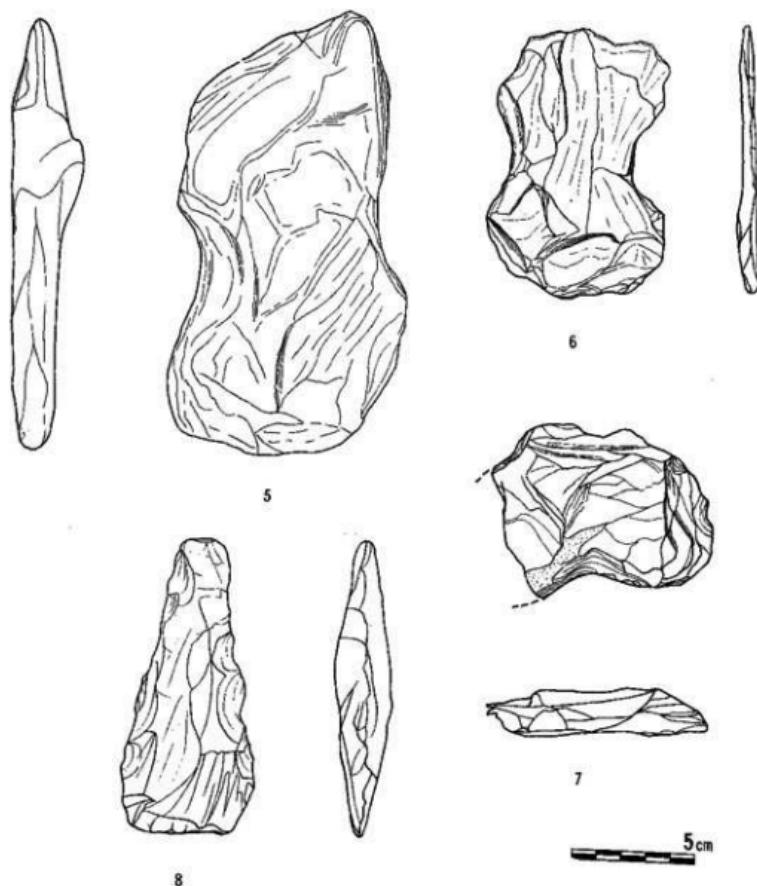
第27図 石器実測図2(石核など)



第30図 石器実測図 5 (石簇など)



第31図 石器実測図（磨製石斧）



第32図 石器実測図 1 (打製石斧)



9



10



11



12



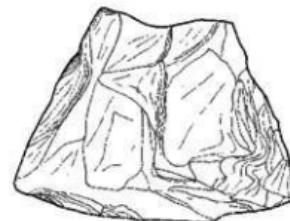
13



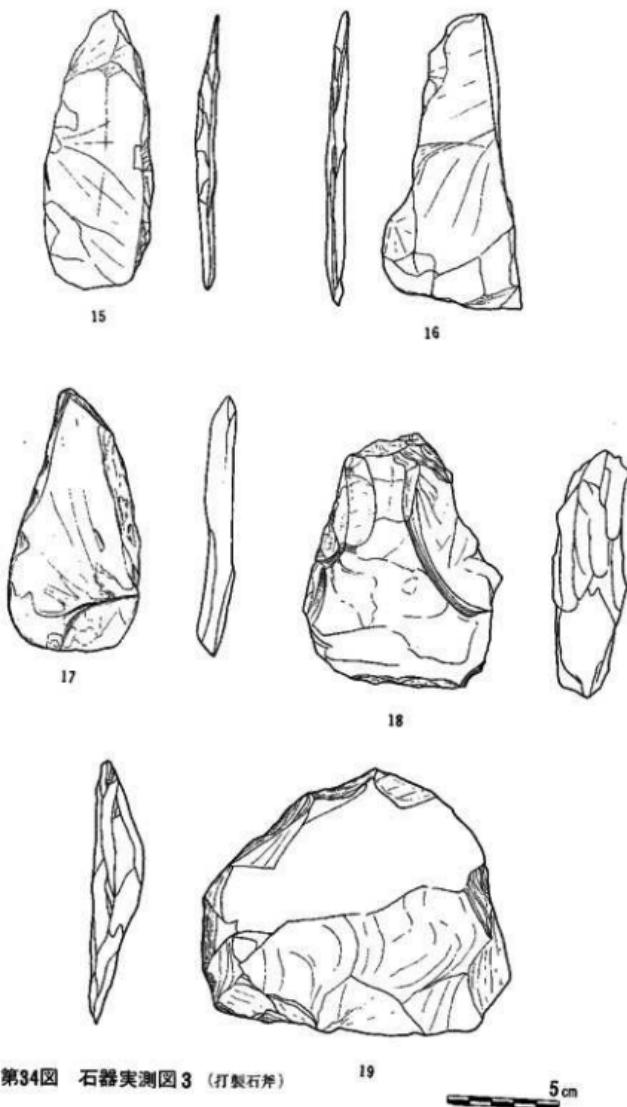
第33圖 石器実測図 2 (打製石斧)



14



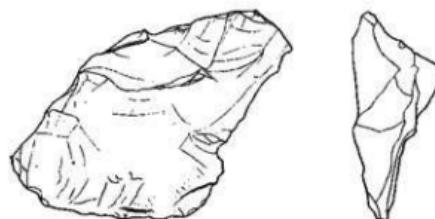
5 cm



第34図 石器実測図 3 (打製石斧)

19

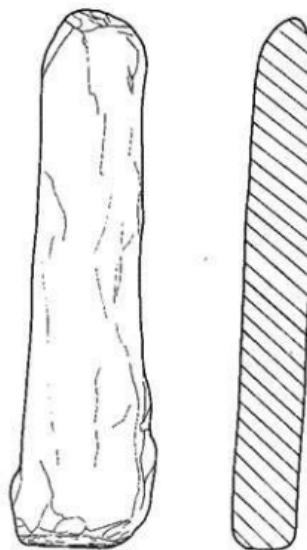
5 cm



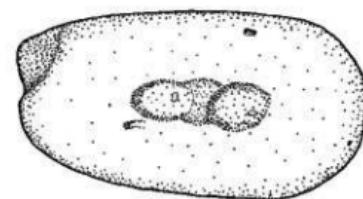
20



21



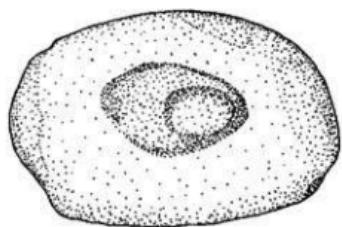
22



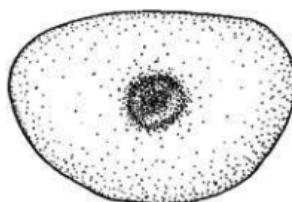
23

0 5cm

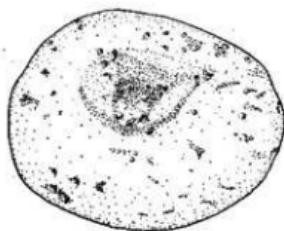
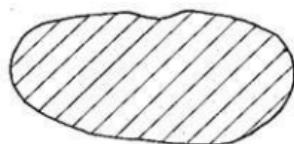
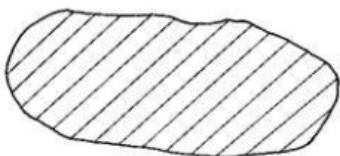
第35図 石器実測図
(20, 21は石刃様石器、22棒状石斧、23凹石)



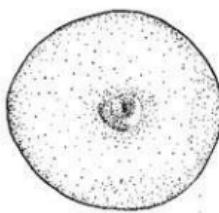
24



25



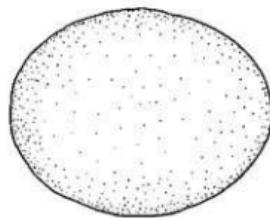
26



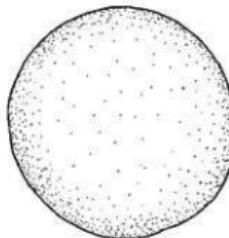
27



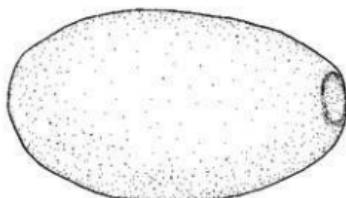
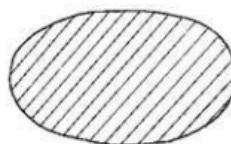
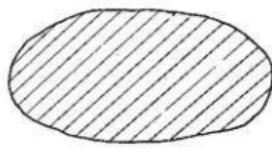
第36図 石器実測図（円石）



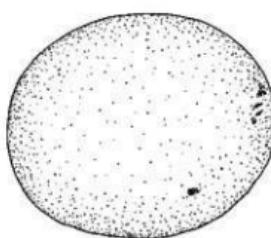
28



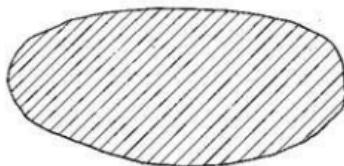
29



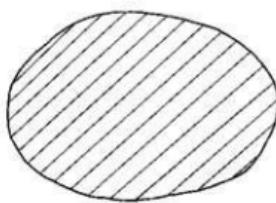
30



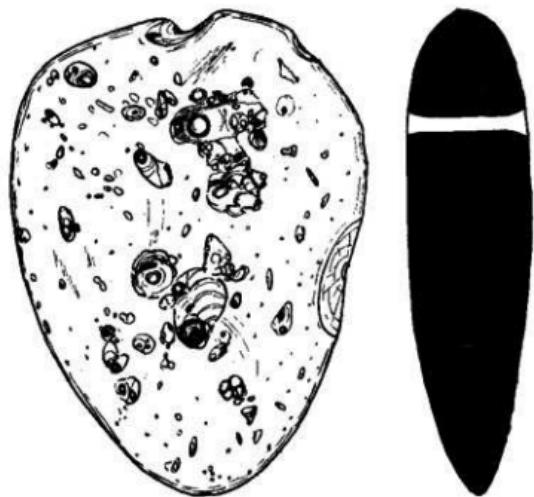
31



— 5 cm —

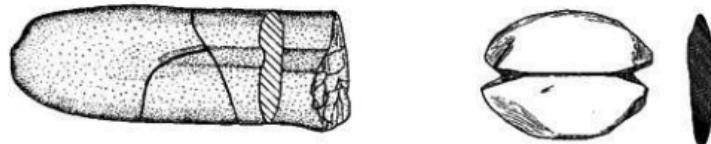
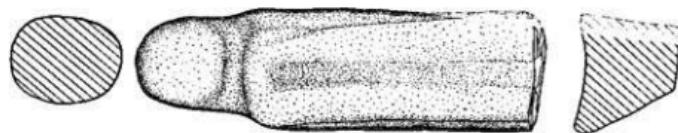
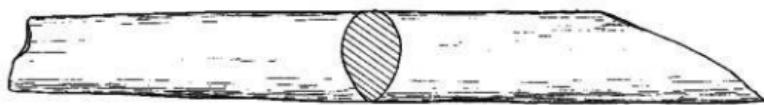


第37図 石器実測図 (磨石)



3 cm

第38図 石製品実測図（玉類）上・無石製、下・硬玉製



第39図 石製品実測図

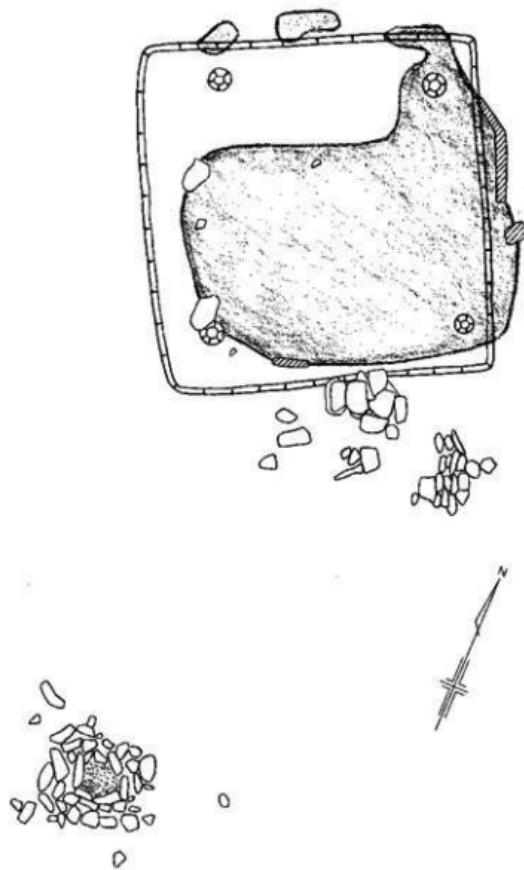
上：石刀

中：と石

下：右・石鏃 左・石刀様石器

第41図 配石遺構下出土・數石・方形住居址

■：木炭 ■：燒土



6. 松葉遺跡（都留市小形山字松葉）

小形山地区を流れる桂川の左岸河岸段丘上に位置する遺跡である。高川山に接する地域を上松葉、桂川に臨む地域を下松葉と称する。上松葉は現在中央高速自動車道により地域は二分されているが、東側はゆるやかな傾斜をなし宅地及び桑園となっている。地域の南端に稻村神社及び小形学校があるが、地元の人の話を総合するに稻村神社附近に、堅穴住居及び横穴があつた模様であるが、遺物の現存するものもなく詳細は不明である。掘の内地区に隣接する桑園の中にも堅穴住居があつた模様であるが前者と同様である。表探による遺物は僅少であるが、諸磯C、五領台、加曾利E及び土師であるが、中谷遺跡より旧い遺物が発見されているので中谷遺跡と並行して調査を継続したい地域である。

桂川に臨む下松葉からは、小形山1706番地佐藤伊太郎氏宅うらの桑園から土器片が採取されるが、いずれも中期の勝坂及び加曾利Eである。

7. 原遺跡（都留市小形山字原）

小形山地区を流れる桂川の左岸河段丘上に位置する遺跡である。いわゆる大原台地の一隅を占め、中溝遺跡の東北に接する地域で、桑園中から石鎌の出土する地域として知られていたが、昭和48年大原台地耕地整理の際アルドーザーが陥落したことから、工事人夫がアルドーザーの陥落した直下を掘った処、土製のかまどを有する土師の住居址を掘りあてたので、教育委員会において精査する積りの処、かまども破壊され乱掘されてしまったので発掘調査することが出来なかった。その際出土した土器片および附近から採取された土師壺片が教育委員会に保管されている。

大原台地の中では従来調査のゆきとどかなかった地域であるので、将来一層注意を要する地域である。

8. 下久保遺跡（都留市小形山字下久保）

川茂地区を流れる桂川は、菅野川に合流して大きく左折するが、その直前の左岸河岸段丘に位置する小遺跡である。いわゆる大原台地より一段低く、なだらかな傾斜をなして桂川に臨んでいる。昭和46年県下遺跡調査の際、調査員 奥、山本(正)が新らに発見した遺跡である。落合橋の対岸に当り、富士急行線により地域は二分されているが、遺物は多く軌道東側の桑畠の中から採取出来る。

表探により採取された土器片は、繊維土器及び諸磯Cの細片である。軌道西側の桑畠からは須恵器の破片が採取されている。桂川に臨む南西の台地であるが、従来調査の行届かなかった地域であるので、中溝遺跡との関連をも考慮して調査を継続する要がある。

9. 中溝遺跡（都留市小形山字中溝）

小形山地区を流れる桂川の左岸河岸段丘上に位置するいわゆる小形山大原台地のほぼ中心に存在する遺跡である。

大原台地は東西約 600m、南北約 700m、南北に開けた台地で、南方を桂川が蛇行し断崖を形成し、北方は高川が小さな渓谷を作り西から北に流れしており、西方は山裾となって、その山裾を南北に中央高速自動車道が走っている。富士急行線禾生駅から北に約 1km、田野倉駅から南に約 1km、両駅のほぼ中間に位置している。

標高 390m、段々の桑園及び水田となっていた地域で、西方の山あいに富士山頂を仰ぐことが出来る。

高川をはさんで台地の北方に権現原（中野原）、壠の内、松葉の遺物散布地、昭和47年発掘の縄文時代後、晚期の中谷遺跡を控え集落の想定される地域であるので、從来からも注目して調査を継続していた地域であったが、堆積土の厚いためか僅かに中溝の城之内菊造氏の桑園から土器片若干及び原部落から土器細片、石鏃、黒耀石片若干が採取されたのみであった。

従って県の遺跡台帳にも未登録の地域である。

昭和47年県立都留技能専門学校建設のため台地の東南角が整地された際も、數次の調査にもかゝらず僅かに石俸1個を採取したのみであった。その石俸もブルドーザーによって掘り起こされた土中から発見されたものを工事現場の人達によって採取されたもので、出土状況も、出土地点も層位の変化も明らかでない。

昭和47年秋「農林地域工業導入実施計画」に基づき、大原一円が整地されることになったので、あらゆる機会を利用して調査を継続、工事現場の人達にも異状を発見したら直ちに教育委員会に連絡するよう指導して来たが、僅かに土器片数個の発見届があったのみで、昭和47年もまさに暮れようとしていた12月29日、側溝掘削工事現場から、大型の土器片が多量に出土するとの連絡を受けたので早速調査したところ、100cm以上の地下から多量の土器片及び打製石斧を採取し住居址一軒を確認した。

整地された附近一帯からも土器片の散乱が見られたので集落址の確信を得、また工事終了後は水田となり遺跡の破壊されることが確認されたので、2月7日から2月25日まで19日間にわたり都留文科大学考古学研究会及び都留市青協の諸君の応援を得て発掘調査を行い、新らに住居址4軒を発掘し他に1軒を確認した。

調査終了後、ほどなく附近は区画された水田となり、地形は一変し発掘地点を知ることも困難な状態があるので、ここにその正確な位置を記録すると下記のとおりである。北緯35°36'、東経138°56'が遺跡の中心位置であり、現在、城之内菊造、平井秀雄、壠内猛、清水民子、平井亀吉、佐藤知徳、佐藤伊作、平井長生、佐藤正胤氏の水田となっている地域である。以下中溝遺跡発掘調査報告書を抜粋すると次の通りである。

第1章 遺跡の位置と調査の経過

第1節 遺跡の位置と調査経過 (省略)

第2節 発掘調査日誌 (省略)

第2章 調査の概要

第1節 層序

都留市小形山中溝遺跡は、桂川に向って緩かに傾斜している（ローム面は地表より傾斜が急である）小形山台地に位置し、耕地整理の際発見されたものである。

発掘が行なわれるまでに表上がある程度均されており、それ故原地形が多少変形されていたが、発見された住居址は、すべてローム層を掘り込んで構築されていた。

層位は、ローム層まで表土、黒色土、褐色土の3層からなっており、黒色土及び褐色土中には、層位になつてないが火山砂礫（スコリア）が含まれていた。

1号住居址は、耕地整理中発見されたため層位的には不明確である。2号住居址は、1部攢乱されていたが、黒褐色土、褐色土の2層による住居廃棄後の自然堆積が見られた。黒褐色、褐色は、火山砂礫の多少による違いと思われる。3号住居址は、耕地整理面（地表）から浅すぎたために不明確である。4号住居址も2号住居址と同様に、粘土状の暗黒色土、褐色土、黄褐色土、黄褐色土+ロームの4層による住居廃棄後の自然堆積が見られた。5号住居址は、2号住居址に拡張されたと思われ、貼り床であるローム+黒色土とその下の黒色土の2層に分けられる。6号住居址は耕地整理作業中に発見されたため詳しい層位は不明であるが、床面に赤褐色の火山砂礫が散在していた。

第2節 遺構

今回の調査により発見された遺構は、すべて住居址で、その数は6基である。住居址はすべてロームを掘った堅穴であり、発見順に1号、2号、3号、4号、5号、6号としたが、2号と5号また3号と4号が互いに重複している。

これらの遺構は、台地のは、中央部に北東—南西方向に並んで位置している。

1号住居址

直径6m弱の円形プランの住居址であると思われるが、側溝工事中の発見であり道路敷にかゝっていたため、約半分を発掘したにとどまつた。側壁は、北側の部分に20cmの深さで存在したが、他の部分は、工事中に既に破壊されていた。床はロームを硬く踏み固められてほぼ平坦であり、周辺部には周溝は検出されなかつた。

ピットは5個検出されP₁ P₂ P₅は深さが1mを越えるものであり、主柱穴と考えられる。またP₃ P₄は小型で浅いものである。炉はプランのは、中央部に位置し、北と東側だけに石があり、他の位置にはなく、四角形を呈し、上部には多量の焼土の堆積がみられた。遺物の出土状況は、床面より50cm前後の層を中心とし、北側はプランの外部にまで及んだ模様であるが、詳細は不明である。その量は、今回発見された住居址中では群を抜くものであった。

2号住居址

長径4.5mのほぼ円形のプランの住居址である。壁は、深さ40cm前後であり、西側の一部は、耕作により破壊されている。壁の東側半分は、傾斜が急では直立しているが、西側は、東側にくらべて傾斜はゆるやかである。床は北、東、南の周辺部がロームで、中央部と西の周辺部がロームと黒色土の混った粘り床であり、その下に5号住居址が存在する。

床のロームの部分は硬くふみ固められて平坦であるが、粘り床部は比較的軟らかく中央部の炉の周辺は多少窪んでいる。ピットは大きなものが8個、小さなものが11個それぞれ検出された。大きなもののP₁～P₈のうちP₈は柱穴とは考えられず、貯蔵用のものと思われ、中より若干の土器片が出土した。P₁～P₇は主柱穴で、直径40cm、深さ80cm前後である。また他の小ピットは、東側半分、すなわち床のロームの部分のみに検出されたが、西側の粘り床の部分にも存在したものと思われるが、検出することは出来なかった。これらの小ピットは、直径10cm、深さ10～20cmで、多くは壁のそばに存在し、斜めに掘られたものである。炉は多少北寄りであるが、ほぼ中央に位置すると言って良いであろう。形は五角形で北側の石はないが、炉の上に浮いた石がそれにあたるかも知れない。周辺部にも中にも焼土は全く検出されなかった。主柱穴の配置から、南側のP₄ P₅の間に入口が設けられたと思われ、S₃は熔岩であり、上下の面は多少平坦に加工されているようで、入口と何らかの関係をもつのではないかと思われる。またS₁ S₂は全面が加工され、直方体を呈し、S₂は3号住居址の炉石の一つと接合する。S₁ S₂は両方とも石質が同じであり、一つの石から作られたもので、石柱として住居址内に立っていたのではないかと思われる。

さらにS₃の東側の壁近くの床面から、土偶の頭部が、顔を壁に向いている状態で出土している。遺物の出土状況は、土器1セットが床面より20cm前後浮いて出土し床面からも若干の土器片が出土している。5号住居址を埋めて2号住居址新築後の拡張の痕跡は認められない。

3号住居址

直径4m弱の円形プランの住居址であると思われるが、床面近くまで耕作作業による擾乱があり、壁は南側半分に10cmほどの深さで存在し、北側には認められない。

また、西側の一部は、4号住居址の構築により切られるなど全貌は明らかでない。

床は平坦で硬いが、北側の一部に真赤な火山礫が検出され、図面の点線で示した範囲まで床面は確認されている。ピットは全部で8個検出されたが、南側の壁を切って作られたピットを除いては大きなものではなく、中央部に炉を囲んで、ほぼ四角形に配置された四個は、深さ40cm前後ではあるが主柱穴と思われる。炉はほぼ中央部に位置し、五角形を呈し、南東部の石は2号住居址のS₂と接合する。また、焼土は全く検出されなかった。遺物の出土状況は床面附近より若干の土器片と石斧の出土にとどまった。

4号住居址

南側にくびれた部分を有する不整形プランの住居址で、最も長い東西方面は5.6m、最も短いくびれ部を有する南北方向は4.4mであり、東側の一部が3号住居址を切っている。また壁は50cmの深さを有するが、西側の一部は、旧側溝により若干削られている。全体的に直立した面ではなく、西側の傾斜は、かなりゆるいようである。また中ほどに3号住居址の床面で検出された火山礫が5cmほどの層を形成している。床は平坦で硬く踏み固められているが、西側は若干軟弱なようである。ビットは大きなものが10個、小さなものが9個、浅い縞みが1個存在した。大きなビットはP₁₀を除いて深さ80cm前後で、P₁ P₂ P₃ P₄ P₆は斜めに掘られている。P₁～P₁₀は柱穴であるならば、主柱穴であると思われ、一住居址にしては多すぎるようである。またP₁₁は深さ10cmほどで、炉の石が抜き取られたものと思われる。小ビットは、2号住居址同様壁のそばに点々と存在するが、東側半分のみに限られている。炉は中央より若干西に寄った位置にあり、五角型で北側は小型の石で囲っている。焼土は周辺部に若干認められたが、中からは検出されなかった。

この住居址は、おそらく西側に拡張がおこなわれたであろうと思われる。遺物の出土状況中、特に注目したいものに、床面より40cm前後に玉、土偶の足部が発見されていることである。その下からも土器片が出土したが、完形品は存在しなかった。

5号住居址

2号住居址の貼り床の下から発見された長径4.4m、短径4mほどのほぼ円形のプランの住居址である。南側の一部に張り出し部を有する。この部分は入口が設けられていたと思われる。壁は、西側を除いて2号住居址建築時に削られ25cm前後である。また西側の壁は2号住居址と共通であるが、旧側溝により上部は破壊されている。床は比較的軟らかく、若干の凹凸が存在する。ビットは、大きなものが、2号住居址のものを除いて7個、共通のものが1個と小さなものが24個検出された。P₃は共通であるが、5号住居址の床面に達してからは広くなり、貯蔵用のものと思われる。また他の主柱穴について、西側は壁より離れているが、東側は壁の附近や壁を切って掘られたものがある。小ビットは壁の附近に点々と存在し、東側の一部のみ検出されなかった。炉はほぼ中央部に位置し、五角形であり、焼土は上部に若干堆積していた。そして中から土器の胴部のみの埋葬炉が発見されたが、焼土はほとんどなかった。2号住居址の炉との位置関係は、5号住居址の炉が西に寄って一辺を接するように並んでいる。出土遺物は、埋炉縗と若干の土器片のみであった。

6号住居址

工事中に四角形の石圓炉が発見され、土器片がかなり出土したが、詳細については不明である。

A地点

調査前に多量の土器が出土したが、遺構は確認できなかったようである。

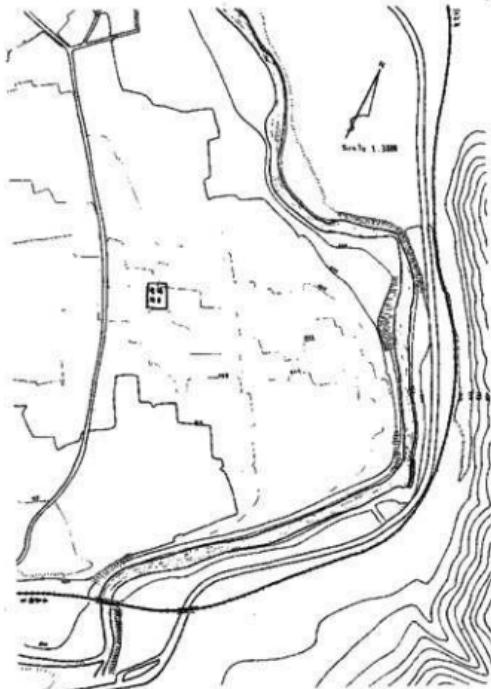
B地点

工事中に数個の完形土器が直立して発見されたとの報告をうけ、調査団が調査したところ、2mほどの円形堅穴が発見された。壁は30cm前後の深さを有し、床は火山礫であったが、遺物は全く検出できなかった。工事中発見の土器は、この堅穴よりはるかに上層より出土したことであるが、この堅穴との関連は不明である。

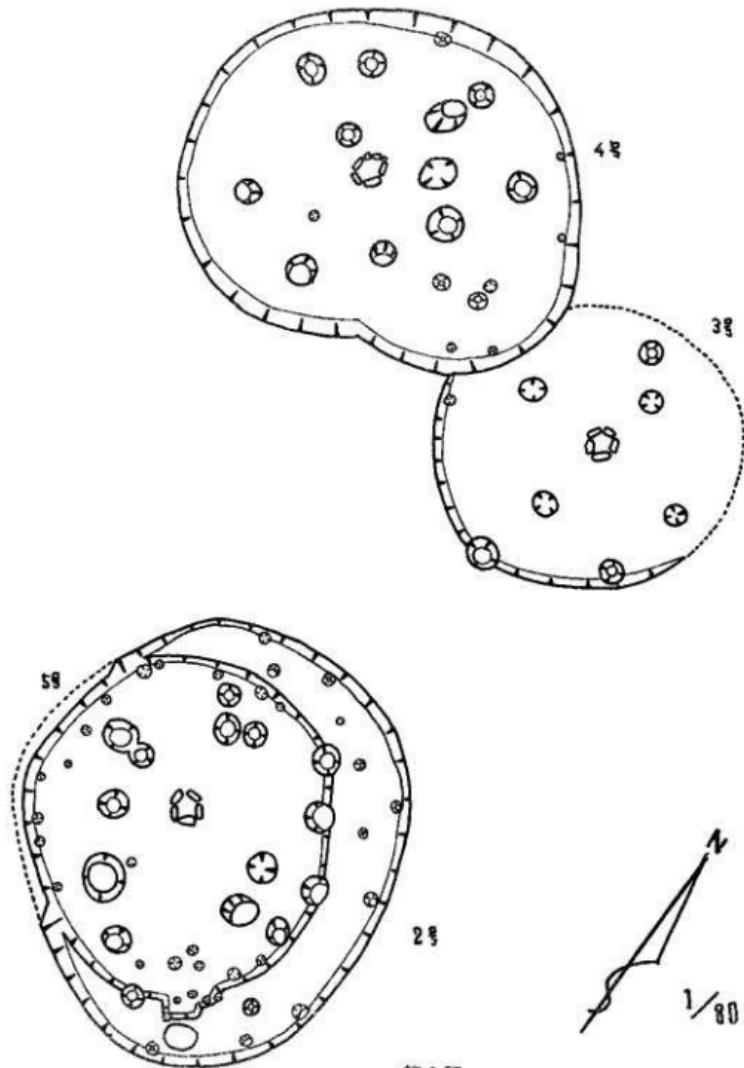
以上各遺構について述べたが、2～5号住居址を中心に、共通する点、注目すべき点として次のようなものがある。

- 壁高がかなりある 2・4・5号
- 周溝がない 1・2・3・4・5号
- 壁のそばに小ピットが存在する 2・4・5号
- 炉が五角形を呈する 2・3・4・5号

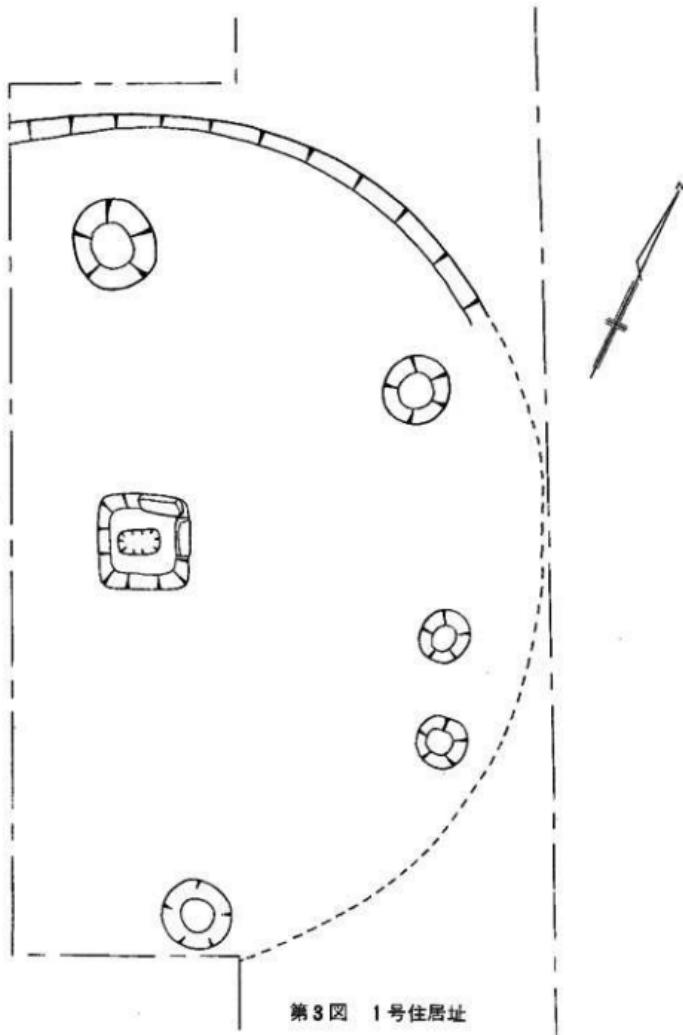
(里村亮一)



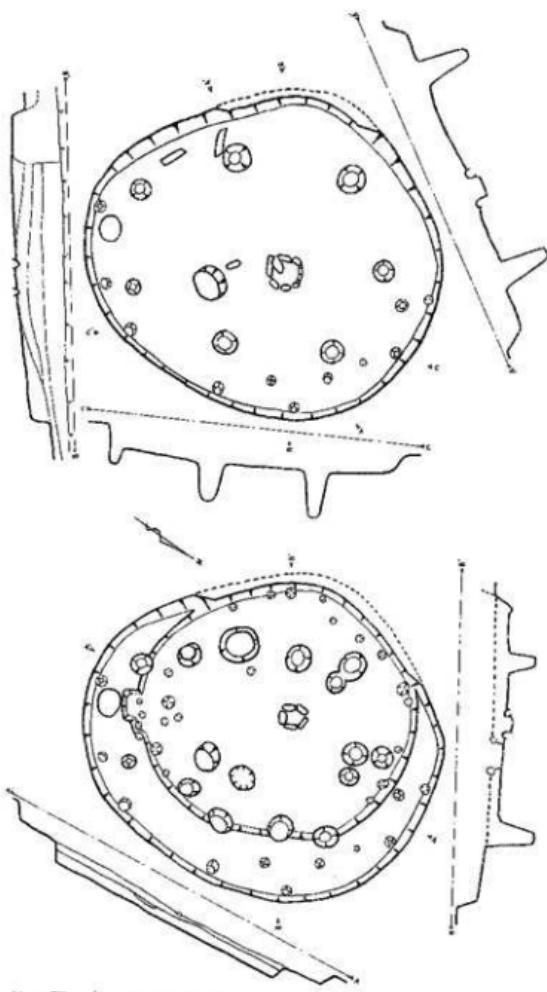
第1図 遺跡地型図



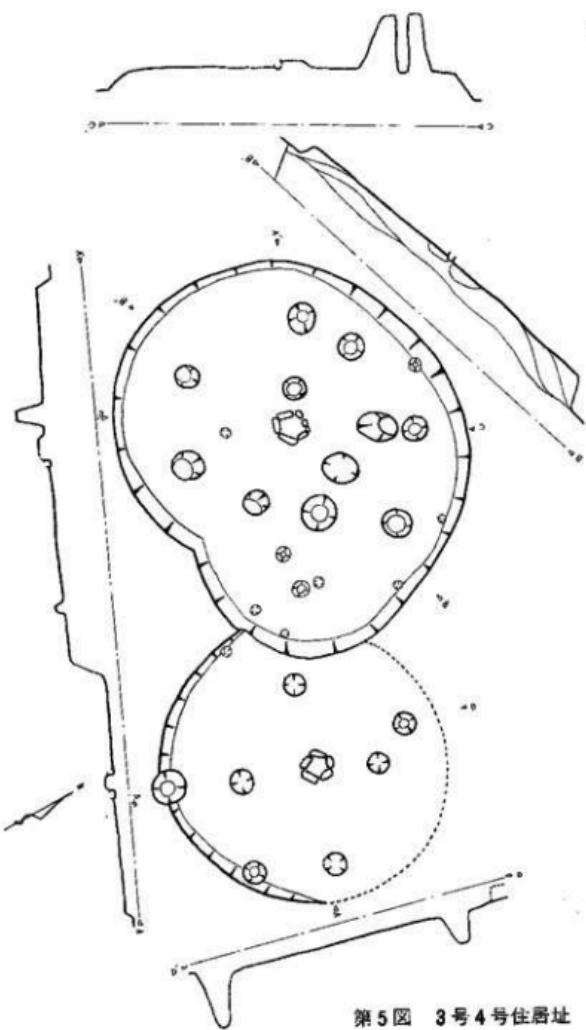
第2圖



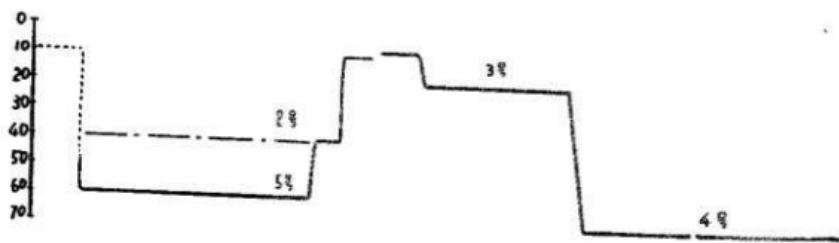
第3図 1号住居址



第4図 2号 5号住居址



第5図 3号4号住居址



第6図 住居址レベル模式図

第3章 出土遺物

第1節 土器

1号住居址（第7、8、9、図-1～14）出土土器

復元可能な土器として深鉢形土器10個、小形無文筒形土器2個、浅鉢形土器1個があり、その他に多数の土器片が出土し、廃棄した住居址に土器を投込んだ、いわゆる“吹上げパターン”としてとらえることができよう。発見した土器は、次の4つに分類出来る。

第1類土器（第7図-1～6）

連続爪形刺突文、連続平形刺突文によって浮き出された隆線により、複合三角形文等の横帯区画文が構成され、又波状沈線が施された土器を一括し、1を除き外は焼成が普通であり、赤褐色を呈し、胎土には砂粒が多量に含まれている。

1、無文の口縁が朝顔状に開いた深鉢形土器で、口唇部には3個づつ組になって3ヶ所の押し引があり、胴部は一面に連続爪形刺突文により浮き出された隆線が、三角形と平行四辺形を書き、横帯区画文を構成し、その内側には連続爪形刺突文及び波状沈線を施している。

2、筒状に近い土器で、連続平形刺突文により浮き出した隆線によって、胴部は複合三角形、口縁部は半円形と台形の複合文により横帯区画文が構成され、又下部には逆「L」字形の隆線があり抽象的な感じがする。

3、弱い「L」字形をした口縁で、口唇に4つの捻り把手を持つ深鉢形土器で口縁部には焼成後一对の穴を穿っている。文様は、連続爪形刺突文により浮き出した隆線により半円型と三角形と平行四辺形が複合した文様を構成している。波状沈線は上部の一本が沈線で、外は連続爪形刺突文により施されている。

4、筒状に近い土器で、口縁部に二条の太い沈線により三本の隆線を浮き出し、胴部は連続爪形刺突文により浮き出した隆線により長階円形の連続文を二条と横位の隆線を構成している。下部は単節斜繩文が施されている。口縁直下には一对の穴が穿たれている。

5、大型破片からの復元図である。口縁が外に開いた深鉢形土器で、口縁と底部附近は無文で、胴部には横位に連続爪形刺突文及び連続山形刺突文を施し、隆線及び波状沈線を描いている。

6、底部を欠く浅鉢形土器で、口縁部分に一条の押圧された隆線があり、その上には波状沈線をはさんで二条の連続山形刺突文が施されている。

第二類土器（第8図-7～10）

隆線により、縦体区画文が描かれている土器群で、焼成は良好であり、黄褐色～赤褐色を呈するものが多い。

7、蛇身把手を持つ筒形の土器で、蛇身把手はトクロを巻き、かま首を持ち上げている感じである。胴部の主体文様は、隆線により区画文を行ない、その内側には

隆線及び沈線が施されている。隆線によっては連続刺突文等が施され蛇身を表わしている。区画文が発展した土器と考えられる。

8、「く」字形に屈曲し、波状の口縁部を持ち、底部を欠く深鉢形土器で、隆線及び半裁竹管による平行沈線によって直線又は渦巻の隆線を浮き出した感じを持たせ、縦体区画文を描いている。隆線によっては連続爪形刺突文が施されている。区画された内側には地文として、ヘラ状工具による沈線が全面に施されている。

9、「く」字形をした口縁を持ち、胴部がくびれ、底部を欠く深鉢形土器で、8と同様に竹裁竹管による平行沈線により、区画が行なわれ、横位に連続爪形文が三本施され、これを境に地文が上部から平行沈線、無文、単節斜繩文の順に施されている。模倣区画文の影響が残っていると考えられる。

10、深鉢形土器であり、口縁部は無文で、胴部に隆線を貼り付けた上に二条の連続刺突文を、その両側には平行沈線が一条から二条、その片方の外に連続刺突文がそれぞれ施され、蛇身を表わしていると思われる。

第三類土器（第9図-11）

11、「く」字形をした口縁を持つ深鉢形土器で、全面に単節斜繩文が施され、一対の穴が穿たれている。焼成は良好で茶褐色を呈する。

第四類上器（第9図-12~14）

無文土器を一括した。

12、口縁部が肉厚く、底部は丸みを帯びた大型の深鉢形土器で、焼成は良好であり黒みがかった褐色を呈する。

13、14、小型の筒形の土器で、焼成は良好であり、13は黒っぽい褐色、14は赤褐色を呈しており、粗製といって良いであろう。

2号住居址内出土土器（第10図-15~21）

復元可能な土器としては深鉢形土器4個、浅鉢形土器と思われる底部破片が1個セットして出土した。又深鉢形土器も高さが各40cm、18.5cm、18.5cm、15cmと大小のセットになっている。

15、弱い「く」字形をし、波状の口縁を持ち、底部を欠く深鉢形土器で、連続爪形刺突文により隆線を浮き出し、浮き出された隆線により、胴部に複合三角形、口縁は変形した三角形、円形、底部附近は階円の連続文がある。その外波状沈線が一条施されている。焼成は良好で、茶色がかった褐色を呈する。

16、15と同様な底部附近の破片であろう。焼成は良好である。

17、口縁がやや開いた深鉢形土器で、横位に三本の半裁竹管による平行沈線を三

条配し、平行沈線間と平行沈線と底部の間に縦位に3つの、いわゆる「ムカデ状文」を5列配している。その他に文様は無く、焼成は良好で、茶褐色を呈する。

18、口縁がやや内湾した無文の深鉢形土器で、口縁直下には一对の穴が焼成後穿たれている。焼成は悪く、粗製であり、薄い茶褐色を呈する。土器内部は黒色を呈し、炭火物の付着したものかと思われる。

19、全面に単節斜繩文が施され筒形に近い小型の上器で、焼成は良好であり、茶褐色を呈する。

20、「く」字形をした口縁を持ち、底部を欠く浅鉢形土器で、口縁直下に連続刺突文を施した波状隆線があり、その下は連続爪形刺突文が一条施されている。焼成はやや悪く、褐色を呈する。

21、やや丸みをもった浅鉢形上器で、口縁部に二条の隆線と、その間に連続爪形刺突文を持つ波状隆線があり、二ヶ所でそれぞれ二本に分かれている。胴部には単節斜繩文が全面に施されている。焼成は良好で、褐色を呈する。

3号住居址内出土土器

復元可能な土器はなく全く破片であり、しかも土器片の数も少ない。連続爪形刺突文が主文様で、これにより三角形又は隋円を浮き出させている。又波状沈線も多く見うけられる。焼成は良好であり、褐色を呈するものが多い。

4号住居址内出土土器（第11図-22）

22、底部がやや開き鼓型に近い深鉢形土器で、口縁と胴部の上部には単節斜繩文を施した隆帶があり、胴部は連続瓜形刺突文により浮きだした隆線により隋円の連続文が構成される。その内側には波状沈線が施されている。焼成は良好で、暗い茶褐色を呈する。

5号住居址内出土土器（第11図-23）

発見された土器は全て破片で量も少ない。

23、は5号住居址の埋甕で、深鉢形土器の胴部破片である。単節斜繩文を地文とし、その上に連続刺突文による波状沈線を施し、又連続爪形刺突文による波状沈線を施し、又連続瓜形刺突文により浮き出された隆線によって複合三角連続文を構成し、三角形の内側には沈線による三叉文が描かれている。焼成は粗悪で、暗い茶褐色を呈する。雲母片が、他の住居址の土器に比べ、多量に含有されている点が注目される。

6号住居址出土土器（第11図-24～27）

完形としては小型杯形土器で、外は大形破片である。

24、杯型の小形土器で、単節斜傾文をほぼ全面に施している。焼成は良好で、褐色を呈する。

25、底部を欠く深鉢形土器で、小把起を1個持ち、口縁部に隆線だけで文様構成が行われ、胴部以下は無文である。焼成は悪く、暗い褐色を呈する。

26、27、口唇に捻り把手を持ち、文様は連続平形刺突文及び連続爪形刺突文及び波状沈線により構成している。焼成は良く、両方とも暗褐色を呈する。

住居址外出土土器（第12図-28-30）

28、深鉢形土器で、口唇部と口縁部には把手があり、文様は連続瓜形刺突文により、隆線を浮き出し、浮き出された隆線により、口縁部及び胴部は複合三角形連続文、底部附近は長階円の連続文があり、口縁部区画文の内側には連続山形刺突文による三角形および波状沈線が、胴部の区画文の内側には連続山形刺突文による三角形文及び沈線による三叉文が施されている。その他、連続山形刺突文による波状沈線及び単節斜繩文が施されている。焼成は良好で、暗褐色を呈する。

29、「く」字形の口縁部を持つ深鉢型土器で、隆線により複合三角形連続文等を描いた後に連続爪形刺突文を隆線の両側に施している。口縁部には横帶文及び把手がある。焼成は悪く、底部附近が褐色のほか、その他の部分は黒褐色を呈する。

30、胴部がくびれた深鉢で、波状の口縁は内側からテニスボール状の物体によって押し出されている。文様は単節斜繩文を地文とし、半裁竹管による沈線により区画が行なわれ、特に胴部は複合三角形連続文を描き、上部の逆三角形は、繩文の上に沈線による溝巻き及び三叉文が施されている。胴部の下には、平行沈線が施されたたんこぶ状の把起が四つある。焼成は良好で、下部は淡い褐色を、上部は黒っぽい褐色を呈している。
(森本圭一・竹内清志)

中溝遺跡土器の穿孔について

中溝遺跡出土の土器を見渡すと、穿孔の施してある土器が多いことに気付く。この遺跡出土の土器28個のうち、5個（1号住居址、3・4・6・11）2号住居址¹⁸が穿孔を施されており、18%におよぶ比率であり、特に1号住居址においては30%にも及ぶ。これらの穿孔を施されている土器のうち、1号住居址11は、他の口縁部分に穿孔が施されているものと異なり、胴体の中ほどに、右下さがりの状態で2個の穿孔がある。すべての穿孔は、だいたい直径4～5mmで「つづみ」状又は「円筒」

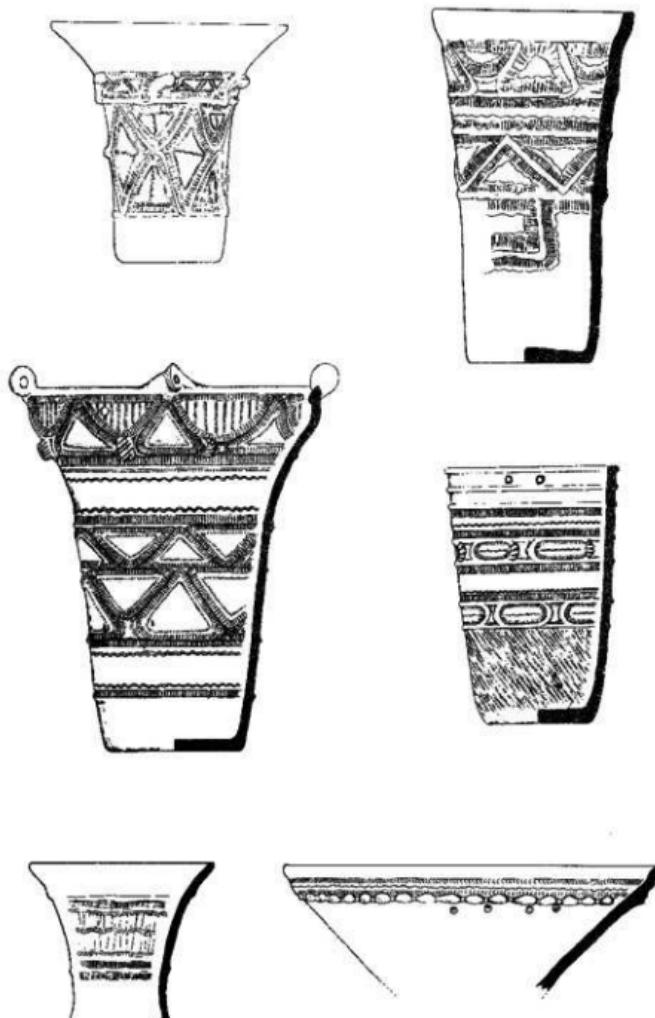
状をなし、「つづみ」状の穿孔の場合土器の外側から作業を行い、最後に両側の孔周辺部分を整形したものと思われ、「円筒」状のものは、土器面に垂直に外側と内側の孔の直径が同じになるよう穿孔が施されている。またこれらの土器はすべて、土器製作後に穿されたものと思われ、横列に2個づつ穿孔されている。

穿孔目的については、破損土器の修繕と一般に思われている。たしかに1号住居址6、の浅鉢などは、破損した土器片をつなぐため、口縁部に土器本体と土器破片に1個づつ2対の穿孔を施してあることによって、つなぎ合わせられていたと思われる。そして、穿孔を施してある土器のほとんどは2個の穴の間に割れ目が存在する。穿孔の後何らかの圧力で2個の穴の間に割れ目が生じるのは、力学的に不自然であるので、やはり割れ目を修繕するための補修孔であろう。

(竹内清志)

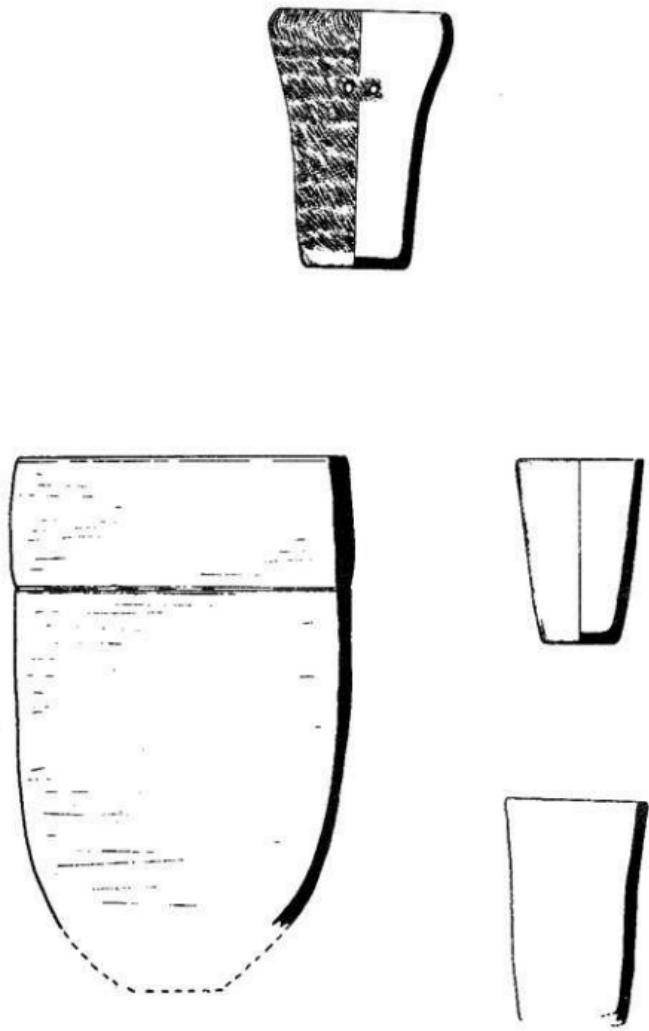
出土土製品住居址別集成

種類 順位	土 器		顔 面 把 手	土 偶	耳 桟
	深 鉢	浅 鉢			
1号住居址	13	1	1	2	1
2号住居址	5	2	2	1	
3号住居址					
4号住居址	1			1	
5号住居址					
6号住居址	1	1(わん 形)		1	

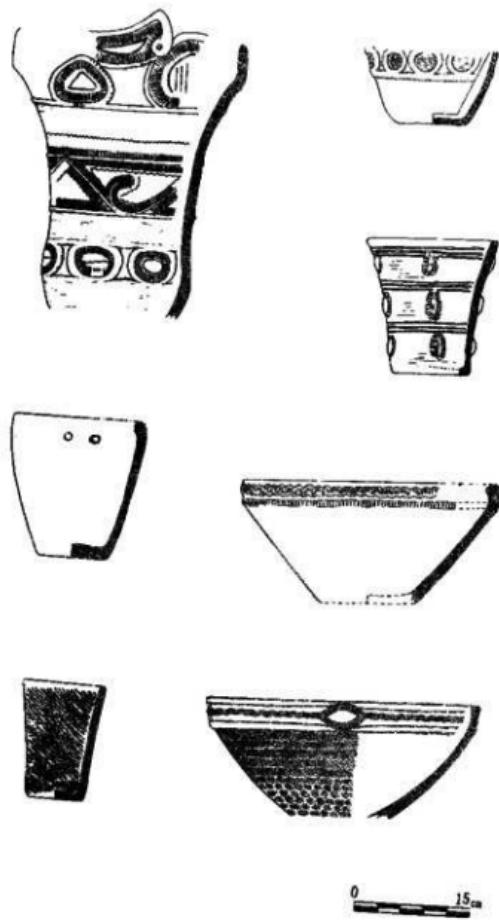


第7圖 1號住居址出土土器
(第一類)

0 15cm



第9図 1号住居址出土土器 0 15cm
(第四類)



第10図 2号住居址出土土器



5号住居址出土土器

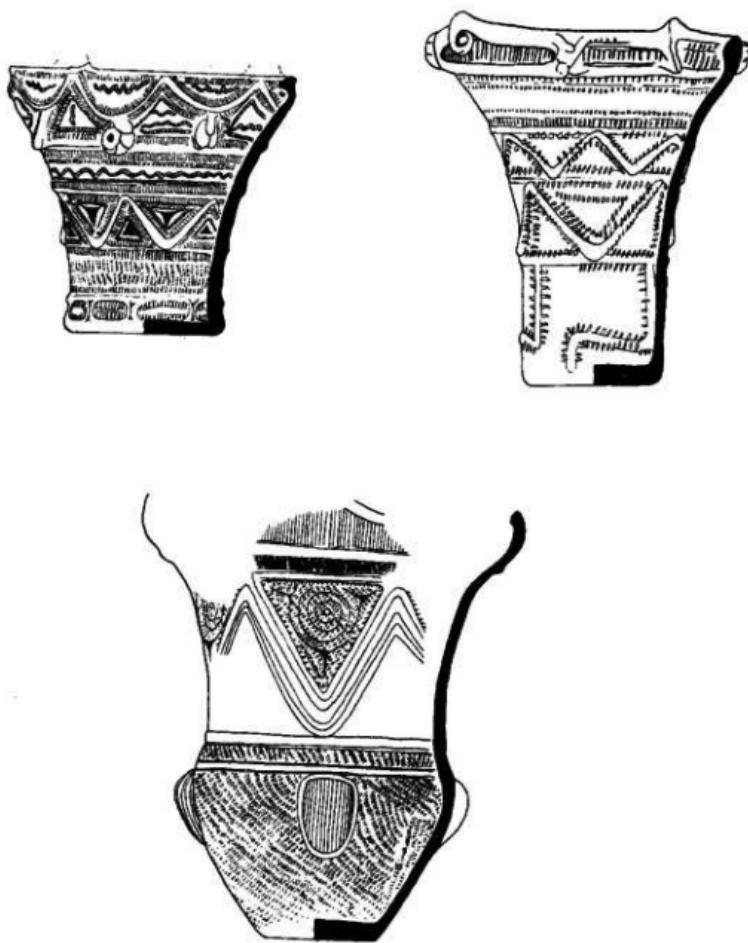
4号住居址出土土器



6号住居址出土土器

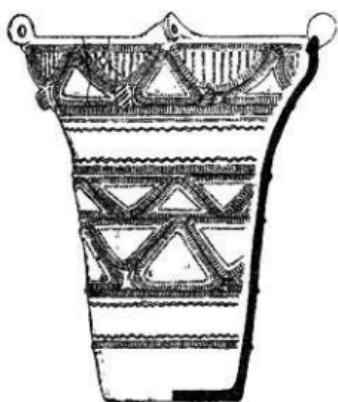
0 15 cm

第11图 4.5.6号住居址出土土器



0 15 cm

第12图 住居址外出土土器



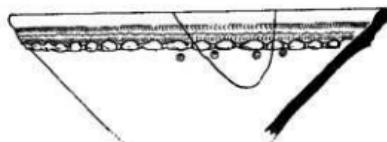
1号住居址 3



1号住居址 4



1号住居址 11



1号住居址 6



2号住居址 18



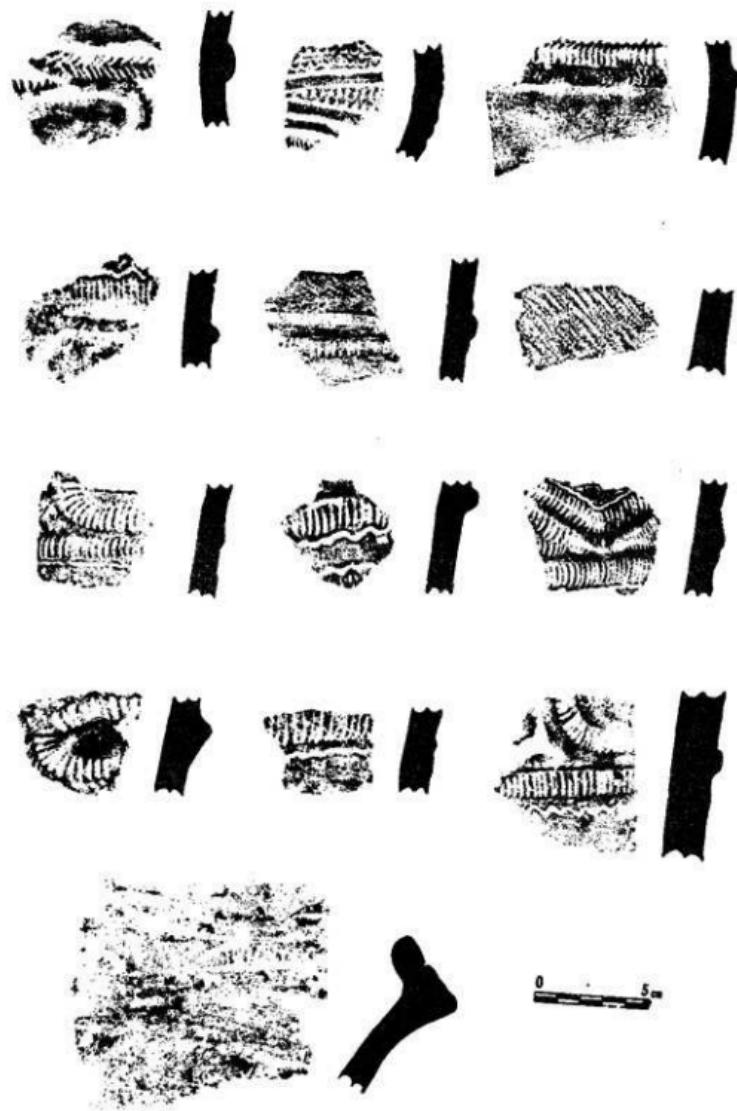
第13図 穿孔を有する土器



第14図 2号住居址出土土器拓影

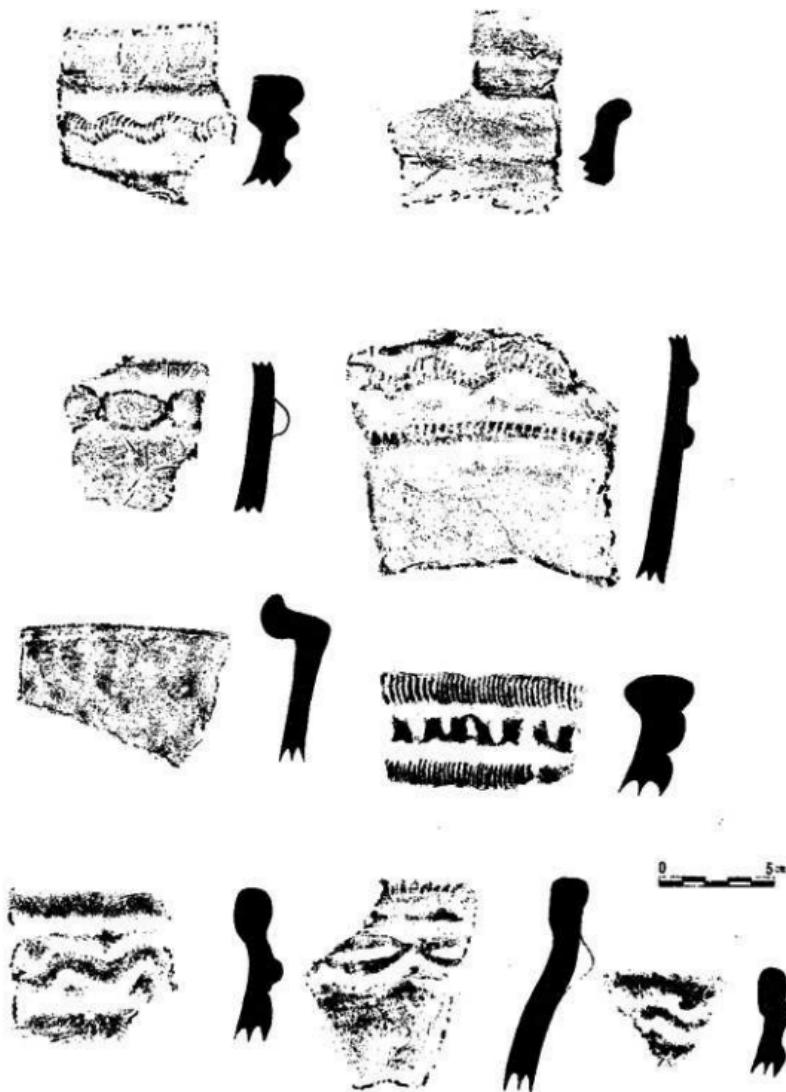


第15図 2号住居址出土土器拓影



3号住居

第16図 3号住居址出土土器拓影



第17図 4号住居址出土土器拓影

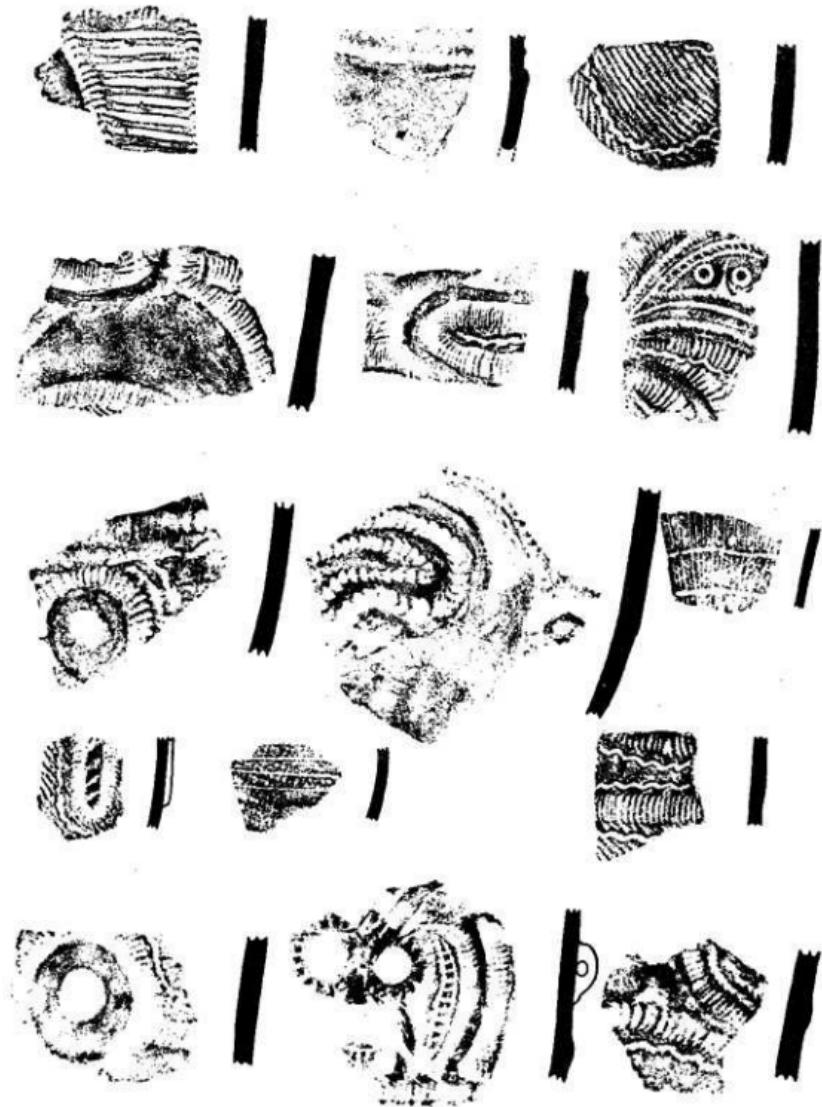


第18図 4号住居址出土土器拓影

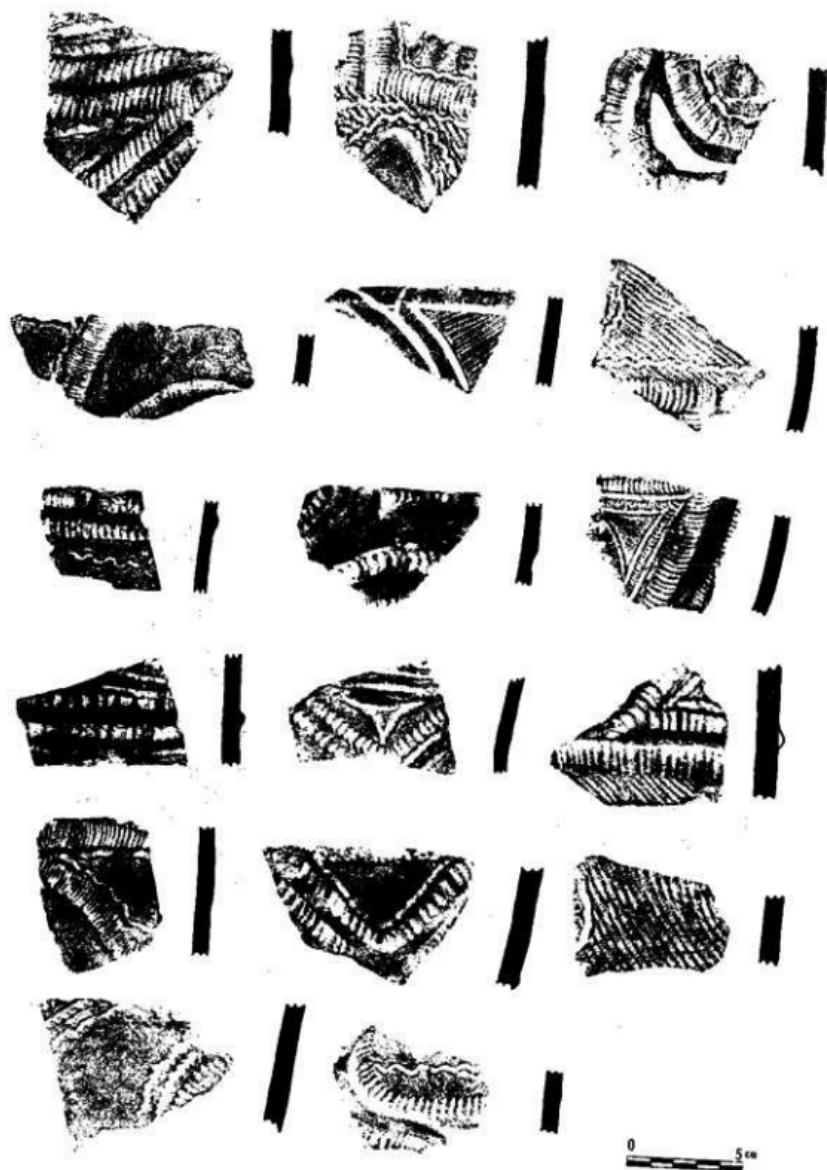


第19図 5号住居址出土土器拓影

0 5cm



第20図 6号住居址出土土器拓影 0 5cm



第21図 6号住居址出土土器拓影

(112)

第2節 土製品

土偶および耳栓

中溝遺跡の土器以外の土製品は土偶および耳栓である。

土偶は全部で5個出土した。その内訳は1号住居址から2個、2号住居址から1個、4号住居址から1個、5号住居址から1個の計5個で、いずれも住居址内から発見された。

耳栓はただ1個1号住居址から発見されたが、破損して他の土器片と共に採取されたもので、正確な出土状況は不明である。滑車型のもので焼成は良好で、褐色を呈し、黒色に焼成された部分があり、少量の雲母の混入が認められる。

土偶I

土偶Iは工事現場の人達が側溝を掘った際、1号住居址の覆土中から採取した土器片を整理中発見したものであるので、一応1号住居址内出土の遺物と想定されるが、出土状況、出土地点、層位等は不明である。

厚さ2~3cmの扁平、板状の土偶で頭部、両うでおよび左脚部の一部を欠いている。ヘラ状の工具の先端を利用して描いた沈線文様が両脚部側面および前面にあり、背面は無文である。右脚部側面の文様は、3本のくの字型をした沈線が平行して描かれ、下方の一本が先端を右廻りに、ワラビの頭の様にぐるりと円を描いている。

左脚部側面の文様も、3本のくの字型の文様がほぼ平行して描かれ、一番上の一本がその先端をやはり右廻りにまるく円を描いている。

前面には、右脚部の中心を1本の沈線が底部まで縦に走っており、左脚部の中心にも同様の沈線が1本縦に走っているが、下部を欠いているので先端の状況は不明である。左右の沈線の上部からV字型に陰部を現わすかの如くに2本の沈線が描かれているが、先端が欠損部にあたるため不明である。胸部の中心からも1本縦の沈線がV字型の中心に向って走っているが、下部を欠いているため性器を現わしたものか、左右の脚を区別するものか、単なる文様か不明である。

胸部には乳が左右突出している。

頭部は欠損しているが、頭部を接着する欠損部の中心に1mm×2mmの小孔が深さ3.3cm程ほぼ垂直にあけられている。これは頭部を接着するために細い竹片などとして使用した心棒の跡か、後述の土偶IIの頭部中央にも同様の小孔が見られることから心棒穴と推測されるが、同様な事例が塩山市中萩原重郎原遺跡出土の土偶に見られる旨報告されているが興味深い発見である。

現存部の高さ6.5cm、肩巾3cm、底部4.5cmで、焼成は良好、褐色を呈している。

土偶II

土偶IIも同偶Iと同様、1号住居址覆土中から採取されてあった土器片中から発見されたものであるので、一応1号住居址内出土遺物と推測されるが遺憾ながら出

土状況、出土地点、層位等は不明である。

円錐形の上部を欠いた形をしており、2個の乳状突起から土偶胸部片と推定される。前面にはヘラ状の工具の先端をおしつけながら描いた巾2mm程の沈線が左右の乳の中心を通って上部から下端まで描かれており、その沈線と平行に2本の沈線が上部から乳の内側の線まで描かれている。乳の周囲も同様な沈線でふちどられている。左右共5本の同様手法の沈線が上部からほぼ等間隔に直すぐに下部まで描かれしており背部は無文である。

残存部の上部径3.2cm、下部径4.3cm、高さ4cm、黒褐色を呈し焼成は良好であり少量の雲母の混入が認められる。

土偶III

2号住居址東側壁近くの床面に裏向きに置かれている状態で発見された。

半円形の顔かたちをしており、髪形と思われる約1cm巾の外周に、左右に2本、上部に3本の沈線が描かれている。勝坂式土器に見られる顔面把手の容貌と同一で、目尻が上り、眉から鼻にかけて隆起帶となり鼻下に2個の小孔で鼻の孔を現わしている。口は二等辺の逆三角形型をして深くあけられ開口した状態を示している。

頭部は○型、および△型の浮彫状の文様で飾られており、残部は三角形を主体とした刺突によって深くえぐられており、結髪の状態を示したものではない。

下部の中心部と両端に、刺突部に対して垂直に貫通する直径3mmの小孔があけられている。頸部の中心にも直径2mmの丸い小孔があけられているのは、胸部と接着するために用いられた心棒の跡と思われる。

残存部の高さ10.5cm、巾8.3cm、焼成は良好で褐色を呈し少量の粒砂の混入が認められる。

土偶IV

4号住居址北側床面直上の覆土の中から裏面を上にした状態で発見された。

非常に写実的に作成された足くびで5本の指が巧みに表現されている。くるぶしの直上で切損しているが残存部の長径7.9cm、巾4.5cm、厚さ3.1cmである。

もし1個体に附着した足くびとすると、非常に大きな土偶のものと推定されるが、同住居址内出土の土製品中に同一個体のものと思われる破片は何も発見されていないので、最初から足くびだけであったものか。

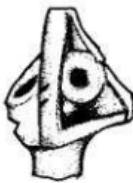
焼成はやや粗であり、赤褐色を呈し雲母の混入が認められる。 (奥 隆行)



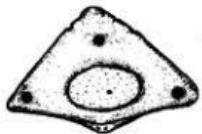
2号住居址



1号住居址



2号住居址



6号住居址



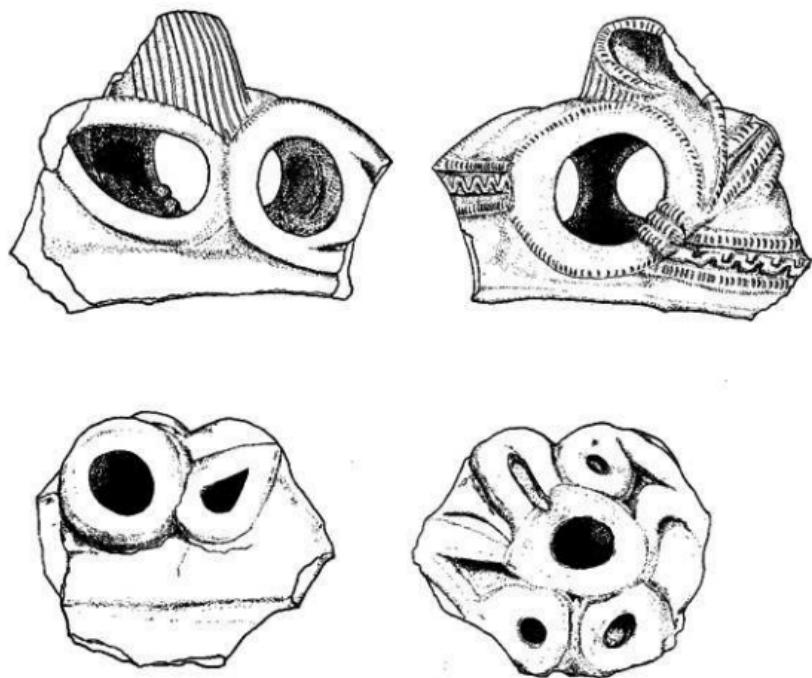
1号住居址



4号住居址



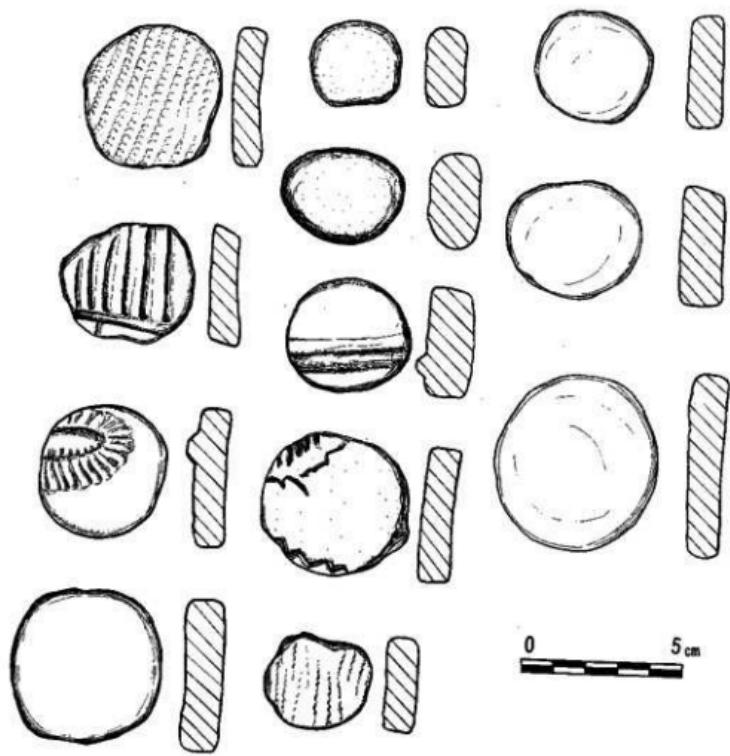
第22図 出土土偶・耳栓



0 5 cm

2号住居址

第23図 出土顔面把手



第24図 出土土製円盤

第3節 石製品

出土石製品住居址別集成

種類 順位	磨石斧	石鎌	石匙	石皿	凹石	打石斧	玉	磨石
1号住居址	11		2			21 9(片)		2
2号住居址	1(片)		1	1		3 5(片)		
3号住居址	1		1			6		5
4号住居址	1	2	1	1(片)		18 24(片)	1	10 3(片)
5号住居址								
6号住居址	1(片)		2			17		

(片) ……破片

中溝遺跡の石器については、上表を参照されたい。まず全体的に言えることは、打製石斧の大量出土と、石鎌の微少、大型粗製品匙の出土である。

1号住居址と6号住居址は、耕地整理の工事中に偶然発見されたものであり、両住居址共に、未発掘の範囲もあるために、上表の出土土器の対比は参考程度にとどめたいと思う。

3号住居址は、耕地整理後発掘したものであるが、耕地整理面より住居址面まで浅く、遺物が多少散失している恐れがあるため、出土量において、はっきりした数ではないかもしれない。

又5号住居址は、何らかの理由で廃棄されて、その真上に2号住居址が構築されている。石器の出土は皆無である。

これらのことから注目されるのは、各住居址から磨製石斧が1個づつ、石匙が1～2個づつ出土している点であり、これを特記しておきたい。しかしこの中溝遺跡の2号住居址に代表される打製石斧の少なさと、凹石の皆無、石皿の稀少は、今後の研究の一課題として取り上げておきたい。

I、石鎌

石鎌は、4号住居址より2個出土しており、共に黒曜石製である。製形のための小さな加工痕のみを有する。

II、石匙

第25図1は、1号住居址より出土したもので、後面は母岩からの剥離面をそのまま用い、前面に刃部の細かな加工を行なっている。石質は頁岩である。2も1号住

居址より出土し、片岩質のかなりの硬度をもったものである。3は2号住居址、4は3号住居址、5は4号住居址、6・7は6号住居址よりそれぞれ出土したものでいずれも頁岩質である。出土石匙は、すべて大型粗製のものであり、1.3.4.5.7が横型、2.6が縱型である。横型のものはいずれも横巾が10cm前後、縱型のものは縱巾が8cm前後である。

III、磨製石斧

第25図8は、1号住居址より出土したものである。破損した乳棒状石斧を再び研磨したものである。刃部には圧痕が見られるが、鋭どさはない鈍端である。9は、3号住居址より出土したものであり、16cm×3.2cmの乳棒状石斧で緑色を呈する片岩質であり、刃部はていねいに研磨してある。10は、4号住居址より出土したものであり、15cm×4cmの片岩質乳棒状石斧である。刃部は、少々破損している。11は、乳棒状石斧の欠損品であり、片岩質である。

IV、打製石斧

出土した石器中最も多く出土し、欠損品、破損品、完形品合わせて103個数えられる。ほとんどのものわ短冊型であり、分鋼型を呈するものは、ほとんどなかった。

調整は粗く、整形した後、第2次加工によって細かく調整されている。石質は安山岩と頁岩であり、頁岩質のものは石斧としての用に足りるかどうか疑問視せざるをえないほどもろいものが多数ある。これらの石材は、当地によって簡単に入手し得るものである。

V、石皿

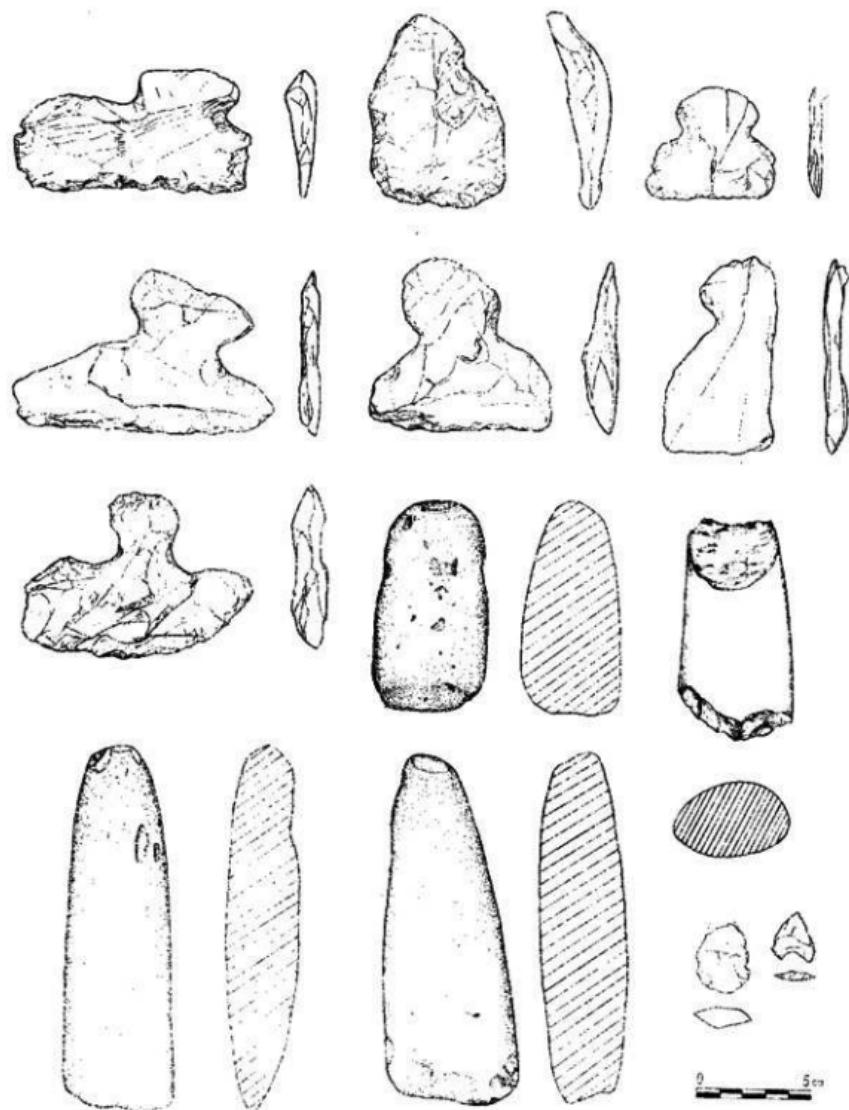
第30図は、4号住居址より出土したもので、使用面はあまりくぼんでおらず、平面に近いものである。その他のものは、住居址外より出土したものであり、前者と同じ石質のものである。

VI、磨石

第31図7は、一度破損した面を磨いて作ってあり、磨石の用途の一面を考えさせる上で重要だと思われる。3の花崗岩質を除いて、すべて安山岩質であり、表面は一様に使用痕跡が存在する。

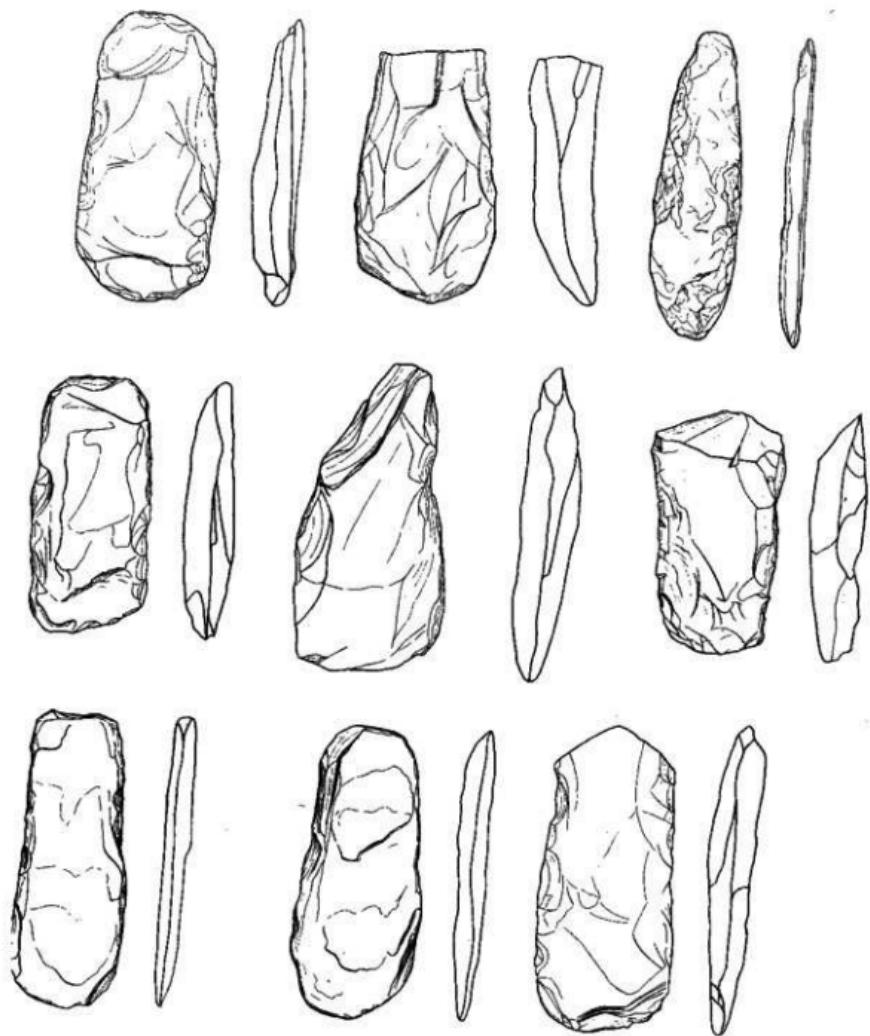
VII、玉類

第31図8は、4号住居址より出土したものであり、5.9cm×1.2cmの大型の玉で、三ヶ月型を呈し、上部より1.5cmのところで両面より穿孔が施されているが貫通していない。全体的に灰白色で、よく研磨されており、加工し易い滑石製である。

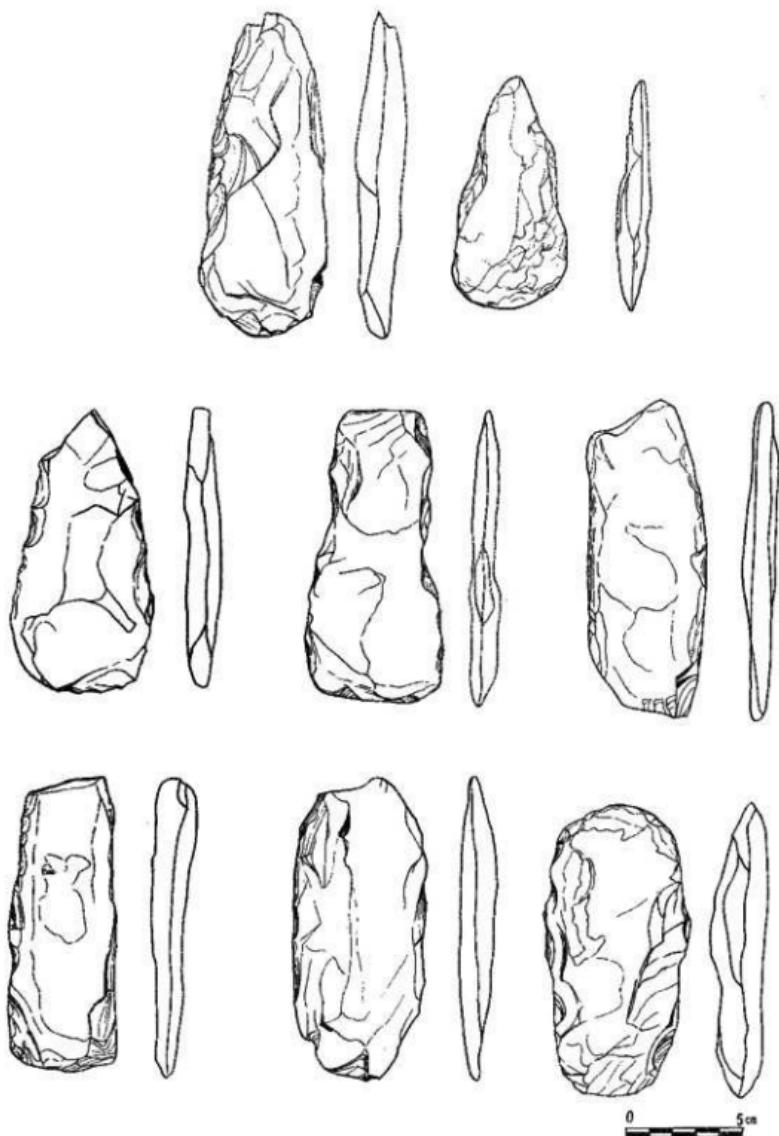


第25図 石器実測図（石匙・磨製石斧）

(120)

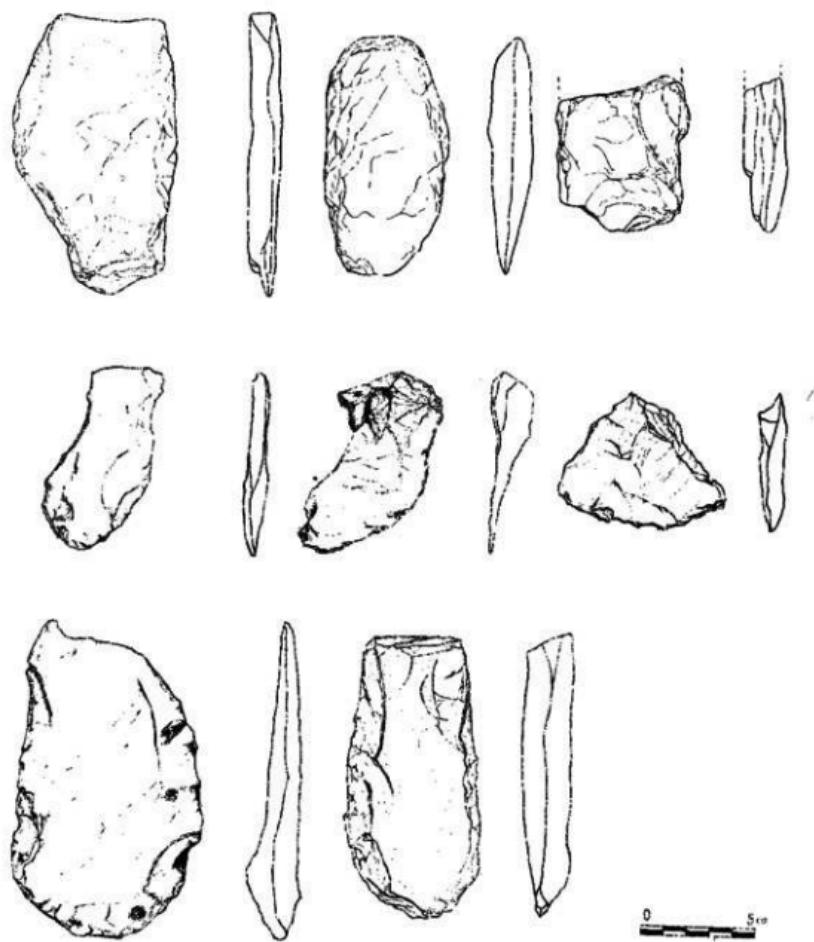


第26図 石器実測図
(1号住居址出土打製石斧)

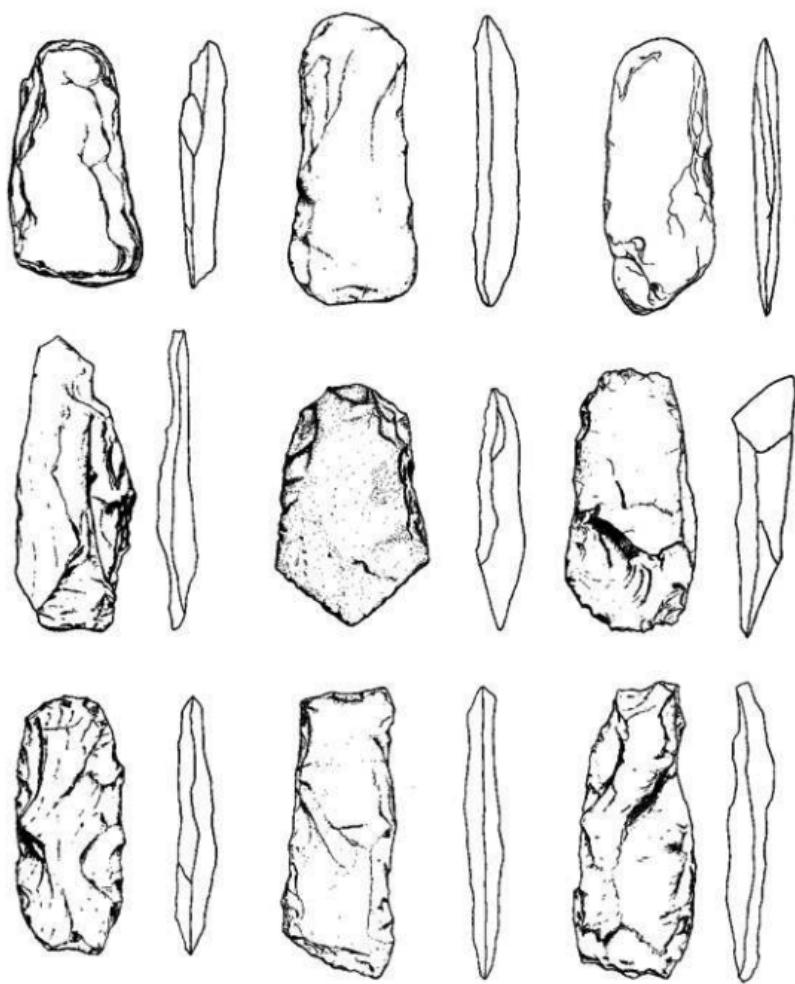


第27図 石器実測図
 (打製石斧)

(122)



第28図 石器実測図
 (打製石斧)
 上 4号住居址
 中 6号住居址
 下 6号住居址



0 5 cm

第29圖 石器實測圖
(6號住居址出土打製石斧)

フルヤド
10 古宿遺跡（都留市小形山字古宿）

高川山の南麓に位置し、すぐ前を桂川にそそぐ高川が流れている。高川の南岸は川茂から横吹に通ずる尾根となり、山あいの東西につらなる南面の台地である。

大棚と共に古くから遺物の出土する処として知られているが、散逸してその割に現存する遺物は少ない。東側の桑園および西側の台地上の宅地から土器片が採取されるが、諸磯B、および勝坂の破片である。南側は水田となり遺物の採取は伝えられない。北側は高川山の山麓となっており、中央山あいの窪地が大棚まで続いている。遺跡写真にも見られる通り、南面の絶好の台地であり衆落の想定される地域があるので、継続して調査を行う必要のある地域である。

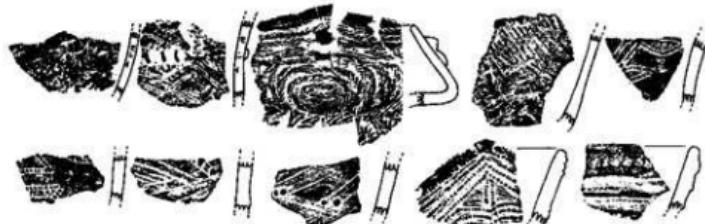
11. 大棚遺跡（都留市小形山字大棚）

前記古宿部落の中央を北に登ること約10分で大棚部落に達する。昔は大棚7軒と称して一部落を形成していたが、明治39年の山崩れで部落の大半を押し流され、現在では原田 実（小形山2919）、安富 篤（小形山2879）の二軒があるのみである。

古宿と共に古くから遺物の出土する地域として知られ、原田氏が採取した土器片および石器類を所持していたが散逸して現存しない（昭和37年度調査の際の写真だけが残っている）。原田氏の土蔵のある所は皆山裾で、整地した際大きな穴があつた山、横穴と思われる。土蔵と家の間に原田氏の言によれば住居址がある由である。

安富氏の家のすぐ西隣りに竪穴住居址があり、ごみ捨場に使われているが、まだ完全に埋まりきっていないので半月形に輪かくの一部が見られる。附近から安富氏が石棒を採取、戸沢正蓮寺戸沢独米氏が所有している。人家より下方は桑園および水田となり、上部は桑園である。

高川山山腹の傾斜面で、東西を小さな沢水が流れ、部落入口で合流している。昭和47年2月林道が開通して自動車の通行が可能になった。48年9月の調査によって削られた土手の側面に住居址3軒（内2軒は土師、1軒は不明）が確認され遺跡の範囲も二軒屋より上部にその中心があることが確認された。黒浜・諸磯B、C、勝坂および土師、須恵器の破片が採取されるので、長期にわたり衆落の営まれた処と想定され、将来本格的調査の望まれる遺跡の一つである。



拓影・8

12. 美通遺跡（都留市井倉字美通）

井倉地区を流れる菅野川（宮川）の右岸河岸段丘上に位置している小遺跡である。東方を落合で合流する朝日川が流れ、三角状の台地を形成しているが、昭和10年頃耕地整理が行われ一面の水田となっている。

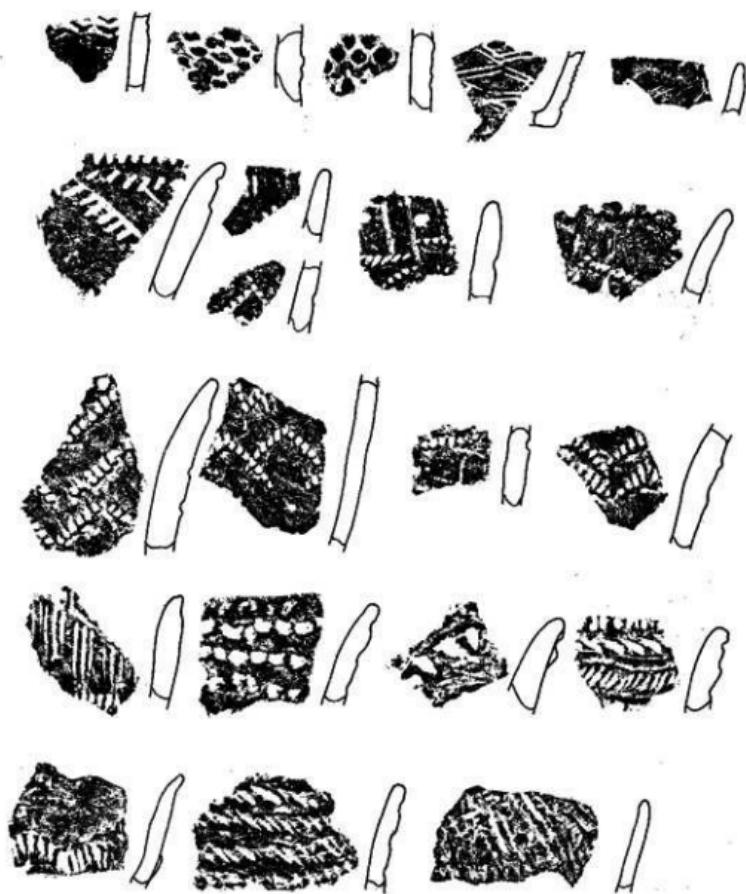
耕地整理の際多量の土器片が出土し、禾生第一小学校に保管されていた由であるが、戦後の火災により焼失して何も残っていない。

耕地整理の際残土を禾生第一小学校庭庭に入れた由なので、古川渡から土器片が出たと伝えられているのは、或いは美通出土の遺物かも知れない。（現在古川渡地区からは土器の出土する地点は見当らない）。

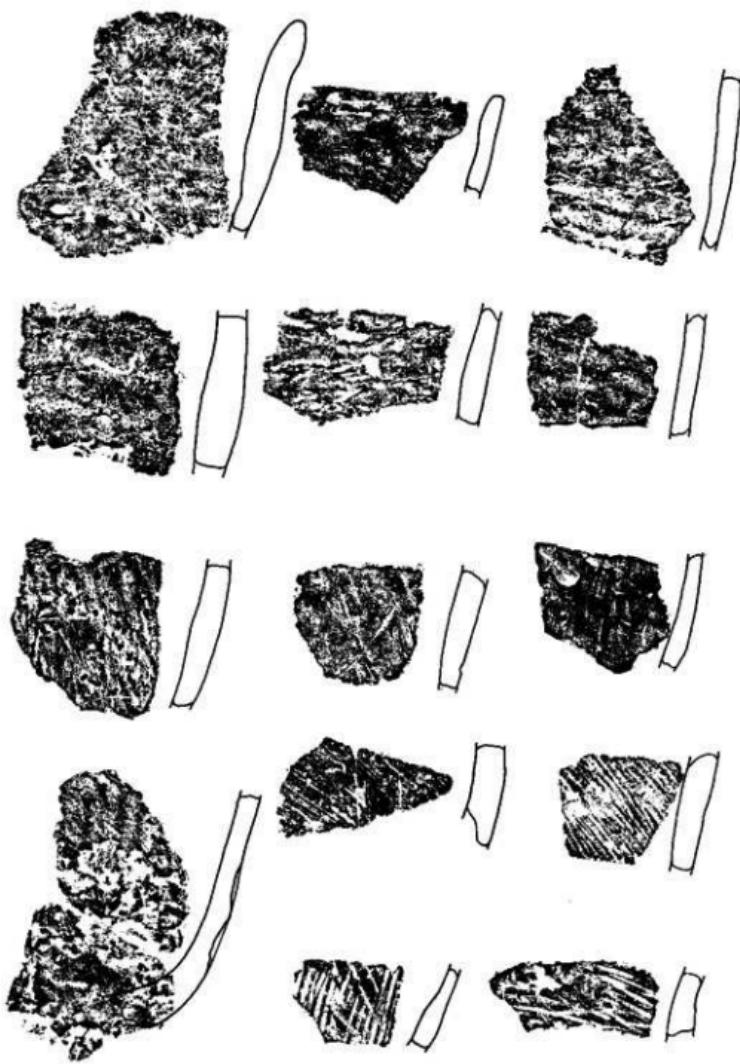
耕地整理を免がれた禾生郵便局長・平井正元氏（都留市井倉388）の宅地内から遺物が採取出来るが、現在までに採取された土器片は黒浜式、諸磯C、五領台、加曾利E、堀の内、加曾利Bの他ただ一点ではあるが早期の隋円押型文の細片が出土し関西系と思はれる土器片も出土しており、早期から後期かけての複合遺跡と思われ将来本格的発掘調査の望まれる遺跡である。

美通遺跡については昭和47年4月15日から28日までの間13日にわたって都留文科大学考古学研究会部長（当時）山本正則君が単独にて発掘調査を行なった。発掘面積を限定されていたため、所期の目的を達する事は出来なかったが、縄文早期、前期、中期、各期にわたる土器片を層位的に発掘、一応の成果をあげた。

詳細については、山梨史学研究会発行史陵5（1975.4）に山梨県都留市・美通（縄文早期）遺跡概報を発表している。



拓影·9 美通遺跡



拓影·10 美通遺跡

13. 生出山山頂遺跡（都留市四日市場）

市内四日市場にある郷社生出神社の裏山である。生出神社との間を菅野川が流れ渓谷を作っている。清泉寺に至る吊橋を渡り山頂まで約80分、標高 701.4m、昭和46年四日市場地区の遺跡調査の際、地元大野雅之氏から戦時中山頂附近で松根油採取のため松の切株を掘り起こしたところ、土器片が出土したことがあり、戦後山頂奥の院に於ける最後の祭典（昭和37年第一石産に充却のため）の際再度土器片を採取した旨伝聞したので、6月登頂調査したが山頂は藪に覆われ調査は容易でなかつたが、6月15日第3回目の調査により山頂奥の院の礎石端より東南東 8.8m の位置から弥生式土器片、2個体分數10片を得た。

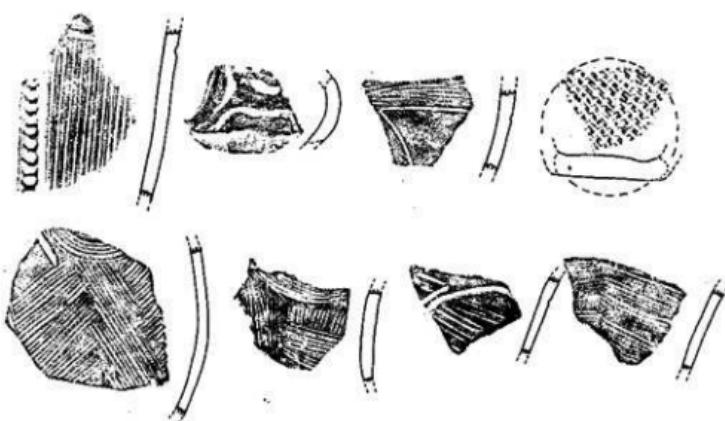
その後戦前出土の土器片3ヶを得たが勝坂式1、加曾利E式1、網代底1個で何れも縄文式のものであった。

往時は山頂に池があったと伝えられているが現在はない。南側の沢に如何なる干天にも潤れたこそがないと伝えられる沢水がある。

山頂は東西約20m、南北約30mの削平された平地で、奥の院の礎石が残っている。晴天の際には河口湖まで遠望出来、富士山の眺めはすばらしい。

本市唯一の山頂遺跡であるが、発掘調査が行われたことがないので、祭祀跡か住居跡か或いは墓跡か詳細は不明である。

現在は生出山石産の所有であり、現在山頂直下まで採石が進行しているので、機を見て本格的発掘調査の望まれる遺跡である。



拓影・11

おわりに

都留市には現在57ヶ所の遺跡が発見されています。都留市の先史遺跡上巻では、そのうち旧谷村地区、旧禾生地区の遺跡29ヶ所についてその概要を記録しました。

昭和37年の調査では、37ヶ所の遺跡が確認されていましたので、其の後20ヶ所の遺跡が新たに発見されたわけです。

併しながら其の反面、先学仁科義雄、羽田一成氏等によって発見、報告された遺跡で、現在其の位置を確認することの出来ない遺跡もまた沢山あります。

遺跡の正確な地番が不幸にして記録されなかったためです。近々10年、20年前のことでも時間が経過してしまうと本当に分らないものです。当時採取された遺物もまた殆んど伝わっていません。

宅地の造成により、工場の建設、農地の拡張により、地形は急速に昔の面影を変えて行きます。再び前者の轍をふまない為にもと思い、昭和40年代末の都留市の先史遺跡の現状を記録したのがこの小冊子です。

遺跡の調査に、遺跡の保存に役立てば幸いと思います。そして又この小冊子を手掛かりに都留市の先史時代の全貌の一日も早く明らかになることを願うものです。

この本は筆者がとり纏めたものですが、大変大勢の人達の協力によって出来あがったものです。序文の中にも早くから御苦労をされた方々の名前をあげてきましたが、その他に大勢の方々の御協力を頂きました。報告書は原文のままとし、その他土器の編年については江坂輝弥慶大教授、国学院大学のO B 小林政三氏の御教示を頂きました。

住吉遺跡発掘の告書は筆者と都留文大O B 山本正則君の合作です。中谷、中溝遺跡報告書については山本寿々夫先生の責任監修です。又各項の末尾に筆者の名前を明記して置きました。

各種実測図は都留文科大学考古学研究会の諸君及びO B 森本圭一、山本正則、竹内清志、里村晃一、川合良彦君達の労作です。土器拓影は奈良泰史、佐々木克典両君の御協力によるものです。

心良く所持の遺物を見せて下さった方、進んで市に寄贈された方、忙しい農作業の手を休めて遺跡を案内して下さった方、大勢の方々の御厚意に深く感謝の意を表する次第です。

都留市文化財審議員
山梨県遺跡調査団監事
都留市文化財調査員

奥 隆 行

書名ふりがな つるしのせんしいせき(じょう)

書名 都留市の先史遺跡(上)

副書名

巻次

シリーズ名 都留市埋蔵文化財調査報告

シリーズ番号 5

編著者名 真 隆行

編集機関 都留市教育委員会

発行機関 都留市教育委員会

発行年月日 1976.12.01

作成法人ID

郵便番号 402-0053

電話番号 0554-45-8008

住 所 山梨県都留市上谷 1-1-1

遺跡名ふりがな にしあたいせきほか

遺跡名 西畠遺跡ほか

所在地ふりがな やまなしけんつるしとざわあざにしあほか

遺跡所在地 山梨県都留市戸沢字西畠ほか

市町村コード 19204

遺跡番号 2040001

北緯

東経

調査期間

調査面積

調査原因

主な時代

遺跡概要

特記事項

都留市の先史遺跡(上)

昭和51年11月25日印刷
昭和51年12月1日発行

編集 都留市文化財審議会

責任者 奥 隆 行

発行者 都留市教育委員会

*印 刷 えとりオフセット印刷 TA33451

